

『えくすちえんじ!』

Dual Face Childen

巽 ヒロヲ

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

プロローグ

(仁徳天皇の)六十五年、飛騨国に一人有り。宿儺と曰ふ。其れ為人、体を一にして両の面有り。面各相背けり。頂合ひて項無し。各手足有り。其れ膝有りて臑踵無し。力多にして軽く捷し。左右に剣を佩きて、四の手に並に弓矢を用ふ。是を以て、皇命に随はず。人民を掠略みて楽とす。是に、和珥臣の祖難波根子武振熊を遣して誅さしむ。

『日本書紀』 りょうめんすくな 両面宿儺についての記述

Zeon PDF Driver
www.zeon.com.tw

第一章

葛城知巳は、ベッドに入ってもなかなか寝付けなかった。

早めの夕食後、いつもの通り公園まで軽くランニングをし、人気のない広場で三十分あまりシャドウで体を動かした。

鉤状に曲げられた人差し指と中指が特徴的な、変則的な構えと動き。巻き起こす鋭い風に、はらはらと散っていた桜の花びらが巻き込まれ、思わぬ動きを見せる。

今は単身海外にいる父親が、つい昨年まで知巳の体に叩き込んだ、独特の格闘術だ。

古武道、葛城流柔拳術。

知巳は、そのご大層な名前が、父親に対する反感もあって、あまり好きではなかった。それでもトレーニングはほとんど欠かしたことがない。

もはや、こうやって体を動かしてからでないと、眠りにつけられない体になってしまっている。

そして、家に帰り、ストレッチをしてからベッドに潜り込んで、朝までぐっすりと眠る。それが、知巳の日常のはずだった。

しかし知巳は、まだ火照りの残る体を、布団の中でもてあましていた。

暗い部屋の中、見慣れた天井に顔を向ける。

凜々しい、という表現がぴったりくるような整った顔には、しかし、まだどこか少女っぽい甘さが残っている。特に笑った顔などは、双子の妹である朱美にそっくりだと、よく言われたものだ。

知巳にとってみれば、それはあまり嬉しい言葉ではない。

その上、妹の朱美はボーイッシュなタイプだ。よせばいいのに髪型まで同じようなショートカットにしているので、ますます同じ顔に見える。

知巳は、朱美といわばセットで「男と女なのによく似た双子」として見られてきた。

そんな知巳を、和泉彩乃は、「双子の片割れ」でなく、大げさに言うなら「一人の人間」として見てくれた。

「彩乃……先輩……」

意識せずそうつぶやいて、つぶやいた自分に、知巳はちょっと驚いてしまう。

昨日の、金曜日の夜、知巳はこのベッドの上で、初めて彩乃と結ばれたのだ。

枕には、まだ彩乃の綺麗な黒髪の香りが残っているような気がする。

自分の腕の中でうねる、白い裸身……。

トランクスの中で、知巳の若いペニス、むくむくと隆起してしまう。

「……」

知巳は、少しためらった後に、自らの股間に手を伸ばした。

その、金曜日の夜

「面白かったね、知巳くん」

テレビ画面の、黒をバックに流れるスタッフロールから知巳の方に顔を向けて、彩乃は言った。趣味のいいメガネの薄いレンズに、知巳の顔が映っている。

学校から帰った後、ファーストフードで食事をしてから、両親も妹もない自分の家に彼女を呼び、ゲーム機で再生したDVDを鑑賞する。経済的にけして潤沢とは言えない二人の、ささやかなデートだ。

DVDは、何年か前に公開された、殺し屋と少女との恋物語である。

悲しいラストに、知巳の目は、不覚にも少し潤んでしまっている。

そのことに気づいた彩乃は、ふっと微笑んで、言った。

「知巳くん、やっぱり優しいのね」

「そ……そんなこと、ないですよ」

知巳は、彩乃と付き合い始めてからも、先輩後輩の筋目をつけるべく、敬語で通している。

「俺は、こういう話に弱いんですよ。なんだか可哀想で」

「それだけ素直なのよ、知巳くんは」

白い肌と黒い瞳が特徴的な、純和風の顔に似合った落ち着いた声で、彩乃は言った。

「あたしなんか、ダメね。映画観ても、つい“監督はどうしてこんなラストにしちゃったのかなあ”とか考えちゃう」

「そう、ですか……」

「うん」

そう返事をする彩乃の顔が、思いのほか近くにある。

「知巳くん……」

赤い唇が、どこか濡れたような声で、知巳の名を呼ぶ。

「こんな時にキスをねだっちゃったら、映画の感動が台無し？」

知巳は首を横に振って、そして彩乃の細い肩に手をのせた。

そして、目を閉じ、唇を寄せる。

まだ数えるほどしか触れていない、柔らかな感触。

舌と舌を、お互いの気持ちを探るように、触れ合わせた。

息が苦しくなるまで、じっと唇を重ね合わせる。

顔を離れたときには、メガネの奥の彩乃の瞳も、うるうると潤んでいるように見えた。

「先輩……」

自分の声が震え、上ずっているのを情けなく思いながら、知巳は言った。

彩乃が小首をかしげると、癖のないつややかな長い髪が、さらさらと動く。

「今日は……その、朱美も、親もいないから……もし、よければ……」

「うん、分かってる」

彩乃は、にっこりと微笑んだ。そうすると、落ち着いた、大人っぽい印象のその顔が、妙にあどけなく見える。

「実は、あたしも、期待してたの」

「先輩」

再び、知巳は彩乃に口付けをした。

膝立ちになって、互いの体に腕を回し、抱きしめ合う、情熱的なキス。

制服越しの感触のなまめかしさに、知巳のその部分が、きりきりと立ち上がっていく。

「先輩……先輩……」

キスの合間に、知巳はそう繰り返していた。

「知巳くん、可愛い……」

女顔がコンプレックスの知巳にとっては、可愛いと言われることは屈辱でしかないはずなのだが、彩乃に言われると、なぜかぞくぞくとした快感を感じてしまう。

そして、知巳の股間のものは、まだ触れてもいないのに、のっぴきならない状態になってしまっていた。

その股間に、彩乃が、いたずらっぽく太ももをおしつける。

「あッ……！」

もぞもぞと動く感触に、知巳は、慌てた声をあげた。

しかし、まさに時すでに遅し、だ。

「だ、だめです！ それ……あ、あ、ああ、あッ……！」

知巳は、無意識にきつく彩乃の体を抱きしめながら、制服のスラックスの中で、したたかに射精してしまったのである。

何枚かの布越しに彩乃の太ももと密着したペニスが、びゅくん、びゅくん、と律動を続けた。

「うふ……」

彩乃は、その清楚な顔立ちに似合わない、淫らな笑みを浮かべた。

「ご、ごめん、先輩……俺……」

はぁっ、はぁっ、と荒くなった息の合間に、知巳はどうか言い訳しようとする。しかし、これ以上はないというくらいの羞恥と屈辱でぐちゃぐちゃになった頭では、何を言ってもいいやら思いつきもしない。

と、彩乃は、その顔に微笑を浮かべたまま、知巳のベルトのバックルに手をかけた。

「あ……」

驚愕のあまり言葉の出ない知巳のベルトを外し、スラックスを脱がしていく。

大量の精で重たげに濡れたトランクスが露になった。その中で、まだ半勃ちの知巳のペニスの様子が、はっきりと分かる。

「ごめんね、知巳くん。あたし、こういう女なの……」

生ぬるいスペルマで汚れたトランクスの上から、愛しげにペニスに触れながら、彩乃は言った。

「軽蔑するでしょ、知巳くん」

そう言いながら、知巳のペニスをあらわにする。

今射精したばかりのその部分は、自らが放った体液でぬらぬらと光りながら、彩乃の熱っぽい視線に応えるように、ひく、ひく、と動いていた。

「そんなこと、ないです……。俺、先輩が、好きですから……」

気のきいたセリフを思いつかず、知巳は、そんなことを言う。

「嬉しい……ありがとう、知巳くん。……また、大きくしてあげるね」

そう言って、彩乃は、膝立ちの知巳の前で四つん這いになり、その小さな口で、ぱっくりとペニスを啜えこんだ。

「うあっ！」

絶頂を迎えたばかりで敏感になったその部分に柔らかな口腔粘膜を感じ、知巳は、思わず声を上げてしまった。

ふうん、ふうん、と媚びるような声をあげながら、彩乃は、ペニスの表面を濡らす精液を舐め取っていく。

美しいその顔と静脈を浮かせたペニスのコントラストが、無残なほどの淫らさを演出していた。

普段はおとなしく面倒見のいい、誰からも慕われている彩乃が、自らこんな淫らな行為をしている。そのことによる興奮が、肉体的な快感とあいまって、知巳の動悸を尋常でないほどに高めていた。

「ああ、先輩……そんな、そんなこと……」

知巳は、そう言いながら、切なげに眉を寄せた。そうすると、その顔はますます少女っぽくなってしまふ。

彩乃は、知巳の腰にその細い腕を回しながら、情熱的に口唇奉仕を続けてた。

ひとしきり口内でペニスの表面の感触を味わってから、一度口を離し、長く伸ばした舌をシャフトにからめる。

そして、敏感な雁首や鈴口を舌先でえぐり、ちゅっ、ちゅっ、と裏側に口付けを繰り返した。

知巳のペニスは、他愛もなく力を取り戻し、再び完全に勃起してしまっている。

「はぁ……すごく熱い……」

彩乃は、かすれたような声でそうささやきながら、赤黒い亀頭にぴったりと唇を重ねた。

そのまま、溢れる先走りの汁をちゅるちゅると舐めとり、舌を回すようにして先端部分を刺激する。

「先輩、もう……俺、それ以上されたら、また……」

「うふっ、ごめんなさい」

知巳の切羽詰った声に、彩乃は、艶然と微笑みながら身を起こした。

そして、純白のハンカチで口元を慎ましやかにぬぐう。

「じゃあ、続きは、ベッドでしましょう」

「は、はい……」

知巳がそう返事をすると、彩乃は、しなやかな動作で立ち上がった。

紺色のブレザーを脱ぎ、きちんと畳んでクッションの上に置く。

それから、彩乃はスカートを開いた。その形のいい長い脚を片方ずつスカートから抜く仕草すら、どこか気品のようなものを感じさせる。

ついさっきまで、知巳のペニスを嬉しげにフェラチオしていたのと同じ少女とは、とても思えない。

知巳は、ぼんやりと、彩乃が服を脱いでいく様を見つめていた。

「……もう。知巳くんも、一緒に脱いで」

脱いだばかりのブラウスで胸元を隠しながら、彩乃が言った。

「あたしだけなんて、ずるいよ」

「す、すいません」

そう言って、知巳は、ぎくしゃくと立ち上がった。

そして、まだかすかに震える指で、制服を脱ぎ捨てていく。

彩乃は、そんな知巳を、まるで姉か母親のような優しい目で見つめていた。

知巳が、全裸になった。肉付きはあまり厚くはないが、毎日のトレーニングで鍛えられた、しなやかな体つきである。

一方彩乃は、レース柄の上品なブラとショーツを身につけたままだ。

ふっくらとした柔らかそうな乳房が形作る胸の谷間に、知巳は見入ってしまう。

「脱がせてみたい？ 知巳くん」

そう言う彩乃に肯いて、知巳は、彩乃の胸に手を伸ばした。

が、無論のこと、生まれてこの方、女性の下着をいじくったことなどない。そもそもホックが前後どちらについているタイプなのかさえ、のぼせてしまった知巳の頭は判断できないでいる。

(んなことなら、朱美に教わっておけばよかったかも……)

などと、愚にもつかないことをつい考えながら、知巳は、ただいたずらに彩乃の胸をまさぐってしまう。

そんな知巳の手に、彩乃は、その小さな白い手を重ねた。

手のひらにある、ブラ越しの柔らかな感触に、かああっ、と頭に血が昇る。

そんな知巳の指先を、彩乃はゆっくりと導いた。

「こ・う・す・る・の・」

そう言いながら、指先に指先を添え、フロントホックを外す。

意外とボリュームのある、形のいい胸が、ふるん、と揺れた。

ミルク色の乳房の頂点にある朱鷺色の突起を、知巳は、じっと凝視してしまう。

「いいの……好きにして……」

彩乃にそう言われ、知巳は、まるで魔法から解けたみたいに、体を動かした。

右手を、左の乳房に重ねながら、右の乳首を啜える。

「んッ！」

ちゅうっ！ といきなり激しく吸われ、彩乃は押し殺した悲鳴をあげた。

「あ、すみません、先輩」

慌てて口を離し、知巳が言う。

「もっと、やさしくしてね？」

少し眉を寄せた顔で笑いながら、彩乃が言う。

知巳は、こくと素直に肯いて、再び、おずおずと乳首を啜えた。

そして、今度は強く吸ったりせず、ころころと舌で転がすようにする。

「ん、ふん……」

そんな鼻声を上げる彩乃の胸を、知巳は、ほとんど本能的に、交互に責めた。

唾液に濡れた上向きの乳首が、ぷっくりと勃起する。

知巳は、そんな彩乃の乳首を、ちゅぽ、ちゅぽ、と小さく音を立てながら、優しく吸った。

ますます彩乃の乳首は固くしこっていく。

「と、知巳くん……」

白い頬を桜色に上気させながら、彩乃が言った。

「あ、痛かった、ですか？」

「そうじゃなくて……もう、立ってられないの……」

甘えるような声でそう言って、彩乃は、その両腕を知巳の首にからめた。

そのまま、仰向けにベッドに横たわる。

知巳は、そのまま彩乃に覆い被さる形になった。

「先輩……っ」

夢中で彩乃の体を抱き締めながら、知巳が言う。

「いや」

「え？」

すねたような彩乃の声に、思わず知巳は顔を上げた。

「あのね……彩乃って、呼んで……」

「ええっと……あ、彩乃……先輩……」

言いくそうにそう言う知巳に、彩乃はくすっと笑いかけた。

「ん、合格」

そう言って、自分から唇を重ねる。

知巳は、彩乃の柔らかな唇や舌を吸い、首筋に唇を這わせた。

そして、仰臥しても形を崩さない胸の双丘に口付けし、乳首をちゅばちゅばと吸いたてる。

「あ……あん……あぁ……はァん……」

慎ましやかな声で、彩乃が快感を訴える。

そして彩乃は、知巳の右手を、自らの脚の間に導いた。

「さわって……」

そうささやかれて、知巳は、ショーツの上から、彩乃の秘部に触れた。

彩乃の温度が、薄い可憐な布越しに、指先に伝わってくる。

知巳は、乱暴にならないように気を付けながら、彩乃のその部分をまさぐった。

「あぁん……」

きゅっ、と彩乃がそのしなやかな体を縮こまらせる。

その、いつになく可愛らしい反応をもっと見たくて、知巳はますます彩乃の秘部を愛撫し続けた。

指先に、温度とは別に、何か湿り気のようなものが感じられてくる。

「知巳くん……あの……じ、じかに、さわって……」

そう言われて、知巳は、ショーツの中に右手を滑り込ませた。

ささやかな陰毛のさらに奥にまで、指を伸ばす。

そこは、驚くほどに柔らかく、そして熱く濡れていた。

ここが自分の欲棒を迎え入れるのかと思うと、頭が痺れるほどに興奮する。

「せん……あ、彩乃、先輩」

ぬるぬるとしたクレヴァスの感触を指に感じながら、知巳は言っていた。

「なに……？」

「俺……彩乃先輩のここ……見たい……です」

真剣な表情の知巳に、彩乃は、困ったような笑みを浮かべた。

「どうしても？」

「どうしても」

「しょうがないなぁ……いいよ……」

そう言って、彩乃は、軽く腰を浮かせた。

知巳が、彩乃のショーツに手をかけて下に引っ張る。

「あん……それじゃダメ。後ろの方から脱がすの」

そのままショーツを引き千切りかねない知巳に、彩乃が言う。

知巳は、彩乃のアドバイス通り、ブドウの皮をむくような感じで、彩乃のヒップからシ

ヨーツを脱がすことに成功した。そのまま、形のいい長い足から、純白のショーツを取り去る。

そして知巳は、彩乃の脚の間に、頭を移動させた。

「あ、あんまり、じっと見ないでね……」

さすがに恥ずかしそうに、彩乃が言う。

彩乃のそこは、自らが分泌した蜜に濡れ、きらきらと蛍光灯の光を反射させていた。

ほころびたランの花のような肉襞が、何かを待ちわびるように息づいている。

「ごめんなさい……いやらしいでしょ？ あたしのそこ……」

じっとその部分を凝視している知巳に、彩乃が言う。

「あの……ここにキスして、いいですか？」

彩乃の言葉に答える代わりに、知巳は、そんなことを言っていた。

「え？」

そして、驚く彩乃の返事を待たずに、その部分に口付けする。

「ンあッ！」

突然のクンニリングスに、彩乃の体が、ひくん、と跳ねる。

知巳は、彩乃を逃がすまいとするように、その脚の付け根をしっかりと固定し、口唇愛撫を続けた。

初めて口にする愛液の酸味を感じながら、柔らかな肉襞の間を、舌先でえぐるようにする。

「ああ……と、知巳くん……知巳くん……」

彩乃の声が甘く濡れていくのを嬉しく思いながら、知巳は、ますます熱心にその部分を舐めしゃぶった。

彩乃のクレヴァスは、ますます柔らかくほころび、とろとろと熱い蜜を溢れさせている。

「あん……ンああ……あう、ン、んうん……あっ、あっ、あっ……！」

次第に声のトーンをあげながら彩乃は、ぎゅっ、とシーツを握り締めた。

(えっと……ここ、かな?)

知巳は、舌先でクレヴァスの上部をまさぐり、クリトリスを探した。女性器を目にするのは初めてでも、クリトリスがどこにあるかくらいは、マンガや雑誌で得た知識で心得ている。

「ひああああッ！」

彩乃がひときわ高い声をあげたことで、知巳は、自らが求める快樂の小突起に到達したことを知った。

普段は楚々としている彩乃の乱れているところをもっと見たくて、知巳は、忙しく舌を動かした。

クリトリスと思われる部分に舌先を当て、ちろちろと素早い動きでくすぐる。

彩乃は、初めてのクンニリングスに没頭する知巳の頭に、その細い腕を伸ばした。

白魚のような、という表現がぴったりくる細く長い指を、知巳のちょっと癖のある髪にからめながら、彩乃は、はしたなくも腰を浮かせてしまう。

ぴちゃぴちゃという、猫がミルクを舐めるような音が、知巳の部屋に響いた。

「ン……ダ、ダメ……もう、もうダメえ……っ！」

ひくっ、ひくっ、とうねる彩乃の体を押さえつけるようにしながら、知巳は、唇に挟んだクリトリスを吸引した。

「んんん……ッ！」

びくん！ と彩乃の白い裸体が痙攣する。

そして、宙に浮いたその魅惑的なヒップが、ひくひくと震えた後、すとんとシーツの上に着いた。

「はあ、はあ、はあ、はあ……」

彩乃は、長いまつげに縁取られた目を閉じたまま、小刻みな呼吸を繰り返している。

「あ……彩乃、先輩……？」

知巳が、心配そうに、彩乃の顔をのぞき込む。

と、彩乃はうっすらと目を開けて、それから、知巳の首に両腕を絡みつけた。

「あっ」

不意を打たれた知巳は、そのまま彩乃の胸に顔をうずめる形になってしまう。

「知巳くんたら……どこであんなこと、憶えたの？」

「ど、どこでって……初めてですよ、俺……」

「ほんとお？　すごく上手だったけど……」

生真面目に反論する知巳にそんなことを言って、彩乃はくすくすと笑う。

そして、右手を、するりと知巳の股間に伸ばした。

「あ……」

すでに完全に勃起し、熱い血流ではちきれんばかりになっている知巳のペニスに、しなやかな指が絡みつく。

「あはっ……すごく熱い……」

「あ、彩乃先輩……」

まさに主導権を握られ、知巳は、普段からは考えられないような弱々しい声をあげてしまう。

「知巳くん……今度はコレで、可愛がって……」

奇妙にねっとりとした視線で知巳の顔を見ながら、彩乃が、淫らなおねだりをする。

知巳は、こくん、とまるで小さな子供のように肯いた。

そして、彩乃の右手に導かれるまま、その屹立を、しとどに濡れたあそこにあてがう。

絶頂を迎えたばかりの彩乃の花園はさらなる蜜に濡れ、触れただけの知巳の亀頭部に、ぴったりと吸いつくようだ。

「柔らかい……」

敏感なペニスの先端に彩乃の靡肉を感じ、知巳は思わずそうつぶやいてしまう。

想像していたよりもはるかに柔らかく、魅惑的な感触だ。

知巳は、彩乃の指先と、そして自らの本能に導かれながら、ゆっくりと腰を進ませた。

よく、初めてだとなかなか挿入が上手くいかない、などという話を聞いていた知巳だったが、彩乃の中への侵入は、意外なほどスムーズだった。無論、知巳は、彩乃が腰を動かして角度を調節してくれているからだということまでは、頭が回らない。

ただ、熱く、柔らかい締め付けの中に、ペニスが入っていくたまらない快感だけが、知巳の脳を支配している。

「んん……」

上気した顔をわずかにそむけ、切なそうにその細い眉をたわめている彩乃の様子が、ますます知巳の中の牡を刺激する。

そして、ようやく、彩乃の中に、知巳のペニスが収まった。

もし一度放出していなかったら、そのまますぐ射精してしまいそうなほどの快感だ。

彩乃の膣内の温度と、心地よい締め付けが、じんわりと知巳のペニスを包み込んでいます。

「知巳くん……」

彩乃が、目許を桃色に染めながら、知美を見つめた。

「あの……お願い、動いて……」

そして、恥ずかしそうに、そうおねだりする。

知巳は、こっくりと肯いて、ぐっ、と腰を動かした。

「あん……！」

その動きだけで、彩乃は、小さな悲鳴を上げてしまう。

そんな彩乃に対する愛しさで気がおかしくなりそうになりながら、知巳は、本格的に腰を使い始めた。

初めてのことなので、要領も勝手も分からない。ただただ牡の本能が命じるままに、単純な抽送を繰り返す。

「はぁっ……あ……あん……はア……あう……」

知巳の抽送に合わせてるように、彩乃は細い声をあげ、妖しくその白い体をうねらせた。

ずりずりと膣内粘膜をこすりあげるペニスを慕うように、熱く濡れた肉襞が淫靡に絡みつく。

シンプルな動きによってもたらされる快感に、二人とも夢中になって、互いの体に腕を回した。

「ご、ごめんね……知巳くん……あたし……はじめてじゃなくて」

彩乃が、なんだか泣きそうな声で、切れ切れにそんなことを言った。

「そんなこと、言わないでください……彩乃先輩……」

知巳は、そう言って、たまらなくなつたように、彩乃の唇を吸う。

「んうん……」

彩乃は、うっとりとした喘ぎをもらしながら、まだごちなさの残る知巳の舌に、情熱的に舌を絡めた。

「俺、先輩が好きです.....好きです.....好きです.....」

キスの合間に何度もそう繰り返し、そして再び、キスをする。

「うれしい.....知巳くん.....あたしも、知巳くんが、好き.....だいすき.....っ！」

彩乃は、恍惚とした表情で、奇妙に幼い声でそう言った。

そして、その長い足を、知巳の引き締まった腰に絡みつけ、引き寄せせる。

「ンあっ！」「あアン！」

ひときわ深くなった結合に、二人は同時に声をあげた。

そして、知巳も、二人の間にある隙間をなくそうとするかのように、しっかりと彩乃の体を抱き寄せせる。

結果として、大きなピストン運動ができなくなり、知巳は、ぐりぐりと腰をグラインドさせた。

「ンああああああッ！」

思わぬ知巳の攻撃に、彩乃は、はしたなくも高い声をあげてしまう。

「イイ.....イイの、知巳くん.....ンあっ！ き、きもちイイ.....ッ！」

「俺も、俺もです.....ああっ、す、すごい.....」

知巳は、少しでも長く彩乃と繋がっていたくて、こみあげてくる射精欲求に必死になって耐えた。

耐えながら、彩乃の脚を振り切るような勢いで、再び激しく腰を動かす。

「あううううッ！」

知巳の腕の中で、彩乃の均整のとれた肢体がびくびくと震え、熱くたぎるペニスを強烈な締め付けが絡みついた。

煮えたぎる白い欲望が、知巳の我慢の限界を突破する。

「あっ、ああっ、あ-っ！」

知巳が、思わず声をあげながら、ひときわ強く彩乃の体内に自らを打ちこんだ。

そして、彩乃の体の最も奥の部分で、大量の精を迸らせる。

「知巳くんっ！ あ、あたし、イクううううううううううッ！」

びゅるるっ！ びゅるるっ！ びゅるるっ！ と何度も何度も体内で熱いスペルマが弾ける感覚に、彩乃も強烈なエクスタシーを迎えていた。

知巳の射精は、いつまでもいつまでも止まらない。

そして.....

知巳は、ベッドの中で、回想の中の自分に追いつこうとするように、右手を激しく動か

した。

まだ鮮烈な記憶を思い返しながらのオナニー。

目蓋の裏で、絶頂を迎えた彩乃の体が、ひくひくと痙攣している。

「せんばい……あやのせんばい……っ！」

知巳は、愛しい人の名を呼びながら、ペニスの付け根で限界まで高まった欲求を、解放した。

その時

世界が、反転した。

「う……」

けだるい満足感を覚えながら、知巳はゆっくりと目を開いた。

「……？」

奇妙な違和感を覚えるが、まだ、それを分析するまで、脳が醒めていない。

(あれ……なんで俺……座ってるんだ……?)

気がつくやうに、ベッドに横臥していたはずの自分の体が、カーペットの床に置かれたクッションの上で、座っている。

知巳は、自分の体を不思議な気持ちで見下ろした。

「……！」

ない。

ペニスが、ない。

黒い陰毛に飾られた自分の股間に、見なれたはずのそれがなかった。

奇妙にのっぺりしたその部分を、何かが濡らしている。それは、しかし血ではなく、やや白く濁った体液だ。

「……！ ……！？ ……！！！」

知巳は、パニックに陥りながら、自らの周辺を見まわした。

見たことのある、暖色系に統一された、しかし自分の部屋のものではない調度。

壁に貼られたハリウッド男優のポスター。

砂嵐を映したままの、つけっぱなしのテレビ。

双子の妹、朱美の部屋である。

そして、自分が身につけているのは、ピンク地に星占いのマークという柄の、女物のパジャマ、そして脱げかけのショーツだ。

知巳は、あまりの衝撃に声すら出せず、よろよろと立ちあがった。そして、部屋の隅にあるドレッサーの鏡をのぞく。

きちんと自分の顔が写ってる、と一瞬だけ安堵したが、すぐにそれが間違いであること

を悟った。

自分の顔ではない。

朱美の顔だ。

しばし茫然と立ちすくむ。

どれくらい、そうやってぼんやりとしていたのだろう

知巳は、どんどんという音が部屋に響いていることに気づいた。

「兄貴ーっ！」

押し殺した、それでいながら切迫していることだけは分かる声。

録音された自分の声というのは、自分でも思ってもみなかったふう聞こえるものだが、
ちょうどそんな声である。

「兄貴っ！ ボクの部屋、カギかかっているんだよっ！ 早くあけてよっ！」

しかし、その口調は、間違いなく、妹の朱美のものだった。

第二章

少し、時間をさかのぼる。

葛城朱美もまた、その夜、一人自らを慰めていた。

ただ、双子の兄である知己の“オカズ”が、初体験の思い出という、あまりに純粹かつ初々しいものであるのに比べ、朱美のそれは控えめに言ってもかなり一般的でないものだ。

朱美は、ベッドの枠にクッションを立てかけ、それに背中を預けるようにしながら、テレビを見つめていた。

テレビから伸びたコードの先には、ステレオのイヤフォンが付いており、朱美はそれを、可愛らしい耳にはめている。

テレビ画面に映っているのは、ビデオ映像だ。

それも、市販のアダルトビデオではない。それどころか、裏ビデオでさえなかった。

朱美が、自ら親のハンディビデオを持ち出し、撮影したものである。

画面の中の風景は、殺風景な地下室のような場所だった。

建設途中で放棄された建物を思わせる、コンクリートが剥き出しの床や壁。そこに、どうやって持ち込んだのか、スチールのパイプベッドがあり、その上には意外とこぎれいな厚手のマットレスが敷かれている。

昼夜は判然としない。ただ、薄暗くはあっても光源は自然のものらしいので、昼間なのだろう。

そして、画面の中央では、一人の少女が、柔らかそうな頬を羞恥に染めながら、服を脱いでいた。

春宮奈々　ちょうど、朱美や知己の一歳下で、今年の4月に高校生になったばかりの少女だ。二人の、従妹にあたる。

ただし、画面の中の奈々は、まだ高校生になっていない。これは、ちょうど一ヶ月ほど前に撮影したものなのだ。

その年齢相応に、あどけない顔。やや癖のある髪を、おとなしく一本の三つ編みにしている。

だが、その胸のふくらみは、年齢や容貌に反して、驚くほど豊かに膨らんでいた。

奈々は、その大きな瞳で、カメラの方にちらっ、ちらっと視線をよこしながら、中学校指定のスカートを脱ぎ捨てる。

そして、傍らの木製の椅子にスカートを置き、純白のブラウスのボタンをはずしていっ

た。

一つ一つ、その白い指でボタンを外していくうちに、奈々の顔が上気していっているように見える。

大きな目が潤み、可愛らしい小鼻がすこしふくらんでいる。

全てのボタンを外し終わったとき、奈々は、ほーっ、と奇妙に色っぽいため息をついた。

そして、小さな舌で、ピンク色の唇をちろりと舐める。

奈々が、ブラウスを椅子に置いた。

ピンク色の、シンプルだが可愛らしいデザインのブラが、奈々のたわわな双乳を包み込んでいる。

そんな奈々の映る画面を見ながら、朱美は、早くももじもじと足を動かしていた。

半裸の奈々の白い肌や、柔らかそうな胸よりも、その恥ずかしい姿をカメラにさらしている従妹の表情に、朱美は興奮しているようだ。

年相応に幼く、そして可愛らしい顔立ち。その顔が、怯えるような、それでいながら媚びるような表情で、カメラを見つめている。

いや、あの時カメラを構えていた朱美に、主人を恐れつつも甘える小動物のような目を向けているのだ。

そんな映像を見ているうちに、知らず知らずのうちに、朱美は、右手をパジャマの下にさし入れてしまう。

朱美のその部分は、すでに熱く湿っていた。

シミにならないように、パジャマの下を脱ぎ捨て、ショーツをずり下ろす。

薄めの陰毛の下にある秘唇は、すでに蜜をにじませていた。

そこに、右手の指先を当てながら、兄の知巳によく似た、ボーイッシュな顔を画面に向けなおす。

普段は凛々しいその顔は、背徳の快樂の予感に、ぼおっと染まっていた。

「奈々……」

そして朱美は、複雑な情念をそのささやきにこめながら、ますます画面に没入していった。

「全部脱いで、奈々……」

朱美は、ビデオカメラのファインダーから目を離しながら、言った。

「あ、朱美ちゃん……でも……ビデオなんて……」

その幼い顔にぴったりの、ちょっと舌足らずな声で、奈々が抗議しかける。

「ボクの言うことが聞けないの？」

努めて冷たい表情を作りながら、朱美が言った。

朱美が、綺麗に鼻筋の通った凛々しい顔にそういう表情を浮かべると、奈々はいつも決まってびくりと体を震わせる。

そんな、まるで怯える子犬のような反応を見るたびに、朱美は、言いようのない甘い戦慄を感じてしまうのだ。

「ボクに逆らうのなら、今まで撮ったエッチな写真、叔父さんや叔母さんに送り付けるよ」
精神的な快感で声が震えそうになるのを必死でこらえながら、朱美が言う。

「そんな……ひどい……」

ブラに、そろいのショーツ、そしてソックスだけの奈々が、すがるような目で朱美の顔を見つめた。

「それだけじゃないよ……奈々があんまりわがまま言うなら……ボク、奈々のこと嫌いになるから」

「やあっ！」

奈々は、両方の手を口元に寄せながら、悲鳴のような声をあげた。

「おねがい、朱美ちゃん……奈々を……奈々をキライにならないで……」

震える声でそう言う奈々に、三脚に固定されたビデオカメラから離れた朱美が、ゆっくりと近づいていく。

「キスもしてあげないし、エッチないたずらもしてあげないからね」

「ゴ、ゴメンなさい……奈々、言うことききます……」

涙を目に一杯にためながらそう言う奈々の髪を、朱美は、ふわりと撫でた。

「じゃあ、あのカメラに向かって、奈々のおっきなおっばい、見せてあげて」

「う……ぐすっ……は、はい……」

べそをかきながらそう言う奈々の声は、しかし、どこか歪んだ官能に濡れていた。

その小さな体は、マゾヒスティックな悦びにはしたなくも反応し、細かく震えているように見える。

そして奈々は、震える指先を背中に回し、ブラのホックをゆっくりと外すのだった。

二人とも、無論、最初からこのような関係であったわけではない。

小学生低学年のときに、一緒に読んだマンガの中で、主人公の少年が敵に捕らえられ、拷問を受けているシーンがあった。

そして、朱美も奈々も、それがどういう感覚なのかわけもわからないままに、強烈な興奮を覚えたのだ。

それから、二人の秘密の“ごっこ遊び”が始まった。

奈々は捕らえられた主人公役。そして朱美は、主人公を拷問する美形の敵役だ。

マンガの中では、主人公の少年は機知と勇気によって敵役に反撃を食らわすのだが、二

人の遊びの中ではそのようなことは起こらなかった。

ただただ、甘美な拷問遊びが、延々と続くのである。

タオルで手足を縛り、鞭に見たてた柔らかな紐で、痛みを覚えないくらいの強さで叩くだけのこと。

それでも二人は、その遊びに夢中になった。

知己を含めて一緒に遊ぶことが多かった三人だが、この秘密の遊びにだけは、彼を参加させることはなかった。

まだ性的な知識などほとんどない二人の少女の、淫らな秘密……。

が、それも、年を重ねるにつれ、少しずつ頻度が減ってきた。

この関係が再燃し、そして、さらに大きな一步を踏み出すのに、決定的な出来事が、昨年、あったのである。

ただし、朱美はともかく奈々自身は、そのことを少しも意識していなかったのだが。

「あいかわらず、みっともないくらいおっきなおっぱいだね」

朱美の言葉に、奈々は唇を噛み締める。

「そのくせ、おまたはつるんつるんで、赤ちゃんみたい」

朱美の言葉通り、すっかり成熟して見える乳房とは対照的に、奈々の股間には、一切のかげりが無い。無毛の恥丘の奥にスリットがのぞく様は、どこか犯罪的な匂いさえあった。

「い、言わないで……」

「だめだよ、隠しちゃ」

言いながら、朱美は、奈々の背後に回りこむ。朱美は、むろん着衣のまま。春物のトレーナーに細身のジーンズというシンプルな格好が、ボーイッシュなその容姿によく似合っている。

朱美は、左手で奈々の柔らかな体を抱きすくめた。そして、奈々のお下げ髪を、まるで筆か何かのようにつまむ。

「気持ちよくしてあげる……」

そう言って、朱美は、奈々の長い三つ編みの先を、体の前に持ってきた。

そして、その先っぽで、乳首をさわさわと撫でる。

「ひゃうん！」

奈々は、短く声をあげて、その体を縮こませた。

しかし朱美は、左手一本で奈々の両手を押さえ、彼女が胸を隠そうとするのを阻んでいく。

「ほーら、乳首が立ってきた」

朱美は楽しそうにそう言いながら、奈々自身の髪の毛で、両方の乳首を攻めていく。

朱美の言葉通り、奈々のピンク色の乳首は、その大きな胸の頂点で、ぶくん、と小生意気に自己主張していた。

そんな奈々の様子を、ひどく淫らな目つきで見つめながら、朱美は、いっそう執拗に奈々の胸を攻め続けた。

無表情なレンズの眼が、そんな少女達の痴態を、静かに見つめている。

奈々の体は、朱美の腕の中でぐんなりと力が抜け、時折、ひくん、ひくんと震えていた。

その頬は、この異常な状況での愛撫にうっとり染まり、唇は何かを求めるように半開きになっている。

朱美は、ちょっと複雑な表情になった後、左手で、奈々の顔を右向きにねじった。

そして、不自然な角度から、奈々の唇に唇を重ねる。

「ふうん……」

媚びるような、奈々の声。

両手を解放されても、もはや奈々は、胸や股間を書くそうとはしない。

朱美は、その両手で、背後から奈々の胸をすくいあげるようにした。

そして、いささか乱暴な手つきで、ぐにぐにと奈々の双乳を揉みしだく。

「んんんんんッ！」

奈々は、唇をふさがれたまま、明らかな歓喜の声を上げた。

朱美の細い指によって、マシュマロを思わせる奈々の柔らかな乳房が、不自然に形を歪める。それは、奈々の童顔と合間って、匂うようなエロチシズムをかもし出していた。

朱美が、親指と人差し指で、すでに完全に勃起した奈々の乳首をつまむ。

「ふううううッ！」

それを、つーんと引っ張りあげると、奈々はたまらず唇を離した。

そして、空ろな目をカメラに向けながら、その白い脚をかくかくと震わせる。

朱美は、乳首をくりくりといらいながら、奈々の首筋に舌を這わせた。

その瞳は、未だ十六歳というのが信じられないくらいに、妖しく濡れて光っている。

「ここに、ボクが、綺麗なピアス、つけてあげるね……」

そう奈々の耳元にささやきながら、きゅっ、と両方の乳首を同時にひねる。

「あ、ああッ！ あッ！ んああアッ！」

奈々は、うろたえたような声を上げながら、びくん！ と体を痙攣させた。

しゃあああっ、と薄い黄色のしぶきが、その股間から進む。

わずか十五歳の少女が、自らの乳首を貫く金属のイメージに被虐の絶頂を迎えた、その瞬間だった。

奈々は、どこかぼんやりとした顔で、ベッドに腰掛けていた。

その顔には、苦痛に対する恐怖と、被虐の陶醉、そして期待とが、わずかずつではあるが、にじんんでいる。

可愛らしい顔に浮かぶ、ひどく複雑な表情……。

その顔を見ているだけでも、誰であれ、サディスティックな欲望が鎌首をもたげてしま
いそうな、そんな表情である。

そんな奈々の背後で、朱美が、マットレスの上に座っている。

マットレスに敷かれたシーツの上には、いくつかのプラスチックの箱と、紙袋が、乱雑
に置かれている。

朱美は、奈々の両手を後ろに回した。

そして、シーツの上においてあった革手錠を手に取る。黒い革製の、幅の広い手かせを、
短い鎖で繋いだ代物だ。

「あ……」

ビデオカメラからは隠れているが、その革手錠によって、奈々は、両手を後手に拘束さ
れた。

奈々がぶるっと身を震わせた拍子に、ふるるん、とその柔らかな乳房が揺れる。

「さ、奈々……いくよ……」

そう言って朱美は、何か薬品を染み込ませた脱脂綿で、奈々の乳首を後ろからぬぐった。

「ひゃう……」

奈々が、小さく悲鳴をあげて身を縮める。

丁寧に乳首をぬぐった後、朱美は、シーツの上の子箱から、太い針を取り出した。外科
手術にも使われるサージカル・ステンレスでできたピアス・ニードルだ。

ニードルが濡れているのは、どうやら箱の中に、消毒液を入れ、そこに浸していたため
らしい。

鋭い針が視界に入ったとき、奈々は、はっとそのつぶらな瞳を見開いた。

がくがくとその体が震え出す。

朱美は、右手にニードルを持ったまま、奈々の体を後ろからそっと抱き締めた。

「あ、朱美ちゃん……」

怯えた声をあげながら後ろを向く奈々の頬に、朱美は、ちゅっ、とキスをした。

「だいじょうぶ……ボクを信じて……」

耳元でそうささやき、そして、さらに耳たぶにキスをする。

奈々は、こくん、とうなずき、顔を前に戻した。

朱美が、ニードルの先端に、抗生物質入りらしき軟膏を塗る。

そして、針先を、奈々の右の乳首の側面に当てた。

んっ……と息を飲む奈々の口元に、朱美が、左手でハンカチを寄せる。

「これ、噛んで」

奈々は、再び肯き、はむ、とハンカチをその小さな口に啜えた。

朱美が、真剣な目つきで、肩越しに奈々の乳首を見つめる。

「……」

ちら、と一瞬だけ、カメラに目をやってから、朱美は、ニードルを水平に突き刺した。

「んっううううううウーッ！」

画面の中の奈々が、くぐもった悲鳴を上げた。

「奈々……ッ！」

画面を見つめる朱美が、激しく自らの花園を激しく髑りながら、声をあげる。

が、画面の中の朱美は、あくまで冷静に、いったん止めた針の位置を修正し、針の先端を乳首の反対側から突き出した。

「ふぐうううううううううッ！」

ぎゅっ、と閉じられた奈々の目尻から、珠のような涙が溢れた。

その豊かな乳首の先端にある、可憐なピンク色の乳首に、無残にも金属の針が突き通っている。

革手錠を結ぶ鎖が、ぎりぎりと言を立てるのが聞こえそうなほどに、奈々は、後手に回した両腕を突っ張らせていた。

「奈々……奈々……っ！」

そんな画面を見つめる朱美は、届くはずのない声で、痛みのあまり全身を硬直させている一つ下の従妹に呼びかけている。

一方、画面の中の朱美は、まるで悪魔のように冷静だ。

ただ、激しい興奮にきらきらとその瞳を光らせながら、ニードルを抜き、バーベル型の小さなピアスを用意している。

そして、片方の丸いボールをネジを回して取り外し、今貫通させたばかりの穴に、シャフトの部分を刺しこんでいく。

けして太くはないピアスではあるが、幼い奈々がそれを身につけさせられている様は、淫靡を通り越して無残ですらある。

傷口が小さいためか、出血は意外と少ない。それよりも、ハンカチを噛みながら必死に痛みに耐えている奈々の様子に、画面を見つめる朱美は唇を震わせている。

画面の中の朱美は、左の乳首をピアッシングする用意を完了させていた。

ふーっ、ふーっ、ふーっ、ふーっ、と荒い息をつきながら、奈々は、涙に潤んだ瞳で、自らの左の乳首を見つめている。

その口に咥えられているハンカチは、溢れさせた唾液でぐっしょりと濡れていた。

「ああ……ダメ……おねがい、やめて……やめてよオ……」

そんな画面を見ながら、朱美は、誰にともなく話しかけている。その声は、今にも泣き出しそうな響きだ。

それは、過去の自分自身に対する言葉なのか

しかし、画面の中の朱美は、容赦しない。

「これで、奈々は、お嫁に行けない体になっちゃうんだよ……」

薄い笑みすら浮かべながら、奈々の耳元に、そんなことを囁いている。

奈々は、痛みに流した涙で濡らした頬をピンク色に染めながら、こっくりと肯いた。

そんな奈々の左の乳房を、優しげに一撫でした後、朱美は、再びニードルを取り上げる。

「そんな、そんなの……ああ……」

画面を見つめる朱美は、画面の中の奈々よりもうろたえた様子で、うわごとめいたことを言っている。

それでいながら、その両手を遊ばせている朱美の秘部は、熱い蜜をとろとろと溢れさせ、お尻の下に敷いているクッションを恥ずかしいほどに濡らしていた。

ニードルが、左の乳首を、貫く。

「んくウッ！」

先ほどよりは抑えられた、くぐもった悲鳴。

そして、しばしの静寂……。

朱美は、ふーっ、と一息をつくど、ニードルを抜いた。

一度処置をしたことで慣れたのか、画面の中の朱美の処置は、手早い。

朱美は、消毒液に浸したもう一つのバーベル型のピアスを手に取り、ネジを外した。

点々と、赤い血が、奈々の乳首から太ももの上に滴っている。

その乳首に、今開けられたばかりのピアスホール。そこに、朱美は、ピアスを挿入していった。

内部で少し引っかかる感じがするのが、奈々は、ハンカチを噛み締めたまま、眉をきゅっとたわめている。しかし、悲鳴を上げることはない。

それどころか、朱美がピアスを付け終わると、どこかうっとりとした目で、自らの両の乳首を見つめていた。

わずかに開いた脚の間は、暗くて画面では判然としない。しかしその無毛のスリットが、ねっとり蜜を溢れさせていたことを、朱美はしっかりと憶えていた。

画面の中の朱美が、奈々の口から、唾液でぐっしょりと濡れたハンカチを外す。

「朱美ちゃん、あたし……」

奈々は、そう言いながら、朱美の方に首をねじった。

「よく頑張ったね、奈々……」

画面の朱美が、背後から覆い被さるようにして、奈々の唇を奪う。

「んふん……」

「んむ……ん……うん……」

二人の少女は、淫らに舌を絡ませあいながら、互いの愛らしい唇を貪欲にむさぼった。

朱美が、その両手を奈々の乳房に伸ばす。

そして、まだ血に濡れた銀色のピアスを、両手の人差し指の爪の先で、ちん、と弾いた。

「んんんんんン〜ッ！」

生々しい激痛と、そして被虐の悦びに、奈々が全身を震わせる。

「奈々あッ！」

そして、画面を食い入るよう見つめていた朱美も、その瞬間に絶頂に達していた。

罪悪感と、背徳感にまみれた、暗い快樂。

痛みを覚えるほどに自らのクリトリスを強くつまみながら、強烈なアクメに、そのしなやかな体を弓なりに反らす。

その拍子に、朱美の耳からはイヤフォンが外れた。

「か……ンはっ……は……あああ……ッ」

呼吸すらままなくなるとなるような、いつまでも続く絶頂。

自ら編集したビデオが終わり、画面が砂嵐になる。

その、ちかちかと光る画面を見ながら、朱美は、一瞬だけ意識を失い世界が、反転した。

次第に、体の感覚が戻ってくる。

いつのまにか横になっていた体を起こそうとして、朱美は、自分が何か熱い棒状のものを握り締めていることに気付いた。

「ぎゃ！」

そして、まるで間違えてゴキブリを踏んづけてしまったときのような声をあげる。

ペニス。

自分が右手で握っているのが、今まさに射精を終え、次第に萎えつつあるペニスであることを認識して、朱美の思考は、しばし停止した。

左手は、ご丁寧に重ねられたティッシュペーパー越しに、自らの進りを受け止めている。

「……」

朱美は、思考を停止させたまま、たっぷりと精液を受け止めたティッシュを丸め、ぼとんとゴミ箱に入れた。

そして、まだ濡れているペニスをティッシュでぬぐい、のろのろとずり下がっていたトランクスとパジャマの下を履く。

「……」

無言のまま、朱美はドアを開け、同じ二階にある洗面台で手を洗った。

じゃばじゃばと冷たい水道水を両手に受けながら、洗面台の鏡を覗き込む。

「……」

兄である知巳の顔だ。

いくら似ているとはいえ、間違えようがない。

その、無表情だった知巳の顔が、かああっ、と赤く染まった。

赤くなっているのは、朱美の羞恥心によるものだ。

自分は今、知巳の体の中にいる。では、知巳はどこにいるのか。

(ボクの……体の中?)

理屈ではなく直感が、正しい答えを導き出していた。

夜中だというのに、ででで、と足音を立てて廊下を走り、自分の部屋のドアノブを握る。動かない。カギがかかっているのだ。

朱美は、ドアをどンドンと叩きながら、思わず声をあげていた。

「兄貴ーっ！」

大声で叫びたいところを、わずかに残った理性で、どうにか声を押し殺す。

「兄貴っ！ ボクの部屋、カギがかかっているんだよっ！ 早くあけてよっ！」

そう言いながら、何度もドアを叩き、ノブをひねる。

部屋の中で、誰かが動く気配がした。

「……」

朱美が、口をつぐむ。

ドアが開いた。

整理のつかない顔つきの自分自身がそこにいる。

朱美は、強いめまいに見まわられた。

「……」

「……」

朱美と知巳は、無言で、にらみあっていた。

場所は朱美の部屋の中である。

朱美は、自分の部屋の中に入ってすぐ、テレビとビデオデッキのスイッチを切った。

そして、不審げな顔をする自分自身の体の前に、どすん、と乱暴に座りこんだのである。

困惑、不安、焦燥、羞恥……さまざまな感情がうずまき、ちっとも気持ちの整理がつかない。

「……朱美」

ようやく、知巳が口を開いた。

「朱美、だよな？」

「ん……そう言ってるのは、兄貴、だよな？」

「ああ」

とりあえず、最低限のことを確認する。

「つまり、兄貴とボクは、入れ替わっちゃったってわけだよね」

「だな」

知巳は、朱美の顔で、おもいきりしかめっ面をした。朱美が、それをひどく嫌そうな顔で見る。

「なんでこんなことになったんだか……」

「兄貴は、心当たり、ないって言うの？」

ぼそぼそとそう言う朱美に、知巳は、口をつぐんだ。

このようなことが起こった理由は分からなくても、何がきっかけとなったのかは、二人とも想像がついてる。

ただ、ことがことだけに、言葉にできないだけだ。

「ま、とりあえずそのことはおいとくか」

「さんせー」

知巳の言葉に、朱美がそう返事をする。

「で、コレだけど……元に戻ると思うか？」

あぐらをかき、かりかりと頭を掻きながら、知巳が言う。

「わかんないよ、そんなこと……。ところでさ、そういうカッコ、やめてよ」

「え？ あ、別にいいじゃねえか」

「よ、よくないよオ。ボクのカラダなのに！」

「っせえなあ。その前に、お前こそその言葉遣いなんとかしろ！ 俺の声でそんなカマくせえセリフ言ってんじゃねえ！」

「それはお互い様じゃない！」

ぎっ、と二人がにらみ合う。

が、すぐに、不毛さに気付いて肩をすくめた。それに、自分の顔をにらみつけても、鏡をにらんでいるようで調子が狂う。

「……」

「……」

再び、知巳と朱美は黙り込んだ。知巳はあぐらをかいたまま腕を組み、朱美はいわゆる体操座りで、膝の間に顎をうずめている。

「あのさ」

知巳が、何か言いにくそうに口を開く。

「その、さっきの、アレのことだけどさ」

「あれ？」

「だから、その……ほれ、二人でオナっちまったこと」

「な、ななな何でそんなふーに言うのよ！」

「だって、他にどう言えばいいんだよ！ じゃなくて、つまり、アレが原因っつーか、キッカケだったわけだろ」

「う……た、たぶん」

「だったら、そのお……もっかいすれば、どうにかなると思わねーか？」

「……」

朱美は、ジトっとした目で、知己のことをにらんだ。

「あのさ、兄貴、自分で何言ってるか分かってるの？」

「だって、仕方ねーだろ。お前だってやってたくせに、人のこと言えた義理かよ」

「そ……そんな、言い方って……」

「わ、わかった！ 悪い！ 悪かったから、俺の顔で目に涙浮かべんな！」

大げさに手を振りながら、知己が訴えるように言う。

「……でもさ、やっぱり、ムリだと思うよ」

涙をぬぐいながら、朱美が言う。

「ムリ？ なんで？」

「だってさ……兄貴、こんな状況で、できる？ しかも、女の体で」

「う……」

知己は、自分の体をしげしげと眺め、視線を戻した。

「女の体は、それなりに気持ちかノらないとどーにもならないんだよ」

「そ……そっか」

感心したように、知己が言う。

「それに……ボクだって、男の人がどうやってするかなんて、よくわかんないし……」

「じゃあ、あれだ」

「何？」

「お互いに教え合うってのはどうだ？」

一拍置いて、朱美は、大真面目にそう言った知己の頬を、ぱあんと張り飛ばした。

「ったく、自分の体だってのに手加減しねーな、あいつ……」

朱だひりつく頬を撫でながら、知己は一人ぼやいた。

「しかしまあ……確かに、そんな気にはなれないかもな」

そう言いながら、ごろん、とベッドの中で寝返りを打つ。

朱美のベッドの中だ。

「……」

知己は、無言で、ものはためしとばかりに、つんつんと自らの乳首をつついてみた。

それなりに成長した、しかしまだ発展途上の乳房の頂点にある、小さな乳首。

べつに、どうという反応は無い。ちょっとくすぐったいだけだ。

「朱美の体じゃあなあ……」

そう言ってから嘆息し、知己は天井をにらむ。

ふと、またしてもあの夜の甘やかな体験を思い出してしまった。

「彩乃先輩……」

そうつぶやいてから、ちょっと哀しい気持ちになって、布団をかぶりなおす。

(目を覚ませば 元に戻ってるかもしれないしな)

そんなことを考えて、知己は、どうにか自分自身を寝かしつけるのだった。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

第三章

知巳は、ゆっくりと寢床から置きあがり、いつもと違う方向から差し込む朝日に、まぶしそうに目を細めた。

そして、むーん、と伸びをするが、どこか違和感がある。

「おもい……」

そうつぶやきながら、胸元に目を落とす。

けして大きくはないが、形のいい半球型の柔らかなふくらみが、パジャマの内側から自己主張をしている。

「……朱美の体か」

はああああ、と盛大にため息をついて、ベッドから降りる。

「なんか、体が重いな。女ってみんなそうなのかな？」

思うように動かない妹の体に、全世界の女性を敵に回しそうな独り言をつぶやきながら、知巳は周囲を見回した。

「なに着ればいいんだろ……？」

と、その時、ノックの音が響く。

ドアを開けると、自分の顔をした朱美が、複雑な表情で立っていた。すでに朱美は、綿のワイシャツにジーンズという、この季節の知巳のスタンダードなスタイルに着替えている。

「早いな」

「まーね」

「で、どした？」

「えっとさ、兄貴が困ってるんじゃないかなあ、って思ってね」

そう言って、朱美は、にへっ、と笑った。

「う、うーん……困ってる、なあ」

知巳は、とりあえず素直にそう言った。

「だよね。ブラの仕方なんて知らないでしょ？ 外す方は得意でもさ」

「得意なんかじゃない」

「あー、でも外したことはあるんだ」

まんまと誘導尋問にはまった知巳は、かっとなら顔を染めた。そんな自分の顔を、朱美がちょっと不思議そうな顔で見る。

「な、なんだよ」

「え？ う、ううん、なんでもない。じゃ、ほら、着替え着替え」

そう言いながら、朱美が、ドレッサーの中からシンプルながら可愛いデザインのプロ

ラを取り出す。

妹の下着をあさる自分自身の姿を、知巳は、慚然とした顔で眺めていた。

「あらあらあら、一緒に朝ご飯なんて珍しいわねえ」

知巳と朱美の母、千恵子は、のどかな微笑を浮かべながらそう言った。

小さな体に割ぼう着をまとったその姿は、いかにも“日本のお母さん”といった風情だ。それでいながら、その顔は若々しい。少女の可愛らしさを残したまま、母親になってしまった、といった感じだ。

「知巳君は、今日はお寝坊さんだったのね」

いつもなら早く起きてランニングをしてから朝食を摂るはずの息子に、千恵子は言った。

知巳は、そろそろ名前に“君”を付けるのはやめてほしい、と思うのだが、未だ母に逆らうことはできない。今は海外に赴任している父、修三は古典的な怖い親父だが、葛城家で一番強いのは母の千恵子である。ある意味、理想的な家庭かもしれない。

「ん、ちょっとね」

そう言いながら、朱美はテーブルについた。そんな朱美の方を、千恵子がじっと見つめる。

「か、かあさん、どうしたの？」

しゃもじを右手に持ったまま、じっと朱美の方を、つまり自分の顔を見つめる母親に、知巳は思わず声をかける。

「今朝の知巳君、ちょっとヘンね」

「ヘン？」

双子は、思わず同時に声をあげていた。

「ど、どこが？」

そう言う朱美の声は、ちょっと上ずっている。

「なんだか、いつも以上に可愛い感じ」

ふわっ、と笑いながら、千恵子はそんなことを言った。

「む、息子を、からかわないでよ！」

「何言ってるの。母さんはねえ、からかいがいのある子供にしようと思って、これまで一生懸命に知巳君を育ててきたのよ」

本気なのか冗談なのか、千恵子はそんなことを言う。

「だ、だいたい、ボクじゃなくて、オレの、どこが可愛いんだよ？」

朱美が、いつにも増して乱暴な言葉遣いをしようとする。

「そうやって、無理して突っ張っちゃってるところかな？ はい、お茶碗かして」

「……」

朱美は、思わず自分の茶碗に手を伸ばしかけ、あわてて知己の茶碗を手に取る。

そんな朱美をはらはらしながら見ていた知己に、千恵子が顔を向けた。

「ほら、朱美ちゃんも、早く座って」

「う、うん……」

「どうしちゃったのかしらねえ、今朝のうちの子供達は」

ほかほかのご飯を茶碗によそりながら、千恵子は、独り言のように言う。

「やっぱり、知己ちゃんに恋人さんができたからかな？」

「母さんっ！」

知己が、朱美の声で、悲鳴のような声をあげる。

「朱美ちゃん。ショックなのは分かるけど、あんまり思いつめちゃダメよ」

どういつもりかそんなことを言いながら、千恵子は知己に、ご飯をよそった朱美の茶碗を差し出した。

「朱美ちゃんの顔はね、母さんと同じで、愁い顔より笑った顔の方が魅力的なんだから」

そんな母親の言葉を聞きながら、知己は、ご飯がよそられていても思いのほかに軽い朱美の茶碗を受け取った。

知己の部屋で、二人は“作戦会議”を始めた。

「そもそもバレルわけないんだから、あんまり慌てることはないのよ」

そういう朱美に、知己はこっくりと肯いた。

「要するに、自然体で振る舞わなきゃ」

「そりゃまあそうなんだけどさ」

そう言いながら、知己はぼすんと乱暴にベッドに腰掛けた。

「あ、それからね、今はパンツだからいいけど、スカートのときはそんなふうに乱暴に座らないでよ」

知己の椅子に座りながら、朱美が言う。

「いちいちうっさいなあ」

「スカートがめくれちゃうのよ。兄貴だって、そんなことで注目集めたくないでしょ」

「へいへい」

めんどくさそうにそう答える知己の方を、朱美はじっと見つめた。

「な、なんだよ」

自分自身の顔ににらまれるのは、やはりあまりいい気持ちではない。知己は、しかめっ面を作って言った。

「兄貴は、和泉センパイとはどこまで行ったの？」

「って、お前なあ！」

大声をあげる知巳に対し、朱美は涼しい顔だ。

「だって、入れ替わりがバレることはないにしても、あんまりヘンな対応はできないでしょ。元に戻ったときのためにも、きちんと関係は続けとかないと」

「そりゃ、そうだけど……戻るかな？」

「ま、戻らなかったら戻らなかったときよ。覚悟決めなきゃ」

「そう、か……」

「それより、ほら、どこまでいったのよお」

興味深々、といった態度で、朱美が身乗り出す。

「あ、朱美こそ、どうなんだよ。好きな男とか、いるのか？」

「いないよ、彼氏なんて」

知巳の言葉を、朱美はあっさり切り返す。

「そ、そっか」

「ほら、そんなことより、話した話した。和泉センパイとは、最後までいったの？」

「い……言えるか、そんなこと」

「あ、そ」

ふーん、と朱美は鼻を鳴らした。

「でもさ、普通は、してないならしてないって言うよね。言えないってことは、したって言ったのと同じだよ」

「うー……」

「ボクはね したこと、あるよ」

「なにい！」

知巳は、朱美の言葉に目をむいた。

「だってお前、さっき彼氏いないって……」

「いないよ。ただ、ちょっと事情は複雑なんだ」

そう言って、朱美は、奇妙な笑みを浮かべた。少年の顔が浮かべるにしては妖しい、艶っぽいとさえ言えるような微笑だ。

「どうせ黙っててもバレることだから言っちゃったけどさ」

「……」

知巳は、難しい顔で黙りこくる。

「詳しいこと、知りたい？」

「そりゃまあ、その……」

朱美の問いに対する知巳の答えは、どこか煮え切らない。

「じゃあ、机の一番下の引き出しの中、見て」

「机って、お前の机か？」

「当たり前でしょ。鍵は、財布の中だから」

「い、いいのか？」

そういう知己の声は、ちょっと震えている。もともと、根が生真面目な彼にとって、妹のプライベートを覗き見するなどということは、あまりしたいことではない。

「まあ、無理に見ろとは言わないけどね」

「わ、分かった。何が入ってるか知らないけど……覚悟が決まったら、見とく」

「ん」

朱美は、短くそう返事をした。

進級に伴い、クラス替えがあったのが幸いした。

特に知己は、一年生のころから人付き合いが盛んでなかった。その分だけ、入れ替わった朱美は、たいした苦勞もなく、葛城知己としての新しい生活に順応することができた。

一方、知己の方は、多少の苦勞があった。

もともと朱美は、そのさばさばした性格もあって友人が多い方だ。もし1年生時代の仲のいい級友と別のクラスになっていなかったら、真相に気付かれることはなかったにしても、かなりヘンに思われていただろう。

ともあれ二人は、毎晩綿密なミーティングをすることによって、どうにか今までの交友関係が破綻することを防いでいた。

そして、一週間があっという間に過ぎた。

まだ知己は、朱美の机の引出しを開けてはいない。

母の千恵子に不審に思われるのを防ぐための、寝る前のランニング。

それが、今の朱美には、何となく気持ちよくなっていた。

そして、公園で、幼いころに父親に教わった葛城流の動きを反復する。

中学に入ってから、ほとんど練習していなかったはずのその動きを、自分の体が正確に再現していくのがまた面白い。

知己の体に宿ってしまったことで、古い記憶がよみがえったのか、それとも、知己の肉体自体が、この動きを記憶していたのか……

独自の理論に則った、無駄のない動きは、それでいながらどこか優雅な舞を思わせた。

まだかすかに肌寒さの残る春の夜気が、火照った肌に心地いい。

悔しいことに、やはり運動に関しては、性差というものは歴然とあるようだ。兄である知己の体は、面白いようによく動く。

(もし、元の体に戻ったら……もーちょっとシェイプアップしようかなあ)

ふと、そんなことを思ったとき、かすかな悲鳴を、朱美は聞いた。

押し殺された若い女性の声、と思ったときには、朱美はその方向に走り出している。

「　　！」

黒髪の、華奢な少女が、白いスーツの男に後ろから抱きすくめられている。

少女は、彩乃だった。男に手で口をふさがれたまま、眼鏡の奥の瞳で、助けを求めている。

一方、男は、朱美に見つかったというのに、その浅黒い顔にふてぶてしい笑みを浮かべている。

「なんだ、ガキか　　」

男は、低い声でそう言った。高い鼻梁にウェーブのかかった髪。美男子といえる顔立ちではあるが、その瞳の底に宿る光は、どこか暗い。

「これからは大人の時間だ。帰りな」

「あんたこそ、先輩を置いて帰れよ」

眉を吊り上げながら、朱美が言う。

「ほう……お前、彩乃の男か？」

男は、すっと目を細めた。

「さすが根っから淫乱だな。もう新しい男をくわえこみやがったのか」

「うーっ！」

手で口を覆われたまま、彩乃が悲しげな抗議の声をあげる。

「夜中にンなどどこで何してるかと思ったら、このガキと待ち合わせだったのか？ 彩乃みたいなスケベだったら3Pでもいいんだろうが、俺はこのガキのチンポなんざ舐めたくねえなあ」

どこまでも下司なことを言いながら、男は、彩乃を引きずりながらじりじりと下がっていく。その先は、公園に沿って走る道路だ。人通りはまったくない。

路肩には、赤い塗装のスポーツカーがドアを開けばなしで駐車してあった。どうやら男の車らしい。

「放せって！」

朱美は、男めがけて地を蹴った。

「けっ！」

男が、朱美めがけて彩乃を突き飛ばす。

思わず彩乃の体を抱きとめたその左腕を、冷たい金属がかすめた。

「　　！」

服が裂け、その下の肌に血がにじむ。

男は、いつのまに手にしていたのか、右手にナイフを握っていた。

「つ、津野田さん、やめて　　！」

彩乃が、男に叫ぶ。

「るせえ！」

津野田と呼ばれた男は、獣のように歯を剥き出しにしながら、ナイフを繰り出した。

彩乃から離れた朱美が、ナイフをよけつつも態勢を整えようとする。

と、木の根に足をとられたのか、朱美の体がよろけた。

「ひゃはあ！」

津野田は、笑い声のような気合を放ちながら、一直線にナイフを朱美目掛けて突き出した。

「しっ！」

短い呼気とともに、朱美が、右手をフック気味に払う。

拳ではない。その人差し指と中指が、鉤状に曲げられている。

だが、足元が覚束ないせいか、津野田を狙ったにとしては致命的に浅い一撃だ。

と、その右手が、今来た軌跡を戻るように、津野田から見て左から右に宙を薙いだ。

「 なっ！」

津野田の右手から、ナイフが消えていた。

代わりに、朱美の右手に、ナイフが握られている。

そして、津野田の高そうなスーツが、横一文字に裂けていた。

朱美が、津野田のナイフを瞬時に奪い、それで逆に切りつけたのである。

古武道葛城流は、完全に実戦向けの武術だ。その体系の中には、素手の状態から相手の武器を奪う技も多数ある。朱美が見せたのはそのうち一つだ。無論、朱美がよろけて見せたのも、技の一環である。

「葛城流無刀取りの一つ “辻風”」

にっ、と笑いながら、朱美は言った。

「一度こういうの言ってみたかったんだ」

そして、ナイフを構えなおす。とても素人の構えには見えない。

「く、くそ……！」

津野田は、身を翻し、文字通り車に飛び乗った。

けたたましいエンジン音をたて、車が発進する。いっそ見事な逃げっぷりだ。

「と、知巳くん、うで……」

彩乃が、震えた声で、そう朱美に言う。

「ん？ あ、切れちゃってる」

見ると、シャツの左袖が裂け、二の腕に一筋傷が走っていた。津野田のナイフがかすめたときのものだ。

「大して痛くないし、そんな深くないです。平気ですよ」

「ダメよ、そんな！」

彩乃は、叫ぶように言った。

「消毒して、血、止めないと……あたしの家、すぐ近くだから」

「でも……」

「ね、お願い」

彩乃は、むしろ懇願するように言った。怪我が心配なのは本当なのだろうが、それ以上に、あんな目にあった後で一人で家に帰るのが恐ろしいのかもしれない。

「じゃ、お言葉に甘えときます」

朱美は、気付かれないようにため息をついてから、そう言った。

彩乃の家は、彼女の言葉通り、公園のすぐそばの高級マンションの五階だった。

「今夜も、両親はいないの」

明かりが消えた部屋のドアを開けながら、彩乃は言った。

広々とした部屋の中は、小綺麗ではあったが生活感に乏しく、どこか寒々しい。

朱美も、知己から聞いたのだが、彩乃の家庭は両親とも外で働いており、仕事上の外泊や出張などもしょっちゅうだという。

彩乃はそこまで言わなかったが、彩乃の父親も母親も、家庭を顧みなくなって久しいようだ。それは、“よくできた娘”である彩乃を信頼してのことなのか、それとも、もはや家庭そのものに対する興味を失ってしまったのか……。

彩乃は、部屋の明かりを灯し、救急箱を持ってきた。

そして、朱美がハンカチで押さえていた傷を手早く消毒し、ガーゼを当てた後にくるくると器用に包帯を巻いていく。

「先輩」

彩乃の部屋のクッションに座り、されるがままになっていた朱美が、口を開いた。

「どうして、あんな場所にいたんです？ 無用心じゃない」

「それは……知己くんが、いつもあそこで練習してるって聞いて……たまたま、遠くから見てたの」

「声をかけてくれればよかったのに」

「でも……邪魔になったら、と思って……」

慎重しやかにそう言う彩乃に、朱美は次の質問をした。

「で、あいつは、何者なの？」

「……」

彩乃は、その上品な口をつぐんで答えない。

「昔の彼氏？ にしては、何だか普通じゃなかったけど」

「それは……ごめんなさい。今は、許して……」

彩乃の言葉に、朱美は目を細めた。

そして、右手で、彩乃の左手首を握る。

「あ……！」

朱美は、声をあげる彩乃の腕をねじりあげ、背中に回した。そして、包帯を左手で拾い上げ、両手首を後手に縛り上げる。葛城流捕縛術の応用だが、彩乃にはそんなことが分かるはずがない。

「な、なにをするの？ 知巳くん、やめてっ！」

そう声をあげる彩乃の体を、朱美は、床にうつぶせに倒した。彩乃のなめらかな頬が、床に置かれたクッションに押し付けられる。

「あいつとは、どういう関係だったんですか？」

朱美は、重ねて訊きながら、彩乃のヒップを持ち上げ、スカートに手をかけた。

「ちょ、ちょっと！ やめてよ！ 知巳くんッ！」

手馴れた手つきでスカートのホックを外し、膝までずり下ろす朱美に、彩乃が叫ぶ。

と、朱美は、純白のショーツから伸びた白い太ももを、いきなり、ぴしゃりと叩いた。

「ひゃうッ！」

うつ伏せになり、お尻だけを高く上げた屈辱的な姿勢で、彩乃は悲鳴を上げた。

痛みと衝撃に動きを止めた彩乃のヒップから、朱美は、するりとショーツを剥いた。

まるで水蜜桃のようにまるやかな曲線を描く魅惑的なヒップが、露になる。

「や、やめて、知巳くん……」

その声にむしろ誘われたように、朱美が、右の平手で彩乃のヒップを叩いた。

「きゃああ！」

ぴしゃっ！ という小気味のいい音とともに跳ねる彩乃のしなやかな体を、朱美は、左腕一本で押さえつけた。

そして、赤く染まったヒップに、立て続けにスパンキングをしていく。

「あッ！ ひあ！ いッ！ いやあああ！」

まるで血をにじませたように赤く染まっていくヒップを、朱美は、どこか冷ややかな目で見つめていた。

まるで、自らが施しているこの暴虐の効果を計っているような目だ。

「い、痛い！ いた！ や、やめて！ いやああア！」

彩乃の悲鳴にも、朱美は、心を動かされる様子はない。

「……どう？ 話す気になりましたか？」

ひとしきりこの理不尽な打擲を終えた朱美が、彩乃の顔をのぞき込むようにして言った。

「う……うぐ……ん……ひぐっ……」

彩乃は、その眼鏡の奥の瞳から珠のような涙をこぼし、小さく嗚咽を漏らしている。

スパンキングの痛みよりも、朱美の仕打ちそのものに、心を傷つけられた様子だ。

朱美は、そんな彩乃の上体を起こし、右の手の平を頬に当てた。

「い、いや……もうぶたないで……」

涙声でそう言う彩乃の頬を、するりと撫で、そして、いきなり口付けする。

「んんッ！」

予想外の行為に、彩乃は目を見開いた。

構わず朱美は、彩乃の朱唇を舌でこじ開け、口内をまさぐるようにする。

朱美が唾液を送り込むと、彩乃は覚悟したように目を閉じ、んく、んく、とのどを鳴らして飲みこんだ。

朱美は、おずおずと絡みついてくる彩乃の舌をねじ伏せるようにしながら、その口腔を舌で蹂躪し陵辱していった。

彩乃が飲みこみきれなかった唾液がその口の端からあふれ、あごを伝っていく。

そして、ようやく、朱美は口を離れた。

「……と、知巳くん……ひどい……」

恨むようにそう言う彩乃の声には、しかし、どこか被虐の悦びのようなものがにじんでいる。

朱美は、自分の体の中で、何か凶暴な衝動が育ちつつあるのを自覚していた。

形のいい眉をたわめ、目に涙を溜めた彩乃の表情が、ますますその衝動を強いものになっているのが分かる。

(なんだろ、これ……?)

と、朱美は、股間に鈍い痛みのようなものを感じていた。

(え……?)

普段は意識していなかった股間のものが、驚くほど膨張し、ズボンの中で窮屈そうに大きくなっている。

(男の人のって、こうなるんだ……ボク、すごく興奮してる……)

兄の体を使って、兄の恋人を撈るということに、強烈な後ろめたさを感じながら、朱美は彩乃の前で立ち上がり、ズボンのファスナーを下ろした。

しかし、まだ付き合いの短いその牡器官は、小用を足すときほど簡単には外に出てくれない。

朱美は、焦れたようにズボンのボタンを外し、トランクスごとずり下ろした。

そして、息を飲むようにして見守っていた彩乃の顔に、熱くたぎった男根を押し付ける。

「あっ……」「う……！」

彩乃と朱美は、期せずして同時に声をあげてしまっていた。

(びっくりした……ココ、けっこうピンカンなんだ……)

彩乃に気付かれないように息を整えながら、朱美はそんなことを思う。

そんな朱美の方を、彩乃は、上目遣いで見つめた。

「フェラチオ、してよ」

朱美の直接的な言葉に、彩乃はしばしためらった後、小さく肯いて、その小さな口を開いた。

そして、先走りの汁を溢れさせている亀頭部分を、ぱっくりと啜えこむ。

「……ッ！」

心の準備ができていたので、どうにか声を漏らすことはなかったものの、朱美は思わずぎゅっと目を閉じていた。

自分には本来なかったはずの器官で感じる、まったく初めての快樂。

ぞくぞくぞくっ、と腰から背中に電流が走り、じわーんと頭が痺れる。

(そっか……男って……こんな感じなんだ……)

生温かい口腔粘膜に包まれながら、シャフトの裏側に、少しざらついたような彩乃の舌を感じる。

(気持ちイイ……気持ちイイけど、気持ちイイのは、おちんちんだけって感じ……あんまり、体中に広がってく感じじゃないな……)

快感を快感として捕らえながらも、どこか、頭の中で冷静な部分で、そんなことを思うことができる。

朱美にとっては、肉体的な快感よりも、精神的な昂揚感の方が鮮烈だった。

「イヤらしい顔でおしゃぶりしてますね、先輩……」

舌で唇を舐めながら、朱美は言った。そう言われて、彩乃は恥ずかしそうに目を伏せた。

それでも彩乃は、まるで何かに憑かれたように、ますます情熱的に淫らな口唇奉仕に没頭していく。

「あいつにも、同じようにしたんですか？」

そんな朱美の問いに、びくっ、と彩乃の動きが止まる。

と、朱美は、彩乃の口からペニスを引き抜いた。

そして、べっとりと唾液にまみれたシャフトで、彩乃の整った顔をぴしゃっと叩く。

「あ……」

屈辱の声をあげる彩乃の表情は、しかし、隠しようもないマゾの喜びにぼおっと染まっていた。

「したんでしょう？」

重ねて訊く朱美に、彩乃は、こっくりと肯いた。

「きちんと言葉で」

「ごめんなさい……し……しました……」

小さな子供のようにぼろぼろと涙をこぼしながら、彩乃が言う。

正体不明の衝動に突き動かされ、朱美は、再びペニスを彩乃の口の中にねじ込んだ。

「んんーッ！」

くぐもった声をあげながら、彩乃は、けなげにも、ペニスに歯を立てないように一杯に口を開く。

朱美は、そんな彩乃の黒髪を乱暴に掴み、ぐいぐいと腰を使った。

(こんな……こんな人に……こんな人なんか……っ！)

初心に頬を染めながら彩乃のことを話していた知己の顔を脳裏に思い浮かべながら、朱

美は、腰を彩乃の顔に叩きつけるようにイラマチオを続けた。

「ん……んぐ……んえっ……えぶ……う……っ」

喉奥をペニスで小突かれ、苦しげな声をあげながら、それでも彩乃はペニスに舌を絡ませてくる。

ますます熱くたぎったペニスの根元から、何かがこみ上げてくるのを、朱美を感じていた。

(あ、こ、これって……！)

反射的にこらえよう、と思ったときには、もう手遅れだった。

「ん、あ、あッ！ あーっ！」

朱美は、思わず声をあげながら、彩乃の口内に激しく射精していた。

「んんーッ！」

口の奥を直撃するスペルマの勢いに、彩乃が悲痛な声をあげる。

しかし朱美は、しっかりと彩乃の髪を掴み、その顔を自らの腰に押し付けていた。

力の抜けた脚が、がくがくと震え出す。

(これが……おとこのひとの……イキかた……?)

急転直下、という感じで訪れた絶頂に、朱美は、とまどいながらも体を震わせていた。

「ん……？」

早々と入り込んでしまったベッドの中で、知巳は、ふと目を開いた。

部屋の電気はもう消してあるので、その瞳に映るのは闇だけである。

その闇の中、何か、妖しく白いものがうねっているように見えた。

そして、意識すると未だ違和感を感じるショーツの中で、股間が妙な感じで疼く。

「……」

半覚醒状態のまま、知巳は目を閉じ、寝返りを打った。

体の芯がなぜかいらつくような感覚……。

そして知巳は、いつのまにか夢を見ていた。

彩乃が、ベッドの上で、Mの字に脚を開いている。

そして、彼女の白い太ももに手をかけ、ヒップを持ち上げるようにしながら、朱美はクソニリングスを続けていた。

彩乃の下半身は剥き出しで、スカートは床に脱ぎ捨てられている。そして、ショーツはきゅっと引き締まった左の足首にまとわりついたままだ。

上は、柔らかな生地の特レーナをまっとうており、その服の上から、乳房を強調するような感で、ふくらみの上下に包帯が巻かれている。無論、両手首は後ろに緊縛されたままだ。

「あ……ンあっ……はあ……や、あぁン……」

卑語で“まんぐり返し”などと呼ばれる、マット運動の後転を中途半端にしたような姿勢で、彩乃は甘く喘いでいる。

その秘裂はとろとろと熱い蜜を溢れさせ、まるで肉の花のように淫猥にほころんでいた。朱美は、目を閉じ、無言で舌を使っている。

クレヴァスを舌でえぐり、舌先で膣口をえぐり、肉襞をちゅうちゅうと軽く吸う。

「あ、あぁ……あン……ンあぁん！」

下の裏側の柔らかな部分でクリトリスを刺激すると、彩乃はひととき高い声をあげた。

朱美は、奈々との禁断の関係で身につけた技術を駆使して、彩乃を着実に追い込んでいった。

それでいながら、絶頂を間近に控え、太ももがひくひくと痙攣すると、意地悪くその口を離すのだ。

「ひああああ……」

イキそこねた彩乃は、そのたびに、何とも情けない声をあげながら、朱美の方を見る。

その瞳は宙ぶらりんの性感に潤み、どこか空ろにさえ見える。いつもの、優しげでありながら知性的な輝きは、微塵も伺えない。

そんな彩乃の表情をちらりと眺めてから、朱美は、口による淫らで残酷な愛撫を再開するのだ。

「あ、ンあああッ！ と、知己くうんッ！ お、おねがい……ひ、ひあああああ！」

中断される前よりは確実に大きくなりながら、絶頂にまで至らない快楽に、彩乃はしなやかなその体をよじりながら、あられもない声をあげる。

もし両手が自由なら、朱美の目もはばかりらず、激しい手淫によって絶頂を貪ろうとしただろう。それを証明するかのように、彩乃は、ぎゅっと両腕を突っ張らせ、その細い手首に包帯を食い込ませている。

そんな彩乃の様子を観察しながら、朱美は、ペニスがすっかり力を取り戻しているのを自覚していた。

(無節操だなあ、ホント……)

とは言え、無節操なのは、知己の体か、朱美の心の方なのか……。

こっそりと苦笑しながらも、朱美は、そんなことを思ってしまう。

しかし、屹立するペニスは、自分自身が興奮している確かな表れだ。

そもそもこの剛直を熱くそそり立たせている血液は、まるで湯を注がれたように痺れている脳に流れているものと同じものなのだ。

肉体と精神は、もともと不可分のものなのだから……。

(なのに……)

なんでこんなことになってしまったのか、といったような今さらながらの疑問も、太陽の前の薄氷のように溶けていってしまう。

残るのは、アクメを求めてはしたなく腰を動かす彩乃を犯したいという欲望だけだ。

(ああ……ボク、入れたくなっちゃってる……)

再び、絶頂間近の彩乃への愛撫を中断し、ひくん、ひくんとしゃくりあげ、先走りの汁をまきちらしているペニスに目を落とす。

「や、やめないで、知巳くん……やめちゃ、いやア……」

はあっ、はあっ、と喘ぎながら言う彩乃のヒップをシーツの上を下ろし、朱美は愛液に濡れた口元をぬぐった。

そして、膝立ちになって、反り返ったペニスを彩乃に見せ付けるようにする。

「はああ……」

彩乃は、快楽に蕩けきった視線を、そそり立つ剛直に絡みつけた。

「ほしいですか？ 先輩……」

自分でも驚くほどに熱く、そして硬くなっている男根に手を添え、亀頭部分をぐちゃぐちゃになった彩乃のクレヴァスにこすりつけながら、朱美は意地悪く訊いた。

「ほ、ほしいの……ほしい……おねがい……い、いれて……」

彩乃は、普通の理知的な彼女からは考えられないような甘い声で、淫らなおねだりをする。しかしその頬は、羞恥や屈辱よりも、快楽と、そして被虐の喜びに染まっているようだった。

「本当に淫乱だなあ、先輩は……」

そう言いながら、朱美は、ペニスの先端を、すっかりほころんだ彩乃の秘所に浅くもぐりこませた。その状態で、腰を止める。

「あ、ああっ！ は、早く、早くうッ！」

直前でお預けを食らった彩乃は、半狂乱になって声をあげた。

「あの男とも、したんですね、セックス」

そんな彩乃の顔をにらみつけながら、朱美が訊く。

「そ、そんな、もう、許して……」

「したんでしょう？」

ひどく優しい口調で、朱美が重ねて訊いた。

「し、しました……セックス、しました……」

辛そうに眉をたわめ、涙を流しながら、彩乃は告白する。

「何度も何度も？」

「最初は、無理矢理……犯されて……でも、こばめなくなって……あたし……あたし……」

「好きだったんですか？」

「分からない……でも、好きになれるかもって……なのに、あの人は、あたしを捨てて、

東京に……ごめんなさい、知巳くん、ごめんなさいッ！」

彩乃が、涙をこぼしながら、血を吐くような声で叫び、必死で謝る。

「おねがい……許して……今は、今は知巳くんだけなの……！」

「……っ！」

朱美は、名前をつけることのできない激情に突き動かされ、一気に彩乃を貫いた。

「ンああああああああああッ！」

それだけで達してしまったのか、彩乃が、その細い体を弓なりに反らす。

ひくひくと痙攣する彩乃の体を、朱美は、ぎゅっと抱き締めていた。

「あく……っ……ン……！」

それによってさらなる絶頂に至ったのか、彩乃の痙攣はしばらく止まらない。

ペニスをみっしりと締めつける靡肉がひくひくと蠢くのを、朱美は、はっきりと感じていた。

(す、すごい……)

奈々と双頭ディルドーでつながったときとは全く違う、相手の体内を自分自身の肌と粘膜で感じる感触。

(これが……セックスなんだ……)

すでに処女をディルドーに捧げてしまったとは言え、未だ男性の侵入を体内に許したことのなかった朱美は、熱い膣肉の感触に、奇妙な感動すら覚えていた。

「か……はぁっ……ンあ……はぁ……はぁ……はぁ……」

それまで絶頂感の中を漂っていた彩乃が、ようやく呼吸を整える。

そして、涙に濡れた目をうつすらと開け、父親に許しを請う童女のような瞳で、朱美を見た。

今まで朱美が見たことのない、そして、知巳にすら見せたことがないであろう、そんな彩乃の目

朱美は、そっと、そんな彩乃の唇に唇を重ねた。

自らが放った精液の味と匂いが、かすかに残っている。それも、なぜか気にならない。

柔らかな、彩乃の唇。

それを傷つけないようにそおっと、ちゅっ、ちゅっと吸い上げる。

自分が、なぜそんなことしているのか分からない。それでも朱美は、まるで傷ついた子猫に親猫がしてやるように、彩乃の唇を優しく舐め、頬を濡らす涙を舐めとってやった。

「あぁ……と、知巳くん……」

うっとりとした顔で、彩乃が、白い首を反らす。

その首筋に唇を這わせながら、朱美は、腰を動かし始めた。

「ン……はぁっ……ひいっ……！」

絶頂を迎えたばかりで敏感になった膣内粘膜をこすられ、彩乃はすすり泣くような声を漏らす。

一方朱美も、ペニスを通して伝わるぞくぞくするような快楽を感じながら、次第に腰の動きを速くしていった。

発達した雁首が内側の壁をえぐり、ざわめく肉壁がシャフトに絡みつく。

痛みを感じるほどの快感に眉をたわめながら、朱美は、次第にペニスの表面で高まる快感に夢中になっていった。

加えて、自らの動きによって相手を支配しているような感覚に、激しい興奮を覚える。

包帯によって緊縛された彩乃が、不自由な体をうねらせている様が、奇妙に愛しい。

(なんか、可愛い.....)

じんじんと痺れるように興奮した頭で、そんなことを考えてしまう。

そして朱美は上体を起こし、服の上から彩乃の形のいい乳房を揉みしだいた。

「ン.....はぁ.....あう.....ンクッ！ はあああッ！」

ブラのカップに乳首にこすれているのか、甘い声をあげながら、長い黒髪を乱して彩乃が身悶えた。

そして、ペニスの動きをさらに奥に迎え入れようとするかのように、腰を浮かす。

そんな彩乃の動きに応えるように、朱美はその腰をぐいぐいとグラインドさせた。

「あ、あッ！ 知巳くん、それ.....きもちイイっ.....！」

ペニスの先端が感じる場所をとらえたのか、彩乃がひときわ高い声をあげる。

「ここ？ ここがイイんですか？ 先輩.....っ」

朱美はそう言いながら、声が上がってしまうのをどうすることもできずない。

そして、彩乃の腰をがっしりと固定し小刻みに腰を動かして、探り当てたGスポットを亀頭でこする。

「ひゃいッ！ す、すごいイイッ！」

ぐうん、と彩乃の体がのけぞり、その熱くとろけた蜜壺がきゅうっと収縮した。

「あ、ああっ！ んうっ！」

膣肉による柔らかな締め付けに、朱美も声をあげ、彩乃の体に覆い被さってしまう。

「ああ.....と、ともみくん.....ともみくうん.....」

二人分の体重を後手に回された両腕に受けながらも、彩乃は、快楽に支配されきった顔で、媚びるような甘え声を上げる。

「センパイ.....な、中に、出して.....だいじょぶ、ですか.....？」

朱美が、最後に残った理性で、そう訊く。

だが、もしダメだといわれても、そのままペニスを抜くことができたかどうか.....。

「うん.....きょう、は.....へい、き.....」

喘ぎ声の合間に、彩乃がようやくそれだけを言う。

朱美は、彩乃のそこから愛液がしぶくほどに、抽送を激しくした。

「あああああああああああッ！」

腕を戒められ、抱き締めることができないことの代わりに、ますます激しく、彩

乃のそこがペニスを締めつけた。そして、射精を促すように、きゅんきゅんと蠕動を繰り返す。

「ン！ あ！ あんっ！ ンあーッ！」

朱美は、どうすることもできずに少女らしい悲鳴をあげながら、彩乃の体内に大量の精を放っていた。

「あああッ！ また、またイクッ！ イックううううううううううううううーッ！」

体内でびゅくびゅくと暴れながら熱いスペルマを撒き散らすペニスの動きに、彩乃もまた絶頂を迎える。

(あア……出てる……すごい……体の中に、出してるウ……)

人の体の中に精液を注ぎ込むという行為に、目もくらみそうなほどの興奮と快感を覚えながら、朱美は、何度も何度も射精を繰り返していた。

輸精管を、粘性の高いスペルマが駆け抜ける感触が、妙に生々しい。

「は……はぁ……はぁ……あ……ああああ……」

がっくりと、朱美は体を弛緩させた。

右の頬が、彩乃のなめらかな右の頬に触れる。

その、頬と頬の間に挟まった彩乃の髪の毛の感触が、ひどく鮮明だ。

朱美は、彩乃の艶やかな髪に右手を伸ばした。

「ひゃう……」

髪を撫でると、ぞくぞくとした快感があったのか、彩乃が可愛い悲鳴をあげる。

「んあ……知巳くん……すき……」

うっとりとした声で、彩乃が言う。

朱美は、少し時間をおいてから、こっくりと肯いた。

「……！」

がばっ、と知巳は寢床で跳ね起きた。

そしてあわてて自分の体を見下ろす。

やはり、朱美の体だ。

「うー……」

小さくうめきながら、蛍光灯をつける。時計の針は深夜0時。眠りについてから1時間ほどしか経っていない。

知巳は、夢の中で、彩乃を犯していた。

経緯はわからないが、後手に緊縛した彩乃の体を、さんざんに陵辱する夢である。

もし元の自分の体だったら夢精してしまっていたのではないかと思えるような、リアルな淫夢だった。

「うわ……」

ベッドに腰掛け、パジャマの中を覗き込んだ知巳は、思わず声をあげていた。ショーツが、べっとりと自らが分泌した体液に濡れている。

少しずつ冷えていくショーツが股間に張りつく感触が気持ち悪い。

それでいながら、体の芯に、奇妙な火照りがある。

イラつきのようにも思えるが、微妙な甘さを伴った、そんな感覚だ。ペニスが勃起する寸前のあの感じに、似ていなくもない。

「……」

知巳は、パジャマの下とショーツを脱ぎ捨てた。薄めの陰毛が、愛液でべっとりと恥丘にはりつき、その部分の外観をますます幼くしている。

ふーっ、と知巳は溜めていた息を吐き出した。

そして財布の中から銀色のキーを取り出す。

それは、朱美の机の鍵だった。

第四章

「緑郎さんですか？ 葛城ですけど……」

「あー、朱美ちゃん？」

普段通りのなれなれしい口調で、電話口の向こうの男は答えた。

「……なんか、声ヘンじゃない？ 風邪ひいちゃってる？」

「そ、そんな感じです」

朱美と知己は、声が似ていることでも有名だった。が、やはり、知己の喉でいくら声を作っても、元のようにしゃべるのには無理がある。朱美は、ちょっと咳き込んで見せた。

「そりゃまたタイヘンだね～。女の口は足腰冷やしちゃダメだよん」

「うん……」

「ところで、オレの隠れ家に何かあったの？」

「えっと、そうじゃないんだけど」

緑郎、と朱美が呼んだ男の言う“隠れ家”とは、朱美と奈々がブレイに使うあの廃屋の地下室のことだ。

萌木緑郎。自称、フリーの情報屋。

情報屋などという職業が成立するものなのかどうか、朱美にはよくわからない。ただ、この緑郎が、世間の裏事情にやたらと精通し、そして何やら怪しげな稼業で生計を立てていることは確かだ。

朱美はひょんなことでこの緑郎と知り合いとなり、この街における彼の“隠れ家”を管理することになったのだ。管理といっても、鍵を預かり、そして時折掃除をするだけのことだが。

自分が使わない間は、あの部屋は好きに使ってもいい、と言われ、実際朱美はそうしている。

「あの部屋のことじゃないってーと？」

「前に、緑郎さん、東京で探偵みたいなことしてるって言ってたじゃないですか」

「うんうん」

「実は、調べてほしいことがあるんですけど……」

「一応、依頼はお金をもらって受けることになってるんだけどね」

緑郎はそう言って、朱美の反応を探るようにちょっと間を置いた。

「やっぱし……？」

「でも、他ならぬ朱美ちゃんの頼みだからねえ。あの時は、朱美ちゃんや知己ちゃんに、随分お世話になったし……。あ、そー言えば、知己ちゃんは元気い？」

「えと……今は、あんまり元気じゃない、かな」

「二人して風邪？ いかんねー」

緑郎が、能天気な声でそんなことを言う。

「あの一、それで……」

「はいはいはい。話を戻しましょ。で、朱美ちゃんは、オレに何を調べてほしいって？」

「あの、津野田ってヤツのことを調べてほしいんです」

「ツノダ？」

「ええ。ボクの街出身で、最近まで東京に行った人で……たぶん、ヤバい系の仕事してる人」

「ヤバい系？ マル暴とか？」

「よく分かんないけど……」

「年は？ あと、顔の特徴とか」

「二十代半ばから三十の間かな？ 顔は黒くて、ちょっと目つきがヘンだった」

「それだけじゃね～。雲をつかむような話だわぁ」

緑郎が、情けない声をあげる。

「あ、そう言えば、車は赤い外車でした」

「お？」

「ツードアのスポーツカーで、確かナンバーは……」

朱美がうる覚えのナンバーを告げると、電話の向こうの緑郎が満足そうな声をあげた。

「おっけおっけ。そういうことが分かれば、けっこう絞り込めるよ」

「よかった……」

「で、なに？ ま・さ・かぁ……」

「は？」

緑郎の妙な声音に、朱美が眉を寄せる。

「朱美ちゃんの彼氏じゃないだろうね～」

「違いますッ！」

朱美は、緑郎が耳を押さえるであろうほどの大声をあげた。

「最低の夕ズ野郎ですよ！」

「朱美ちゃん、分かったから、んなおっきな声出さないで……」

「あ、ごめんなさい」

「じゃあ、何か分かり次第連絡を……いたっ！」

いきなり、緑郎が声をあげた。

「緑郎さん？」

「ち、違うよランちゃん！ 誤解だって！ 朱美ちゃんってのはお店のコじゃないってば！」

言い訳めいた緑郎の言葉に、どたばたという元気な足音が重なって聞こえる。どうやら、電話の向こうで緑郎が彼女に詰問されているらしい気配だ。

「そりゃ、アケミちゃんなんて確かにお水っばい名前だけど」

「おーきなお世話です！」

「あ、ごめんごめん、とりあえず、もう切るから……わあ！ ランちゃん、そんなん投げちゃだめだって！」

そして、ぷつ、と電話が唐突に切れる。

朱美は、コードレスの受話器をしばし眺めた後、は一、と一つため息をついた。

そして、知己の部屋を出て、自分の部屋に入る。

そこでは、自分の体の中に入った知己が、ベッドに寝こんでいた。

「兄貴、調子はどう？」

そう訊く朱美に、知己は、あーとかうーとか、そんな不明瞭な言葉で答える。

知己は、風邪をひいてしまったらしい。

そして、これまでの気苦労もあってか、かなりの高熱を出してしまったのである。

「ったく、体はボクのなんだから、大事に使ってよ」

「にゃー……」

知己は、いかにも情けなさそうな声でうなる。

「こんな日に限って、母さんは法事だし……」

と、その時、玄関のチャイムが鳴る。

「あ、来た来た」

「えあ？」

知己は、“誰が？”という言葉さえしゃべれない。そんな知己に朱美はにやっと笑いかけながら、玄関のドアを開けに行った。

「こんにちは～」

元気にそう挨拶をして入ってきたのは、二人の従妹である奈々だった。

(奈々が、来た……？)

熱でぼんやりとなった頭で、知己は考えた。

ただでさえまとまらない思いが、さらに乱れる。

昨夜、知己は、とうとう朱美の机の引出しを開けた。

そしてそこには、信じられないものが入っていたのである。

双頭ディルドーをはじめとする、様々な淫具。ポラロイドカメラに小さなビデオカメラ。それで撮影されたとおぼしき、何枚もの写真と、幾つかのビデオテープ。

そしてそれは、妹である朱美と、従妹である奈々の痴態を映したものであった。

白いシーツの上で、淫らに絡み合う二人の少女……。

ただし、被写体となっているのは、ほとんどが奈々だった。

奈々が、その幼い顔に不釣り合いな乳房に自ら手を這わせ、無毛の恥丘に指を這わせている写真。

シリコン製のディルドーで未成熟なクレヴァスを貫かれ、愛液と、そして破瓜の血を流している写真もあった。

そして、朱美が手ずから鋭い針で奈々の乳首にピアスホールを開けるビデオ。

そんな映像の中で、奈々は、被虐の喜びにそのあどけない顔を染め、媚びるような視線をレンズに向けていた。

にこにこ無邪気に微笑む、どこかおっとりとした一歳年下の従妹。その従妹のあまりにも淫らな一面を、知己は発見してしまったのだ。

知己は、時が経つのも忘れて、それに見入ってしまった。

明け方まで、汗をかき、股間を濡らした上に、半裸のまま、すごしてしまったのである。

気がついたときには全身に悪寒が走り、頭は重く痛んでいた。

(奈々……)

風邪の症状とは別に、胸が締めつけられるような思いがあった。

一年余り前、知己は、奈々に告白していたのだ。ちょうど中学を卒業するときだった。初恋だった。

その知己の申し出を、奈々は、申し訳なさそうに断った。

ゴメンなさい……あたし……知己ちゃんを、そんなふうに見れないの……。

泣きそうな顔だったが、あの奈々が、と思うくらい、はっきりとそう言った。それによって知己はむしろ救われたくらいだ。

そして、そんな奈々の態度を、知己はその時意外に思わなかった。けっきょく奈々にとって、知己はあまりにも身近な一つ上の従兄でしかなかったのだろう。

そんな奈々が、朱美と、そういう関係にあった。

(なんか……バカみたいだな……俺……)

心の中で、自嘲じみた笑みをつい浮かべてしまう。

が、奈々や朱美を恨む気にはなれなかった。

(もう、俺には、彩乃先輩がいるし……)

そう思いながらうっすらと目を開けると、奈々が、心配そうに自分の顔をのぞきこんでいた。

「大丈夫？ 朱美ちゃん」

「んん……」

そう、返事にならない返事をしながら、ぼおっと奈々を見つめる。

奈々は、休日にもかかわらず、彼女が通う学校の制服であるセーラー服を着ていた。

「なんで、せーふく？」

ようやく、それだけ言葉にする。

「あ、これ？ えへへ……似合う？」

そう言って奈々は、くるりと一回転して見せた。フレアスカートが、花のようにふわりと広がる。

「朱美ちゃんに、見てほしくて」

「……かわいいよ」

知巳は、素直にそう言った。

「ホント？ 嬉しい……」

奈々が、そのあどけない顔を、ぼおっと染める。

「あ、そろそろお昼だね。奈々、おかゆ作ってあげる」

そして、照れ隠しのようにそう言って、部屋を出てぱたぱたと階段を下っていく。

知巳は、ぼんやりとした顔のまま、一つため息をついた。

奈々がおかゆを作っている間にさらに一眠りして、知巳の状態はだいぶ落ち着いてきた。もともと、ここ一週間のストレスによる寝不足が一気に出て、体調が崩れただけだったのだろう。きちんと睡眠をとれば、若い体はすぐに回復をする。

「お・ま・た・せ～」

にこにこ微笑みながら、奈々がおぼんにおかゆを載せて部屋に入ってきた。

「あ、大丈夫？」

半身を起こす知巳に、奈々が心配そうに訊く。

「うん。だいぶ、よくなったよ」

「よかった」

そう言って、奈々はおぼんを知巳の膝の上に載せた。

「はい、あーん」

「じ、自分で食べられるよっ！」

れんげでおかゆをすくって食べさせようとする奈々に、知巳は慌てたように言った。

「え～。奈々、こういうのちょっと懂れてたのにい」

「ま、また今度ね」

知巳は適当なことを言いながら、れんげをひったくるようにした。

そして、次第に回復しつつある食欲に任せて、ぱくぱくとおかゆを平らげていく。

「朱美ちゃん」

「な、なに？」

つい、一瞬反応を遅らせてしまいながら、知巳が答える。

「梅干、食べないの？」

「げ」

知巳は、今まで無意識に無視していた小皿の上の赤黒い物体に注意を向けさせられ、声をあげてしまった。

「好きでしょ、梅干」

「そ、それは……」

梅干は、ほとんど好き嫌いのない知巳の、唯一苦手とする代物だ。朱美や、母の千恵子がそれを喜んで食べるのを、知巳は心底不思議に思っている。

「今は、いいよ……」

「だーめ。梅干、体にいいんだから！」

そう言って奈々は、梅干を箸でつまみ、知巳の口元に差し出した。

「……」

じっとりと、額に冷や汗がにじむ。

そして知巳は、まるで薬でも服むような感じで、その梅干をぱくりと口の中に入れ、一気に飲みこもうとした。

「んぐっ！ わっ！」

理の当然として、種が喉に引っかかり、あわててそれをおかゆの入っている土鍋の中に吐き出す。

「だ、だいじょうぶ？ そんなに慌てなくても……」

げへげへと咳き込む知巳の背中をさすりながら、奈々が言う。

その小さな手で背中を撫でられる感触を、知巳は、つい意識してしまった。

奈々の豊かな胸が、わずかに腕に触れている。

「奈々……」

すぐ近くにある従妹の顔を見つめながら、知巳は、思わずそう呼びかけてしまった。

脳裏に、その体を朱美にもてあそばれ、悦びの表情を浮かべる奈々の映像がよみがえる。

「汗びっしょりだよ、朱美ちゃん」

そう言って奈々は、おぼんを床に置き、そして、知巳の着ているパジャマのボタンに指をかけた。

「あ、ちょっと……」

「奈々が、脱がせてあげる……」

そう言って、白い指先で、一つ一つ、パジャマのボタンをはずしていく。

知巳は、なぜかされるがままになっていた。

素肌に触れるか触れないか、という奈々の指先の動きが、妙にこそばゆい。

汗でしっとり濡れた白い乳房が、外に解放された。ブラは、していない。

「きれいなおっぱい……」

奈々が、目許をぼおっと染めながら、そんなことを言う。

「奈々……」

「あ、ごめん。体、ふいてあげなくちゃね」

そう言って、奈々は、タオルを取り出した。

そして、パジャマの上を脱いだその体の汗を、丁寧にぬぐっていく。

そうしながらも、奈々の目は、乳房や首筋の曲線をうっとり眺めている。

と、奈々が持つタオルが、胸元をまさぐりだした。

「も、もういいよ。あとは、自分でやる」

「遠慮しないで、朱美ちゃん」

ぷにぷにと、やや小ぶりながら形のいいバストを磨るようにしながら、奈々が言う。

(うわ……な、なんだこれ……んっ……！)

じわーん、と胸から全身に広がるような性感に、知巳は、思わず身をすくめていた。

この前、戯れに自分の乳首をいじってみたときは明らかに違う。くすぐったいような、それでいながら、ひたひたと何か温かいものが少しずつ満ちていくような、そんな感じだ。

「朱美ちゃん……ちくび、たってきた……」

「え……」

奈々の指摘に、知巳は、かあっと頭に血が昇るのを感じた。

「可愛い……っ」

そう言って、奈々は、がまんできなくなったように、タオルを捨て、左の乳首に吸いついた。

「んあっ！」

柔らかな唇で、半ば勃起した乳首を吸引され、知巳は思わず声をあげてしまっていた。

甘い衝撃が、じんじんと電気のように体に流れる。

力の抜けた体を、奈々が、ベッドの上に押し倒す形になった。

「だ、だめだよ、奈々……」

ちゅうちゅうと交互に乳首を吸われ、知巳は制止の声をあげる。

しかしそれは、普段の知巳の口調や朱美の声とはかけ離れた、ひどく弱々しいものだった。

「あけ……じゃなくて、兄貴、家の中に、いるんでしょ？」

「知巳ちゃんなら、夕飯の買い物してくるって出かけちゃったよ」

そう言ってから、くすっ、と微笑み、奈々は胸への愛撫を再開した。

未知の快樂に、心臓の動悸が早鐘のように高まり、知らず知らずのうちに体がうねうねとシーツの上でくねる。

それを押さえこむように、奈々は、その小さな体を重ねてきた。

「朱美ちゃん、ごめんなさい……あとで、どんなバツでも受けるから……」

舌足らずな声でそう言いながら、奈々は、ぷにぷにと優しく乳房を揉み、乳首の周囲をくるくると文字通り舐め回す。

充血し、かたくしこった乳頭が奈々の唾液に濡れている様に、知巳は、不覚にもますます興奮してしまう。

「はぁ……ン」

ひとしきり胸への愛撫を一段落させた奈々は、ゆっくりと上体を起こした。

そして、セーラー服の上を、手早く脱ぎ捨てる。

「奈々……」

次第にあらわになっていく奈々の肌に、知巳は、思わず目を釘付けにしていた。

初恋の少女の、その幼い顔に不釣り合いな豊かな乳房を包む、白いブラ。

奈々は、そのブラのホックをためらうことなく外した。

そして、羞恥に頬を染めながらも、どこか誇らしげに、その胸を突き出すようにする。

「あ……」

知巳は、思わず息を飲んでいて。

小さな銀色の金属球を棒状の金具が結ぶ、バーベル型といわれるピアス。

そのピアスのシャフトが、奈々の、可憐なピンク色の乳首を貫いていたのだ。

「見て、朱美ちゃん……」

そう言って、奈々は、知巳が頭を乗せる枕の両脇に手を置いた。その重たげな乳房が、ちょうど目の前に来る。

「奈々のおっぱい、こんなにイヤらしくなっちゃった……」

マシュマロを思わせる白く柔らかな乳房の頂点にある乳首が、ひくひくと震えているように見える。

「い、いたく、ない？」

ぐるぐると頭の中で血液が旋回しているような感覚を感じながら、知巳は、思わずそんなことを訊いてしまった。

「キズも治ったし、ぜんぜん痛くないよ……それより、きもちイいの」

んふっ、と奈々は、その幼い顔に淫らな笑みを浮かべた。

「普段は、そんなでもないんだけど、何かあって乳首のこと意識すると、スゴいの……つーん、って、引っ張られるみたいな感じで……奈々、学校のトイレで、いっぱい一人エッチしちゃったよ」

奈々の告白に、知巳は、何かが自分の中でどばあっと溢れるように感じた。

(わ、わ、わ……なんだ、これ……?)

粘性の高い温かな何かが身の内からこぼれ出る感覚に、知巳はパニックになりかける。

(やべ、どうしょ……俺……俺……)

(ア、アソコが……)

(濡れて、る……)

全身が熱くなり、その中でも特に下腹部が、じんじんと疼きながら火照っている。

と、腰のあたりをまたぐようにしていた奈々が、ぎゅっ、と体重をかけてきた。

腰と腰が、ふわりと広がった奈々のスカートの中で、密着する。

「朱美ちゃん……」

ピンク色の小さな舌で唇を舐めながら、奈々が朱美の名を呼ぶ。

「奈々……」

知巳は、まるで吸い寄せられるように、奈々の巨乳の頂点に唇を寄せていた。

歯に、ピアスの球が少し触れる。

「あうん！」

声をあげ、ぎゅっ、と奈々は知巳の頭を抱きしめた。

奈々の柔らかな胸が、知巳の顔をふさいでしまう。

「んうう……」

その甘美な感触に身を任せそうになりながら、呼吸を維持するために、知巳はぐるりと体を入れ替えた。

奈々が下に、知巳が上になる。

(彩乃先輩……ごめんなさい……俺……)

奈々の乳房をまさぐり、ピアスごと乳首を舐め回しながら、知巳は頭の片隅でそんなことを思っていた。

(……ごめんなさい……浮気、しちゃってる……)

しかし、ピアスのせいで敏感になった乳首を責められ、甘く声をあげる奈々を前にしては、もう体を止めることはできない。

「き、きもちいいよ、朱美ちゃん……おっばい、すごく感じるの……」

朱美の調教の成果か、あからさまにそんなことを言いながら、奈々は、その小さな体を身悶えさせた。そのたびに、まるやかな曲線を描く双乳が、誘うようにふるふると揺れる。

「奈々……奈々あ……」

名前を呼びながら、口の中で乳首ピアスを転がすように刺激すると、奈々は体を反らせて嬌声をあげた。

そして、大胆な手つきで、知巳の脚の間に手を差し込んでくる。

「あう……っ！」

その部分をパジャマの布越しに触られ、知巳は奈々の胸に突っ伏すような姿勢になってしまった。

「すっごおい……朱美ちゃん、びちょびちょになってる……」

くにくにと指でいたずらしながら、奈々が声をあげる。

「あっ、あっ、あっ、あっ……」

驚くほど敏感になった女のこの部分を刺激され、知巳は、断続的に声をあげてしまっていた。自分でも恥ずかしくなるような、甘い喘ぎ声だ。

(俺……こんな声、出しちゃうなんて……)

そんな屈辱を感じながらも、自然と声が漏れるのを止めることはできない。

「今日の朱美ちゃん、ホントに感じやすいね？ カゼのせい？」

自らの豊かな乳房に顔をうずめ、はアはアと喘いでいる知巳に、奈々が声をかける。

「たまにはいいよね、こういうのも……」

「う、うんッ。ン、あ、あん……ひゃぁん……！」

しかし知巳は、まともに返事を返すことができない。

「でもでも……朱美ちゃんばかり感じちゃって……ズルいよ……」

「あ、ゴ、ゴメン……」

「奈々のも、いじって……」

そう言って、奈々は、腰を浮かした。

奈々の意図を理解して、知巳は、そのスカートを手を脱がそうとする。

「ちょ、ちょっと、破けちゃうよ！」

ファスナーもおろさずにスカートを引き摺り下ろそうとする知巳に、奈々が言う。

「ゴメン……」

そう言って、丁寧にホックを外し、ファスナーを下ろしてから、学校指定の紺色のスカートを脱がす。

その間、奈々も、器用に知巳のはいているパジャマの下を脱がしてしまっていた。

奈々も、知巳も、ショーツ一枚のあられもない姿になる。

二人のショーツとも、中身がすけて見えるほどに、ぐっしょりと濡れていた。

「んふ、パンツも脱いじゃお」

珍しく自分がリードしているのが嬉しいのか、笑みを含んだ声で奈々が言う。

「うん……」

そう返事をして、横たわったままショーツを脱ぐ奈々の傍らで、知巳もショーツを脚から抜いていった。

そして、全く陰毛の生えていない、ひどく幼い外観の奈々の恥丘に、思わず目を奪われてしまう。

写真やビデオで見て知っていたとはいえ、実際に目にすると少しショックだ。

(奈々……やっぱまだ、子供なんだよなあ……)

そして、やや見当外れなことを考えてしまう。

「朱美ちゃん……」

そんな知巳の思いなど知らぬげに、奈々は、両腕を広げて甘えた声をあげた。

無言で知巳は奈々の体にかぶさる。

そして、驚くほど自然に、唇を重ねてしまった。

(あ……)

知巳の胸を、ちくりと罪悪感が刺す。しかし、やはり身の内の衝動を止めることはできない。

(それに、もう俺……元に戻ることはできないかもしれないんだし……)

そんな言い訳めいたことを考えながら、ヤケになったように、奈々の舌に自らの舌を絡めた。二人の少女の唇の間で起こるちゅぴちゅぴという音が、部屋に響く。

再び奈々が、知巳の秘所に指先を伸ばした。

「うッ……」

唇を重ねたまま、知巳はうめいてしまう。

そして、お返しとばかりに、奈々のその部分に手の平を当てた。

無毛のヴィーナスの丘の奥で、熱い粘膜が息づいている。その部分はすでに愛液に濡れ、知巳の指先にぴったりと吸いついた。まるで、触れられるのを喜んで迎え入れているかのようだ。

「う……うん……んぐ……んむ……ふん……」

ちゅっ、ちゅっ、とキスを繰り返しながら、二人は、互いの秘苑をしなやかな指先でまさぐった。

あとからあとから溢れ出る熱い体液が、互いの指先を濡らし、きらきらと光らせている。

奈々と知巳は、互いにその脚を絡ませあうようにしながら、体の奥から湧き起こる快感に夢中になった。

(あ……す、すごい……こんなふうなんだ……)

特に知巳は、始めて感じる女の性感に、文字通り溺れそうになっている。

(熱くて、痺れて……このまま融けちゃいそうな感じがする……)

と、その時、奈々の悪戯な指が、莖に隠れていた快樂の小突起に触れた。

「ふぐっ！」

全身に電流を流されたかのように、びくっ！ と知巳は体を震わせる。

「も～、朱美ちゃん、ひっどーい」

奈々が、なじるような声をあげる。知巳が、口内にあった奈々の舌に、思わず噛みついてしまったのだ。

「ご、ごめん……」

「お返し、しちゃうからあ」

どこか小悪魔じみた顔でそんなことを言いながら、奈々は、クリトリスを納めた莖を指先で軽く挟み、くにくにと弄んだ。

「あ！ ンわっ！ ひゃっ！ きゃあ！」

知巳は、奈々に覆い被さった姿勢で、次々と屈辱的な悲鳴をあげてしまった。

鋭い快美感に突き上げられ、びくっ、びくっ、と体が勝手に震えてしまう。もはや奈々を攻めるどころではない。

「あぁん……朱美ちゃん、すっごく可愛い……っ」

指先だけで普段は強気の従姉の体を自由に騷ることに成功した奈々は、うっとりとした声で言った。

そして、首筋や胸元、乳首をちゅうちゅうと吸いながら、クリトリスに対する攻めを徐々に強くしていく。

「あああッ！ ひあ！ ンわあああッ！ ああああッ！」

知巳は、自分より小さな奈々の体にすがりつくようにしながら、声をあげ続けた。

(すごい……すごい……っ！ どうしよう……俺……俺、どうすればいいんだよおっ！)

男の時と違って、身の内に湧いてくる快感を制御することができない。そんな、焦りを伴った感覚に、知巳はいいように翻弄されていた。

そもそも、どうすればイけるのか、どういうことがイったことになるのか

射精というはっきりとした現象を伴わない女性の体をもたらす底知れぬ快樂に、知巳は、はっきりと恐怖を抱いていた。

そんな知巳の、すっかりほころんだクレヴァスに、さっきまでクリトリスを愛撫していた奈々の指先が、ずるん、と一気に侵入する。

(犯される……！)

そう思った瞬間に、知巳の意識を縛っていたいくつもの枷が、次々と砕け散った。

(あ、イク……俺、朱美の体で……イク……ッ！)

ぴゅううううっ、とまるで小水のように潮を吹き、奈々の手をびっしょりと濡らしながら、知巳はびくびくと体を震わせていた。

「あ、ああ……あッ……あああ……ッ！」

高く声をあげたいのだが、発声どころか呼吸すらままならない。

そんな知巳の意識を、快樂の大波がさらっていく。

「あ……ンあああ……はあ……ああ……ン……」

知巳は、ひどく満足げな声をあげながら、温かな快樂の海の底へと沈んでいった。

そして知巳は、再び、淫夢の中にあっただ。

四つん這いになった全裸の少女のお尻を後ろから抱え、じっとりと濡れたその秘部に、ペニスの先端を押し当てている。

ペニスがある、というだけで、奇妙な安心感があった。そんな自分に、思わず苦笑いをしてしまう。

そんな笑みを浮かべたまま、ぴしゃりと、目の前のお尻を叩く。

その白かったヒップは無残にも赤く染まり、これまで激しいスパンキングを受けていたことを物語っている。

ほら、おねだりはどうしたの？

そんな言葉で、自分が少女を騎っている。

知巳ちゃん、もう、許して……。

そう言って、少女が、涙を一杯に溜めた目で、こちらを向いた。

(奈々……)

少女は、奈々だった。

その両手首は革製の手錠で戒められ、乳首には銀色のピアスが光っている。

そんな格好で、おどおどとした流し目をこちらによこす奈々に、ぞくぞくとサディスティックな欲望が高まっていく。

ふいっ……。

笑みを浮かべながら、固く勃起したペニスの先端でクレヴァスの入り口をまさぐる。すでに蜜を溢れさせているその部分からは、新たなしずくがしたたり、ぼたぼたと床に落ちていった。

あんあんっ……ダメ……な、奈々、もうガマンできないよオ……っ！

だったらきちんとお願いしなよ。いつまでも甘えんぼじゃダメだよ。

ひ、ひどいよオ、知巳ちゃん……。

恨みっぽくそう言う奈々のお尻を、またもやびしゃりと叩く。

ンあああ……っ。

奈々のあげる声は、しかし、悲鳴よりも嬌声に近かった。

奈々は変態だから、叩かれて感じちゃってるんだよね？

ぴしゃっ、ぴしゃっ、とスパンキングを続けながら、言葉によっても鬨る。

苦痛ではなく快感で、自分は奈々を追い詰めているのだ。

その証拠に、奈々の無毛のクレヴァスからは、まるで失禁してしまったかのようにとめどなく愛液が溢れている。

ほら、早く言わないと、オレもやる気なくしちゃうよ？

そう言いながら、言葉に反して熱くたぎったペニスを、ずっと奈々のその部分から離れた。

まるで、奈々の浅ましさをしめすように、亀頭部に絡んだ愛液が糸をひき、二人の陰部をつなぐ。

ああ、いやぁん！

慌ててペニスを追いかける奈々のヒップを、がっしりと両手で固定する。

ほら、お・ね・だ・り・は？

そして、その小さな背中に覆い被さるようにして、奈々の耳元に囁く。

ああ……お願い……奈々に、入れてえ……っ。

半泣きになりながら、奈々が、恥ずかしい要求を口にする。

何を、どこに入れるの？

オ、オチンチンっ……知巳ちゃんのおチンチンを、奈々のオマンコにいれてください……っ！

分かったよ、奈々……。

そう言って、焦らしに焦らした奈々の膈内にずぶずぶとペニスを挿入していく。

ンああああッ！ あ、熱いいッ！

奈々が、高い声をあげながら、背中を弓なりに反らす。

そんな奈々の靡肉が、きゅるきゅるとシャフトに絡みついてきた。

まだ狭い膣内に、ペニスを根元まで埋め込み、中の感触をじっくりと味わう。

どんな感じ？ 奈々。

あア……。と、知巳ちゃぁん……。

言わないと、抜いちゃうよ？

そう言いながら、ずりずりとペニスを引き抜いていく。

ああん！ いやア！ 言う、言うからっ！

きゅっ、と膣肉を締めつけ、ペニスを逃すまいとしながら、奈々が慌てた声をあげる。

どうなの？

お、おっきくて……あつくて……すごく、感じちゃう……あぁっ、朱美ちゃん、ごめんなさいっ！

朱美に謝ることなんてないよ。あいつも、こうなることを望んでたはずだから。

え？

不思議そうな声をあげる奈々のそこに、ぐん、とペニスを突き込む。

ひあああああッ！

ほら……こうすると、もっと気持ちいいでしょ？

反り返ったペニスで抽送を繰り返しながら訊くと、奈々は、ごくごく肯いた。

そんな奈々のお尻を優しく撫でながら、ぐっ、ぐっ、と抽送を続ける。

ああん……と、知巳ちゃん……知巳ちゃぁん……。

ちらちらと後ろに視線をよこしては、湧き起こる快感に顔を突っ伏す、ということを繰り返しながら、奈々が甘い声をあげる。

そんな奈々の背中に再び覆い被さり、豊かな胸に手を回す。

たっぷりとした量感の乳房を両手で揉むと、ころころと掌で乳首とピアスが転がった。

ンあああっ！ そ、それ、それキモチイっ！

固くしこった乳首をピアスで痛いほどに刺激され、奈々が悲鳴のような高い声をあげた。

そんな奈々の胸元で手を重ね、ぐっ、と上半身を抱え起こす。

あっ？ ンあああっ！

膝立ちの状態で後ろから犯される体位になり、奈々がとまどったような声をあげる。

かまわず、亀頭の裏側で膣の前壁をぐりぐりと刺激すると、奈々の表情がさらに一転した。

そ、そこは……あ……ンあああああッ！

目許を赤く染め、イヤイヤと頭を振りながら、切羽詰った声をあげる。

ほら、ここ……何て言うんだっけ？

突き上げるような抽送の煽りで、ぷるぷるとゆれる双乳を目でも楽しみながら、そんなことを訊く。

え、えっと……ンあああッ！ じ、Gすぽっと……あ、んンッ！ ンうううっ！

正解

ちゅうっ、とうなじにキスをしてからますます激しく腰を使う。

あッ！ ダメえ！ お、おもらししちゃうッ！

そう言われても、腰の動きは止まらない。

してみなよ、奈々……。すごく気持ちイイよ……。

耳元でそう誘惑するように囁くと、奈々の小さな体が、ぷるぷるぷるっ、と震えた。

ダ……メえ……っ！

そして、ぷしゃあああっ……と激しく潮を吹いてしまう。

そんな奈々を後ろから抱きすくめ、ラストスパートに入った。

あ、イヤあ！ お、おもらし止まんないよおっ！

無毛のその部分からびゅるびゅると透明な体液を迸らせながら、奈々はびくびくと体を痙攣させる。

イ、イクっ！ イクう！ イっちゃうよーっ！

きゅううっ、とひときわ強く、奈々のそこがペニスを締めつける。

その力にどうにか逆らって、ずるっ、と愛液にまみれたペニスを引き抜く。

ンわああッ！

その衝撃で、奈々は、がっくりと倒れてしまった。

その奈々の体めがけ、ペニスが、びゅるびゅると大量のスペルマを放つ。

ンあああっ……あ……ひああん……。

熱い進りを全身に感じながら、未だ絶頂の中にある奈々は、ひくん、ヒクン、と体を痙攣させた。

そして、その股間から、ちよろちよろと本物の小水を漏らしてしまう。

知巳は、そんな奈々を、ぼんやりと眺めていた。

がばっ、と知巳はベッドから半身を起こした。

床に、奈々が全身を白濁液にまみれさせた姿で横たわっている。

そしてその傍らに、ワイシャツをまとったままで下半身剥き出しの自分の体が、膝立ちで立っていた。

「はあ……はあ……はあ……あ、起きた？」

にっ、と背筋が寒くなるような笑みを浮かべ、自分の顔が笑みを浮かべる。

朱美の、笑みだ。

「お、お前はッ！」

知巳は、全裸のまま、朱美に踊りかかっていた。

朱美が、すっと身をかわず。

が、やはり、葛城流に関する蓄積に付いては、知己のほうが上だった。不慣れな妹の体を操りながらも、朱美の予想をはるかに越える速度で、右手を伸ばす。

「！」

鉤状に曲げられた指先が襟首を捉え、強引に引き寄せせる動きに連続して、右の肘を頬に叩きこむ。

相手が着衣の状態を想定した、強制的なカウンター技 葛城流で“孤月”と言われる肘打ちだ。

口の端から血を流しながら、朱美が倒れる。

「な、何すんだよ……歯が折れるよぉ」

「黙れ、この……」

怒りの余り、まともに口もきけない、といった状態で、知己が朱美につかみかかろうとする。

「やめてえ！」

そんな知己の腰に、いつのまにか起きていた奈々が抱きついた。

「やめて朱美ちゃん！ 二人とも、ケンカなんかしないでえ！」

「で、でも……」

奈々と、そして目を丸くしている朱美を交互に見ながら、知己が言いかける。

「知己ちゃんは悪くない！ 悪くないのっ！ ずっと、知己ちゃんを仲間はずれにして…
…あたしたちのほうがいけなかったんだよっ！」

ぼろぼろと涙をこぼしながら、奈々が、強い声で訴える。

「なのに……やだよ……二人がケンカするなんて……そんなの、やだよっ！」

朱美は、茫然とした顔で、そんな奈々の顔を見つめていた。

知己が、がっくりと肩を落とす。

そして奈々は、緊張の糸が切れたのが、まるで小さな子供のようにわあわあと声をあげて泣き出した。

いつまでも泣き止まない奈々をどうにかなだめすかして家に帰らせた頃には、すでに日が傾いていた。

奈々を送り出した玄関口で、じろりと、知己が朱美をにらむ。

「……」

朱美は、決まり悪げな顔で、目を伏せている。

「どういづつもりなんだよ、朱美……」

険のある口調で、知己が言った。

「どういづって……」

「奈々のことだよ」

「それは……ごめん……兄貴を、悪者にしちゃったね……」

「そんなこと言ってんじゃねえよ」

ぐっ、と拳を握りながら、知巳が言う。が、ケンカはしないとさっき奈々に指切りまでさせられた身なので、手を出すようなまねはしない。

「俺がどうこうより、奈々が傷つくだろ。そういうこと、考えなかったのかよ」

「か……考えたよ」

「じゃあ、なんで、そんなことを……」

「憎かったから」

ぼそっ、とつぶやいた朱美の予想外の言葉に、知巳は思わず絶句していた。

「憎かった……お兄ちゃんに、いっぱい可愛がられて、なのに、お兄ちゃんの気持ちを傷つけて……そんな奈々が憎かった……可愛かったけど、憎かったの……」

知巳は、朱美の言葉が理解しきれない様子で、ぼんやりと立ち尽くしていた。

衝撃のあまり、いつもの“兄貴”が“お兄ちゃん”になっていることにさえ、気付いていない。

「ボク……お兄ちゃんが……好きだったから……」

そしてとうとう朱美は、顔を覆って泣き出してしまった。

ZEON PDF Drive
www.zeon.com.tw

第五章

その朝、真っ青な顔をしてトイレから出てきた知己を、朱美は気の毒そうな顔で出迎えた。

「始まっちゃったんだ」

「……」

「そろそろだなー、とは思ってたんだけど」

「……」

「えっと、ボク、けっこう軽い方なんだけどね」

「……」

「だいじょうぶ？」

朱美に何を言われても、知己は、まさに初潮を迎えたばかりの少女のような顔をするばかりだ。もともと、男というものは女ほど血に慣れているわけではない。

「薬服んで寝てたら？」

「そうする……」

知己は、ふらふらと廊下を歩いて、朱美の部屋に入ってしまった。

「生理痛で休みかあ。“葛城朱美”もかわいいところあんなあ」

と、朱美の部屋のドアを開け、知己が頭を出す。

「ど、どうしたの？ ナプキンの使い方分からない？」

「ちがう……。いや、それもあるけど」

眉を寄せながら、知己が弱々しい声で言う。

「じゃ、なに？」

「奈々に、あやまっとけよ」

「うん」

「あと、ナプキンの方は自分で何とかする。どうにもならなかったら呼ぶから」

そんなにあしたのめんどもないのになあ、と思いながら、朱美は意地の悪い笑みを浮かべた。

「ボク、これから学校だよ」

「あ、そりゃそうだな」

「ダメだったら、母さんに頼んだら？」

「バカ言うな」

そう言って、知己はドアを閉めた。

(あやまっつけ、って言われてもなあ……)

教室の窓の外、春の太陽に照らされて輝くような若葉を見つめながら、朱美はぼんやりと思った。

朱美が、長年抱いていた知己への想いを告白してから、まだ三日。その間、二人とも、そのことについては意識して話題にしていない。

朱美は、自分でも驚くほど、すっきりとした気分だった。

兄妹の間の、許されるはずのない恋愛感情。だが、もはや二人は、世間のありふれた規範や倫理とはまったく別の次元で、深く繋がりにあるのだ。朱美は、そのことに気付いていた。

(今は、ボクの気持ちよりも……奈々の方が、心配かも……)

朱美の奈々に対する思いは複雑だが、愛しいと思う気持ちは確かにある。

奈々を傷つけたままでいていいわけではない、と思う。しかし、何と云っていいものか。

(ボクだけじゃなくて、お兄ちゃんと一緒にいった方がいいかもな)

それに、奈々が通う学校は、朱美や知己が通う青凜館高校から三駅ほど離れている。例えば、放課後などに気楽に会いに行けるような距離ではない。

(ま、今度の週末にでも、会いに行こうかな……)

それにしても、何と云って謝ったものか。

(いっそ、全部しゃべっちゃおうかなあ……。そうすれば、ボクと、奈々と、それからお兄ちゃんまで……。一緒に……。できるかもしれないし……)

神聖な学び舎で思い浮かべるにはあまりに淫らな想像を働かせたとき、股間のものが、唐突に自己主張を始めた。

(え？ うわ、なに？ こ、こんなトコで？)

今は自分の体の一部となったその“不肖の息子”のあまりに性急かつ正直な反応に、朱美は目を見開いていた。

「なに百面相してるの、葛城君」

ちょうど英語のリーダーの教科書を読ませる生徒を物色していた教師が、呆れたような声で注意をする。

「ちょうどいいわ。32ページの最初から、読んで」

「は、はい……」

顔を赤く染めながら、朱美は、妙に前かがみな姿勢で立ちあがった。

一方、知己は、天井をぼんやりと眺めながら考え事をしていた。

鎮痛剤を飲んで横になっていたなら、痛みの方は治まった。精神的なショックも今は感じ

ていない。

ただ、なんとなく、もとの自分には備わっていなかった内臓の存在を意識してしまう。

(女って.....タイヘンだなあ.....)

月並みといえば余りに月並みなことを思いながら、ふと、毛布の中の自分の胸を、触ってみる。

妹の、朱美の体

(あ.....)

体に、ぞわっ、と妙な感覚が走る。

パジャマに包まれた、柔らかな乳房の感触。それを指で押すと、甘い電流のような刺激が全身に広がるのだ。

(どうしちゃったんだ、俺.....?)

奈々の手で女の性感を教えられたためか、朱美の告白を聞いたからか、生理中だからなのか

知巳は、かつてないほどに、今の自分の体に“女”を感じていた。

手で触れてもいないのに、下腹部のあたりが、じわん、じわん、とかすかに疼いているように感じられる。

体の奥の方をとろ火であぶられているような感覚だ。

(こういうとき)

知巳は、毛布をかぶりなおし、ぎゅっと目を閉じながら、考えた。

(朱美は、自分で、してたのかな.....?)

そのイメージにますます体を疼かせながらも、知巳は、どうしても自分の体を弄び、快楽を紡ぎ出そうとはしなかった。

まるで潔癖な乙女のように、自らの性欲から目をそらし、脚をきつく閉じ合わせる。

それが、何もかも押し流してしまうようなあの快感に対する恐怖ゆえであることに、知巳は、まだ気付いていなかった。

「やめどくよ」

その週の金曜日の夜、朱美の誘いを知巳はそう言って断った。

四月の終わり。明日からはゴールデンウィークだ。天気予報によれば、この地方の天気はまずまずらしい。

そして朱美は、奈々に謝るついでに、みんなで一緒にどこかに遊びに行こう、と誘ったのだが、それを知巳は断ったのである。

「どうして？」

「何て言うか.....そんな気になれない」

「アレは、終わったんでしょ？」

朱美のあけすけな問いに、知巳は頬を染めてしまう。

「なに、ンな可愛い顔してんのよ」

朱美が、苦笑いしながら言った。

「と、とにかく、俺はやめとくよ」

「そっか。残念」

寂しそうにそう言ってから、朱美は、ベッドの上で相変わらずあぐらをかいている知巳の顔を、ちら、と上目遣いで見つめた。

「お兄ちゃん、もしかして……」

「な、なんだよ」

知巳は、やや身構えながら返事をした。“お兄ちゃん”と呼ばれるたびに、こそばゆいような感覚を覚えるらしく、もぞもぞと体を動かしている。

「もしかして、奈々のこと、恐がってる？」

「こ、恐がってるって言うか……何て言うか……」

ごにょごにょとそう言う知巳の態度が、朱美の言葉が少なからず凶星を突いていることを示している。

朱美は、くすくす笑いながら、クッションの上から立ちあがった。

「いつか母さんの言ったこと、分かるなあ。お兄ちゃん、可愛い」

「あ、兄貴をからかうな！」

「んふいふっ」

笑いながら朱美は、部屋から出ていく。

知巳は、ますます赤くなる顔に、慥然とした表情を浮かべていた。

朱美と奈々が待ち合わせる、駅前の広場。

目印の時計の下でぼんやりと奈々を待っている朱美を、知巳は、通りを隔てた街路樹の物陰から見ていた。無論、朱美には内緒である。

「俺、何やってるんだか……」

そう独り言を言って、ふー、とため息をつきながら天を仰いだ。

春の空の色は、他のどの季節とも異なり、暖かく、柔らかで、そしてのどかだった。

「あの、葛城さん？」

聞き覚えのある声で後ろから声をかけられて、知巳は振り返った。

「あ、彩乃、先輩……」

そこに立っていたのは、彩乃だった。すらりとしたプロポーションに、ロングタイトのスカートと春らしいライトグリーンのカーディガンという格好だ。

「葛城 朱美さんよね？ 知巳くんの妹さんの」

「そ、そうです」

「偶然ね。一人なの？」

「はい」

知巳は、ひどく答えにくそうに答えた。こんな状態になってから、彩乃とはまともに話したことはない。

「えっと、知巳くんのことなんだけど、ちょっとお話、いいかな？」

「は……はい」

「あのね」

言いかけてから、彩乃は周囲を見回して、近くに人通りがないことを確かめた。どうやら、駅前の広場にいる朱美には気付いていないらしい。

「最近、知巳くん……怒ってる？」

「おこってる、って……？」

眉を曇らせながら言った彩乃に、知巳は思わず訊き返してしまう。

「あのね、あたし……知巳くんを怒らせるようなこと、しちゃったから」

「どういうことですか？」

「そのう……あたしの、前の彼がね、あたしと知巳くんが一緒にいるとき、現れたの」

「……」

知巳は、朱美からあの夜の話、まだ聞いていない。

動悸が早くなるのを感じながら、知巳は、彩乃の次の言葉を待った。

「その人とは、あたし……けっこう、乱れた関係だったんだ。そのこと、知巳くんは聞いて……あたしのこと、怒ったか、呆れたか、したんだと思うの」

「そ、そんなこと……！」

知巳は、あやうく大声をあげそうになり、どうにかそれを自制した。

「えっと……あ、兄貴は、そんなんじゃないですよ。たとえ、先輩にどんな過去があっても、そんなコトで、先輩を嫌いになったりは……」

「うん。あたしも、知巳くんを信じたい……。でも、知巳くん、最近あたしを避けてるみたいで……」

「そ、それは……」

妹と精神が入れ替わったからです、とはこの場では言えず、知巳は絶句してしまう。

「今日も、本当は、ずっと前から約束してたの。一緒に映画観ようって……。でも、先週その話をしたときは、知巳くん、すっかり忘れちゃってたみたいで……それに、急に都合が悪くなって、行けなくなったって……」

(憶えてますよ！)

知巳は、心の中で叫び声をあげていた。

(きちんと憶えてたし、すっごく楽しみにしてました！ でも……でも俺……っ！)

「まあ、確かに、ずっと黙ってたあたしが悪いと思うんだけど……」

そう言いながら、徐々にうつむく彩乃の目が、涙で潤んでいる。

知巳は、身の内で高まる衝動に抗しきれず、両手で彩乃の肩をつかんでいた。

「え？ な、何？」

さすがに驚いた彩乃が、眼鏡の奥の目を丸くする。

「だ、だいじょぶですよ！ あ、兄貴は……先輩にベタボシなんですから！」

このまま抱き締めたい気持ちをぐっところえて、知巳は、必死にそう言った。

「ありがとう、朱美さん……」

彩乃が、泣き笑いのような表情を浮かべながらそう言ったとき

「知巳ちゃん！」

駅前広場から、元気のいい奈々の声が、かすかに聞こえた。

「……！」

彩乃が、息を飲み、その体を硬直させる。

しかし、次の瞬間には、知巳の手を振り解き、広場に向かって走っていた。

知巳は、あまりのことに、茫然と立ち尽くしてる。

そして、はっと気付いた知巳が走り出そうとしたときには、横断歩道の信号が赤に変わっていた。

「知巳くんッ！」

よく通る彩乃の声に、朱美ははっとして振り返った。

「い、和泉先輩……」

「そ、そのコは……どういう、ことなの……？」

いかにも、これからデート、といった感じの、可愛い赤のワンピースでおめかしをしてきた奈々に視線を移してから、彩乃が震える声で言う。

「それは、その……このコは……従妹で……」

しどろもどろになりながら、朱美が答える。そんな様子を、奈々は、驚いた小動物のような目で見つめていた。

ようやく呼吸を整えた彩乃が、視線を落とし、一つ、息をつく。

「ご……ごめんね、知巳くん……大声出しちゃって」

そして、全てを諦めたような笑みを浮かべて、そう言った。

「そう、だよな……あたし、気が付かなかった……ううん。気が付いてたけど、気付かないフリしてたみたい」

「そ、その……先輩、それって、誤解……」

「知巳くん、無理してる。……あたし、分かるよ」

「え……？」

「だって……さっきから、全然“彩乃”って呼んでくれてないじゃない……」

声が震えるのを必死に抑えようとしているような口調で、彩乃が言う。

「えと……それは……」

「ごめんね、ジャマしちゃって……さよなら……」

何を言っているかわからない様子の朱美と、事態を把握しきれない奈々を後にして、彩乃が、小走りに立ち去りかける。

と、きゅわわっ！ という自動車の激しいブレーキ音が、いくつも響いた。

「彩乃センパイっ！」

何台もの車に急ブレーキをかけさせながら、赤信号の駅前通りを突っ切ってきた知巳が、叫ぶように言った。

「え……？」

「俺は、ここです！ 俺、こっちにいるんです！」

背中にドライバーたちの罵声を浴びながら、彩乃のもとに駆け寄った知巳が、そんなことを叫ぶ。

「お……お兄ちゃん……」

「……あ、朱美……はっ……話す……話そう……奈々と……彩乃、センパイに……」

ぜはっ、ぜはっ、とせわしく肩で息をしながら、知巳は、ようやくそれだけ言った。

そして四人は、朱美と奈々の秘密の部屋にいた。

情報屋、萌木緑郎の隠れ家である。

そこは、郊外の雑木林に隣接する、荒れた一軒家の地下だった。まるで廃屋のような地上の外観とは異なり、地下室は綺麗に掃除されており、水道や電気も通っている。

十畳ほどのその部屋は、コンクリートが剥き出しで、いかにも殺風景だったが、エアコンやミニキッチンが備えられていて、外見よりははるかに居住性はよさそうだ。その上、この部屋の隣にはトイレやユニットバスまである。

天窗から春の日の光が入っていて、室内は地下であるにもかかわらず、さして暗くない。

ここで、知巳と朱美は、長い時間をかけて、全てを語り終えたのだった。

「……」

「……」

「……」

「……」

四人は、それぞれの表情で、しばし、口を閉ざしている。

真っ赤に染まった、知巳の顔。きゅっと口元を引き締めた、朱美の顔。ぼかん、とした奈々のあどけない顔。そして、知巳と朱美を交互に見比べている、彩乃の顔。

「そう……なんだ……」

彩乃は、その、花びらを思わせる唇を開いて、ようやくそれだけ言った。

「不思議なことね……」

「信じて、くれるんですか？」

知巳が、意外そうな口調で言う。

「それは、確かに常識はずれなことだけど 目の前に二人揃うと、納得しちゃうわね。だって、表情とか、話し方とか、確かに入れ替わってるもの」

そう言って、彩乃は、奈々の方を向いた。

「春宮さんだっけ？」

「あ、えと、奈々でいいです」

「奈々ちゃんは、どう思う？」

「それは、そのう……えーっと……」

もじもじと膝に乗せた手を動かしながら、奈々は言いよどんだ。もともと人見知りする方なので、彩乃にどういう口をきいたらいいか分からない様子である。

「あたし、頭わるいから、わかんないです……そうなんだー、ってビックリしただけで…」

小さな体を縮こませながら、奈々が言う。

と、そんな奈々のお腹が、くー、と可愛く鳴った。

「奈々、お腹空いてるんだ」

朱美が、苦笑交じりに言う。

「ごめんなさい……」

「謝らなくてもいいってば。もうお昼過ぎだもんね。コンビニまでひとつ走り行って、何か買ってくるよ」

そう言いながら、朱美は、すっくと一動作で立ちあがった。

「お兄ちゃん、一緒に行こ」

「あ、ああ」

人前でも“お兄ちゃん”で通すことにしたらしい朱美に、知巳は、曖昧に肯いた。

例の地下室から、一番近いコンビニまで、往復で三十分はかかる。

そんな道のりの帰りを、知巳と朱美は、並んで歩いていた。

「大丈夫かなあ……」

「何が？」

いくつものおにぎりやサンドイッチの入った袋を手にした知巳に、大きなペットボトルを持った朱美が訊く。

「いや、だから、彩乃先輩と奈々がさ……」

「ケンカなんか、しないと思うけど」

「そりゃそうだろうけど……なんだか、二人がどんな話するのか、想像つかなくてさ。奈々、ああいう性格だろ」

「お兄ちゃんって、けっこう心配性だね～」

「お前がガサツなんだろ」

「ふーんだ。優しい、って言ってあげた方がよかった？」

「兄貴をからかうなって」

そんなことを言いながら部屋に戻ると、彩乃と奈々は、意外なほど打ち解けた雰囲気では何か話していた。

奈々が、甘えるような表情でしゃべるのを、彩乃が優しい微笑を浮かべながら聞く。そんな構図だ。

「朱美ちゃん！ 知巳ちゃんも！」

奈々が、帰ってきた二人に声をかける。

「二人は、一番好きな宮崎アニメ、何？」

「……『天空の城ラピュタ』」

「えっと やっぱ『ナウシカ』かな？」

知巳と朱美が、反射的に答えてしまう。

「ほら、人によって、全然違うんですね」

「そうね。多分、ああ見えてもターゲットを絞って作ってるからかな？」

「ずっとアニメの話してたのか？」

知巳が、ちょっとほっとしたような顔で訊く。

「それだけじゃないよオ。知巳ちゃんや朱美ちゃんの、ちっちゃい頃の話とか」

「そ、それは、どんな話だ？」

「ひみつー」

そう言ってから奈々は彩乃と向かい合い、そして二人は意味ありげに微笑んで見せた。

「あ、それからね、知巳くん……。奈々ちゃんと、二人で話したんだけど」

と、今度は彩乃が、知巳の方を向く。

「は、はい」

「知巳くんと、朱美さんが元に戻る方法」

「えー！」

双子は、ほとんど同時に声をあげた。

「あ、その、絶対確実ってわけじゃないんだけど」

彩乃は、その綺麗な手を振って、詰め寄る知巳と朱美を制した。

「ただ、試してみる価値はあるかなあ……って思ったの」

「ど、どんな、方法なんですか……？」

そう訊く知巳に、彩乃は、妙に艶っぽい表情を見せた。

「とりあえず、お食事してから、ね」

背もたれのない、革張りの大きなソファー。

知巳と朱美は、そこに、背中合わせになって座った。

二人とも、身につけたものを全て脱いでいる。

素肌に、革が貼りつくような感触が、あまり気持ちよくはなかったが、すぐに気にならなくなった。

「もっと、背中くっつけた方がいいと思う」

彩乃は、右手の指をあごの当て、右の肘に左手を当てたポーズで、そんなことを言った。

「で、でも……」

「お互いが、どんな風だか、肌で感じた方がいいでしょ」

「でも……」

「奈々ちゃん、手錠か何か、ある？」

さらに何か言いかける知巳を無視して、彩乃はそんなことを言った。

「て、手錠って……」

「ありますよお。金属のと、革のが」

「痕が残ると可哀想だから、革のがいいかな。二つあるといいんだけど」

「ありまあす」

にこにこ微笑みながら、奈々が、クローゼットから二つの拘束具を取り出した。

「これで朱美ちゃん、奈々の手首と足首、つないじったりするんですよ」

「ちょ、ちょっとお！」

あけすけにプレイ内容をしゃべる奈々に、今度は朱美が声をあげる。

「どしたの？ 朱美ちゃん」

「うー」

いつもと様子の違う朱美の口調に、奈々が不思議そうに訊く。どうやら奈々は、この場の雰囲気真っ先に順応してしまったようだ。

と、奈々から手錠を受け取った彩乃が、それを手早く二人の手首にはめた。

まずは、知巳の右手首と、朱美の左手首だ。

「あ……や、やだ……」

朱美がそんな抗議の声をあげるのに構わず、彩乃は反対側に回り込んだ。

「和泉先輩、やっぱり、ここまでしなくても……」

「だーめ。ほら、奈々ちゃん、こっち押さえてて」

「はあい」

そして彩乃は、奈々が押さえた朱美の右手首と知巳の左手首を、もう一つの手錠で繋い

だ。

「あ……」

朱美は、不安げな声をあげながら、見をよじり、首を巡らせる。

「お、おい、あんま動くなよ、倒れる！」

「あ……ごめん」

知巳の抗議に、朱美が小さな声で謝る。その頬はうっすらと上気し、見ようによっては、これから始まるであろう淫靡な実験を期待しているかのようでもあった。

「んふ、朱美ちゃん、普段は奈々を縛るのに、自分がこーそくされちゃうと不安なんだア」

奈々が、くすくすと笑いながら言うと、朱美の頬がさらにかあっと染まった。

「あんまりいじめちゃダメよ、奈々ちゃん」

たしなめるようにそう言ってから、彩乃は、知巳の前に立った。

「これから、二人にはうんと感じてもらうんだから」

「そ……それで、ホントにもとに戻りますかね？」

知巳が、彩乃の顔を見上げながら言う。

「二人とも、イっちゃった拍子に入れ替わっちゃったんだもん。もう一回同じコトするくらいしか、方法は無いと思うけど？」

彩乃は、そう言いながら、するすると着ている服を脱ぎだした。それを見て、奈々も同じように裸になる。

「だから、知巳くん……朱美ちゃんに、うんとシンクロしてみて……」

「でも……」

まだ何か言いかける知巳の口をふさぐように、彩乃は、唇を重ねた。

柔らかな唇同士がぴったりと重なり合う。

「ね、朱美ちゃん……あたしたちも……」

「う、うん……」

そう返事をする朱美に、奈々もちゅっ、とキスをする。

そして、四人は、互いに互いの唇を舌でまさぐりながら、唾液を交換し合った。

ちゅび、ちゅび、ちゅび、という淫らな音が、響く。

すぐそばのカップルに刺激されるように、四人は、熱心に舌を動かし、舌と舌とを絡ませあった。

と、彩乃の手が、知巳の体をまさぐった。

もとは、朱美のものであった、すらりとした曲線で構成された少女らしい体。

その、けて大きくはないが形のいい乳房を、ふにっ、と優しく手に包む。

「んう……」

ひくん、と跳ねる知巳の背中動きが、朱美の背中に伝わった。

朱美の股間で、もとは知巳のものであったペニスが、次第に力を漲らせている。

「んむ……ん……ぶは……朱美ちゃん、オチンチン、おっきくなってきたよ」

奈々が、朱美の耳元でそう囁いた。

「さわってほしい？」

「う、うん……」

朱美がこっくりと肯くと、奈々は、二人の肩越しに彩乃のほうを見た。

「彩乃さん、どうしたらいいかな？」

「うーんと……じゃあ、優しく撫でてあげて」

はぁはぁと喘ぐ知巳のうなじに唇を這わせながら、彩乃は言った。

「先からぬるぬるが出てきたら、それを全体に塗ってあげるようにするの」

「はい」

素直にそう返事をして、奈々は、ペニスの先端をその白い指でそおつと撫でた。

彩乃の言葉通り、尿道口から、先走りの汁がにじみ出て、透明な玉になる。

「あはっ」

奈々は、朱美の脚の間にしゃがみこむようにした。そうすると、天を向いたペニスが、すぐ目の前に来る。

中指の腹で、鈴口の辺りをくるくると撫でまわすと、びくびくっ、と朱美の体が震えた。

「気持ちイイ？ それとも、痛い？」

奈々が、心配半分、好奇心半分で訊いてくる。

「りょ……両方……」

敏感になったペニスの先端に、奈々の温かな息遣いを感じながら、朱美が言う。

「痛いの？」

「なんか、ひりひりする……あ、でも……だんだん、痛くなくなってきた……」

一歳下の従妹に弄ばれる、自らの股間から生えた牡器官を、どこか濡れたような眼で見ながら、朱美は小さな声で答えた。

「奈々ちゃん、お口でできる？」

今まさに知巳の乳首を舌で責めていた彩乃が、奈々に訊く。

「おくち、ですか？」

「そう。まずは、オチンチンの裏側を、舐めてあげるといいんだけど」

「わ、わかり、ました」

奈々は、まるでこれから難しい問題集を解こうとするような顔で、うんっ、と肯いてから、ペニスに顔を寄せた。

そして、独特の性臭を鼻に感じながら、ピンク色の舌を伸ばす。

てろっ、と舌がシャフトの裏筋を舐め上げたとき、朱美は再び体を震わせていた。

「んふ……」

そんな二人の様子をどこか楽しげに見つめてから、彩乃は、知巳の脚の間にその白魚のような指を伸ばした。

「ンあっ！」

朱美のおののきを背中に感じながら、知巳も、やはりひくんと体を震わせる。

「知巳くん……ここ、ぬるぬるになってる……」

そう言いながら、もとは妹のものであったクレヴァスをまさぐられ、知巳は羞恥に唇を噛んだ。

しかし、クレヴァスの方は、彩乃の愛撫を待ちわびていたかのように、さらに粘液を分泌する。

「不思議ね……知巳くんが感じてるときの顔、してる」

ふっふっ、と微笑んで、彩乃は、ひくひくと息づくクレヴァスに指を這わせ、愛液をからめとるようにした。

そして、すっかり柔らかくなった膣口の入り口を舐ってから、つい、と意地悪く指を抜いてしまう。

「あ……っ」

思わぬおあずけを食った知巳が、何か言いかける。

「どうしたの、知巳くん？」

指を濡らす透明な愛液を、知巳の乳首に塗りつけながら、彩乃が訊く。すでに勃起していた知巳の乳首はさらに固くなり、いやらしいシロップに濡れてぬらぬらと光った。

「彩乃センパイ……俺……」

いささか情けない声で、知巳はごによごによと何かを言う。

「ガマンしないでいいのよ、知巳くん……してほしいんでしょ？」

「……はい」

囁くような声で、知巳が答える。

「じゃあ、お口でしてあげるね……」

そう言って、彩乃も、知巳の脚の間にひざまずく。

そして、自らが溢れさせた粘液できらきらと濡れ光るその部分に、その美しい顔を寄せた。

「はぁ……」

どこかうっとりしたようなため息で、太ももをくすぐりながら、彩乃が、ちゅ、とクレヴァスにキスをする。

「んんんッ」

知巳は、思わず両腕で股間をかばおうとしてしまった。

が、手錠の鎖が鳴るだけで、知巳の体は自由にならない。

彩乃は、人の性器に淫らな奉仕をする悦びにその理知的な顔をピンク色に染めながら、口唇愛撫を続けた。

舌で、靡肉の間の複雑なひだを舐め上げ、膣口をえぐるようにする。

そうしてから、まだ半ば莖に隠れたクリトリスを、ちょんちょんと舌先でノックした。

「あ……センパイ……そこ……」

快楽神経の集中する肉の芽を刺激され、知巳は本当の少女のように切なげな声をあげてしまう。

「気持ちいいでしょ？」

「は、はい……」

知巳の恥ずかしげな声を聞いた彩乃は、どこか満足げに微笑んでから、クリトリスに対する愛撫を再開した。

その柔らかな唇で、ちゅっ、ちゅっ、と優しく吸い上げては、ちろちろと舌先で転がす。さらには、舌の裏側を押し当て、ぐいぐいと刺激をした。

唾液と愛液に濡れたクリトリスが、固く勃起して、まるでさらなる愛撫を求めるかのよう、ささやかな自己主張をしている。

彩乃は、それまで脚を撫でていた指先で、クリトリスの包皮をつるりと剥いた。

「ひあ……」

敏感なその部分を剥き出しにされ、知巳が悲鳴混じりの声をあげる。

彩乃は、その部分に舌を押し当て、素早く左右に動かした。

「ひゃん！」

朱美の背中に自らの背中を預けるようにして、知巳は体をのけぞらせた。

ひくん、ひくん、という痙攣が、朱美の背中に伝わる。

と、彩乃が、細い粘液の糸を引きながら、唇を離してしまった。

「ふあああ……」

恐いくらいの快感から解放され、知巳は、どこか安心したような声を漏らしてしまう。

「奈々ちゃん？ きちんとできてる？」

「ふあい……」

彩乃の問いに、奈々は、不明瞭な発音で答えた。

朱美のペニスは、すでに奈々の唾液によってべったりと濡れ、もどかしい刺激にひくひくと震えている。

「じゃあ、啜えてあげて。歯を立てちゃダメよ」

とろとろに濡れた知巳のクレヴァスを指で髷り、快楽をアイドリング状態に保ちながら、彩乃がレクチャーする。

「やって、みます」

そう言って、奈々は、そのちんまりとした口をあーんと開けた。

そして、ぱくっ、とほとんどためらいを見せず、ペニスを啜えこむ。

「ああっ……」

朱美は、思わず声を漏らしてしまう。

体の自由が利かない状態で、奈々に一方的に責められている、というシチュエーションのためか、朱美の目は、うるうると涙で潤んでいた。

「奈々ちゃん、舌、動かしてみて」

「んあい……」

律義にも声を出して返事をしてから、奈々がもごもごと口内で舌を動かす。

その舌使いはぎこちないが、視覚的なインパクトもあって、朱美は頭がかあっと熱くなるくらい興奮を覚えていた。

奈々に奉仕させる慣れ親しんだ悦びと、自らが体を動かさないことによる、未知の快樂……。

朱美にできるのは、さらなるフェラチオをうながすように、浅ましく腰を突き出すことくらいだ。

そうすると、自然と、背後の知己に背中を預けることになる。

「慣れてきたら、お口にオチンチンを出し入れしてみてね」

「ぷは……はあい……」

「うん。じゃ、知己くん、おまたせ」

そんなことを言って、彩乃は、再び知己の股間に顔を戻した。

そして、こんどはいささか強く、ちゅううっ、とクリトリスを吸引する。

「ひあああっ！」

彩乃の不意打ちに、知己はびくんと腰を跳ね上げる。

と、彩乃は、その仕打ちをわびるように、ラビア全体をてるてると舐めしゃぶった。

そして、そんな優しい愛撫でくったりと力が抜けたところを狙って、ほころんだ肉の花びらを甘く噛む。

「あ……んうっ！」

巧みに強弱をつけられた彩乃の愛撫に、知己は、他愛もなく翻弄されていた。

そんな知己の膣口に、彩乃が、つぶっ、と指を差し入れる。

「んアっ……」

彩乃の指は、柔らかな締め付けを受けながらも、ぬるりと膣内に飲みこまれた。

「あ、ああっ、あっ……！」

彩乃の細く長い指で膣内をまさぐられ、知己が、切羽詰った声をあげた。

ちゅぶっ、ちゅぶっ、ちゅぶっ、ちゅぶっ、と淫らな音を立てる膣口からは、白く濁った愛液が溢れ、会陰を伝ってソファを汚している。

彩乃は、ますます激しく指を動かしながら、知己のクリトリスに口を寄せた。

と、そこで動きを止め、彩乃が顔を起こす。

「朱美さん」

「え……あ、はい……？」

彩乃に声をかけられて、朱美は、困惑したような声をあげた。

「イけそう？」

「え……えっと……まだ、です……」

そう言われて、奈々は、傷ついたような顔で、ペニスを口から離れた。

「やっぱり、奈々、ヘタ……？」

「あ、ごめん、奈々。ボク、そういうつもりで言ったんじゃないんだけど……」

「ごめんなさい……ごめんなさい……奈々、うまくできなくて……」

目に涙を溜めながら、奈々が謝る。

「はじめてなんだもん、しかたないわよ」

彩乃は優しくそう言って、ぬるん、と指を知巳の膣内から引き抜いた。

「それじゃあ、交代、してみよっか？」

「こうたい……」

「そう。その方が、奈々ちゃんもやり方とか分かってるでしょ」

「うん……」

こっくりと、奈々が肯く。

知巳と朱美は、そんな会話を、どこかぼんやりとした顔で聞いていた。

知巳の前に奈々が、朱美の前に彩乃が、立つ。

奈々は、その手に、部屋の中に隠していた双頭ディルドーを持っていた。

「　　！」

はっ、と知巳が目を見開く。

「ま、まままさか、ソレって……」

焦る知巳に、奈々はくすっと微笑んだ。

「ダイジョブだよ、知巳ちゃん」

「そ、そんな、だって……」

「奈々と朱美ちゃん、よく、これで遊んでるもん」

そう言いながら、奈々は、ディルドーを両手で持って、その片方をべろべろと舐め始めた。

そして、にこにこ微笑みながら、閉じかけた知巳の脚を割り開く。

「んー」

ちゅっ、と奈々は、すでに蜜を溢れさせているクレヴァスに、口付けした。

「あ……」

初恋の相手だった従妹のそのあまりに淫らな行為を目にして、知巳の脚から、力が抜けてしまう。

「だいじょうぶ……知巳ちゃん……そんなにキンチョーしないで……」

そう言いながら、奈々は、ディルドーの先端を膣口にあてがった。

ぞわわっ、と知巳の全身の産毛が逆立つ。

が、すでに充分過ぎるほどに濡れていたその部分は、亀頭に模して作られたディルドーのふくらんだ部分を、ぬるっ、とわりとあっけなく飲みこんでしまった。

「うわ……あ」

自分の体の中に異物が侵入している、という感覚に、知巳は、ひどく弱気な声をあげて

しまっていた。

「ゴメンね、知巳ちゃん……痛くは、ないはずだから……」

そう言いながら、奈々は、ディルドーを持った手に力をこめる。

「ひ……ンあ……か……はっ……」

ずる、ずる、ずる、ずるっ、と、シリコン製の淫具が体の内部をこする感覚に、知巳は、声も出ない。

と、奈々が、ディルドーを飲みこんだクレヴァスを、れろん、と舐めあげた。

「はひっ！」

甘い刺激に、知巳が声をあげる。

奈々は、目を閉じ、どこか神妙な顔つきで、ちゅばちゅばと靡肉を舐めしゃぶった。

そうしながら、ディルドーを、小刻みにくにくにと動かす。

その姿は、まるで、ペニスをしごきながらその根元に奉仕をしているようにも見えた。

知巳の内部で、おぞましい異物感が、次第にひりつくような快樂に変わっていく。

「ンあ……あぁ……はう……あぁあっ……」

その膣口からはさらなる愛液が溢れる。

奈々は、その淫らな粘液を、ディルドーのもう片方に指で伸ばしていった。

朱美が、そんな二人の様子を、首をねじって見つめている。

「朱美さん」

呼ばれて、朱美ははっと向き直った。

意外なほど近くに、彩乃の綺麗な顔がある。

今まで、少なからぬ嫉妬の思いを込めて見ていたその顔は、妖しく淫らな微笑をたたえていた。

「興奮してるの？ 自分の体が、奴隷ちゃんに舐られてるのを見て……」

「そ、そんな……」

眼鏡の奥の黒目がちの瞳に浮かぶ妖しい光に魅入られそうになりながら、朱美は、声を詰まらせる。

「すごく可愛い顔してたわよ……」

「……」

と、彩乃は、朱美の肩越しに、知巳の耳に口を寄せた。

「ごめんね、知巳くん」

「え……？」

知巳は、膣内から湧きあがる快樂に霞んだ頭で、ぼんやりと答えた。

「あたし、これから浮気しちゃう……」

そう言ってから、彩乃は、朱美の脚の間にひざまずいた。

そして、その鮮やかな色の唇を、赤黒いペニスに寄せる。

「ンあっ！」

ちゅうっ、とやや強い力で亀頭部を吸われ、朱美は、体をのけぞらせた。

かまわず彩乃は、唇をぴったりと締めながら、ペニスを口内に収めていく。

「んああ……あ……あ、あああ……」

奈々のぎこちないフェラチオとは比べ物にならないような快楽が、ペニスをぴったりと包んでいく。

いつか、彩乃の口を無理矢理に犯したときとも違う、じわじわと際限なく高まっていくような快感だ。

彩乃は、舌や口腔粘膜にペニスの表面をこすりつけるようにしながら、ピストンを始めた。

ペニス全体がまんべんなく快楽のとり火にあぶられ、ますます熱くなっていくような感覚がある。

彩乃は、ペニスを十分に唾液で濡らしてから、口を離れた。

そして、裏筋や雁首のくびれに、その唇と舌を這わせる。

「んわっ……あ……あん……ひあ……やぁっ……！」

鋭い快楽に、びくびくと暴れそうになるペニスを両手で優しく押さえ、彩乃は濃厚なフェラチオを続けた。

まるでハーモニカでも吹くような感じで横啜えにして、ゆるめると唇を這わせたかと思うと、亀頭の先端部分だけに唇をかぶせ、鈴口を舌でえぐるようにする。

そして、ぴゅるぴゅるとまるで小水のように溢れるカウパー氏腺液を、彩乃は嬉しそうに舐めとった。

その合間に、淫靡な視線を、眼鏡の奥からちらちらと寄越す。

「ひあ……は……あう……ん……んん……んん……あっ！」

朱美は、何重にも倒錯した快感に、絶え間なく喘ぎを漏らしてしまっていた。

ひく、ひく、とペニスが射精の準備運動を始める。

すると彩乃は、あっさりフェラチオを中断させてしまった。

「あ、イヤ……続けてエ……」

朱美が、切なそうに眉をたわめながら顔でおねだりをする。

「ふふ、いつかのお返し」

「そ、そんなア……」

「冗談よ。知巳さんと一緒じゃなきゃ、意味ないでしょ？」

すっかり当初の目的を見失っていた朱美に、彩乃が笑いかける。

「奈々ちゃん、そっちはどう？」

「あ……じゅんぴ、おっけーです」

奉仕しているうちに興奮してしまったのか、ぼおっと顔を染めながら、奈々が言う。

「じゃあ　しょっか？」

「はい……」

察しよく肯いて、奈々は、立ちあがった。そして、自分の唾液と愛液で濡れた口元を、恥ずかしそうにぬぐう。

「知巳ちゃん……」

そして奈々は、知巳の肩に両手を置き、その腰をまたぐようにして、ソファーにあがった。

んしょ、んしょ、などと言いながら態勢を整えようと体を動かすたびに、その幼い顔立ちに不釣り合いな巨乳がたぶたぶと揺れ、乳首にはめられた銀色のピアスがかすかな光の軌跡を残す。

ようやく、奈々の無毛のクレヴァスが、ディルドーの先端をとらえた。

「奈々……」

そう呼びかける知巳ににっこりと笑ってから、奈々は、ゆっくりと腰を落としていった。

「ン……あああッ！ ああああああッ！」

奈々の体重によって、さらに深いところにディルドーを打ちこまれ、知巳は喉を反らした。

形は似ていても、セックスの時の挿入感とは全く異なる。互いに、淫具を通して、犯し、犯されているような感じだ。

「じゃ、こっちもいくわよ……」

そう言って、すでに朱美と対面座位の形になっていた彩乃も、そのクレヴァスをペニスに押し当てる。

「ンあ……」

ぬぬぬっ、とクレヴァスがペニスを飲みこんでいく様は、どこか、妖しく淫らな未知の生き物の捕食風景を思わせた。

四人の体が、しばし、静止する。

そして、彩乃と奈々は、まるで示し合わせたように、同時に腰を使い出した。

「あ……ンう……っ」

「ひあ……あ……ン」

知巳と朱美の喉から、快樂の声が漏れる。

四人分の体重と重みを受け、ソファーが、ぎしぎしとかすかに音を立てた。

それに、じゅぽっ、じゅぽっ、じゅぽっ、じゅぽっ、という淫靡に湿った音が重なる。

「知巳ちゃん、どう？」

いつになく、どこかお姉さんっぽい言い方で、奈々が訊く。

「す、すごい……なんか……どうにか、なっちゃいそう……」

知巳は、体の奥底からあふれ出る快感に、わずかに怯えるような顔で、奈々の顔を見た。

奈々が、そんな知巳に対するたまらない愛しさに、ぎゅっ、と頭を抱き締める。

「んんん～！」

柔らかな胸の谷間に顔を挟まれ、呼吸を阻害された知巳が、声をあげる。

「あは……ごめえん」

そう言って、奈々は、一度知巳の頭を解放してから、右の乳首をその口元に差し出した。

「おっばい、吸って……」

そんな奈々のおねだりにこくと肯き、知巳は、ちゅうちゅうと無心な顔で奈々の乳首を吸った。

そして、歯や舌で、ピアスに貫かれて敏感になった乳首を刺激する。

「あっ、ああん……きもちイイよオ……」

奈々は、嬌声をあげながら、ぐりぐりとその丸いヒップをグラインドさせた。

「ンうんんッ！」

膣内を激しくディルドーでかきまわされ、知巳がぐもった声をあげる。

「羨ましい？ 朱美さん」

快感にとろけそうになった頭で、知巳と奈々のやりとりをぼんやりと聞いていた朱美に、彩乃が言う。

「そ、そんなこと……」

「そう？ あたしは、ちょっと妬けちゃったな」

そう言って、彩乃は、朱美の額にちゅっとキスをした。

「だから、あたしたちも、負けずに気持ちよくなっちゃいましょう」

「和泉センパイ……」

艶然と微笑む彩乃に、朱美は、ぞくりと悪寒のようなものを感じた。

しかし、その悪寒は、そのままぞくぞくと背中を這い登る快感になっていく。

「ふいふっ」

彩乃は微笑んで、くいつ、くいつ、とヒップを動かした。

そうしながら、その形のいい乳房の先端にある乳首を、彩乃の胸板にこすりつけるようにする。

朱美のペニスが、彩乃の熱い秘肉の中で、ますます大きくなっていった。

「ああん……オチンチン、おっきい……きもちイイの……」

普段の慎ましやかな彩乃からは考えられないような媚声を聞きながら、朱美は、ぐんぐんと身の内で性感が高まっていくのを自覚していた。

熱を帯びた肉褌がシャフトをこすり、愛液に濡れた膣肉がぐいぐいと痛いくらいにペニスを締めつけている。

いつしか朱美は、両手で体重を支え、彩乃の動きに応えるように、下から腰を動かしていた。

唇が、彩乃の唇に塞がれる。

「んう……うん……んム……ふう～ン」

朱美は、自分が、まるで媚びるような鼻声を漏らしてしまっていることに、気付いていない。

ただ、ふれあい、こすれあう粘膜がもたらす快感にのみ、頭が支配されかかる。

と、彩乃が、唐突に腰の動きを止めた。

「あああ……ン」

絶頂寸前でまたおあずけをくらい、朱美が恨みっぽい声をあげる。

「ゴメンね……知巳くんも、もう少しみたいだから……」

はぁ、はぁ、と喘ぎながら、彩乃が言う。

背後に意識を向けると、確かに、知巳の切羽詰った喘ぎ声が聞こえた。

ぴったりと重なった背中が、びくびくっ、びくびくっ、と痙攣している。

「ちょっと、本気だすね」

悪戯っぽくそう言って、彩乃は、目を閉じた。

「あ？ あああッ！ ンあああッ！」

朱美は、声をあげていた。

ペニスをぴったりと包む肉襞が、ぞわぞわと無数の軟体動物のように動き出したのだ。

「た、食べられちゃうっ！」

ペニス全体を膣内に飲みこもうとするかのようなその蠢動に、朱美は、思わずそんな声をあげてしまう。

「お、おどろいた……？ 朱美さんも……がんばれば、できるようになるかも……」

そう言って、彩乃は、膣肉を蠕動させたまま、ぐいぐいと腰を動かした。

「あ、ひっ！ ンあああッ！ ああああアアアッ！」

「朱美さん……知巳くんといっしょに……イって……っ」

「あ、ダメ！ ボク、もうダメ！ ダメえええ！」

何かに追い詰められ、圧倒されたような声をあげながら、朱美が、びくびくと体を震わせる。

「知巳ちゃん……朱美ちゃん、もうすぐだよ……」

そう、知巳の耳元でささやきながら、奈々も激しく腰う使う。

いつしか、知巳と朱美は、手錠で戒められた互いの手を、ぎゅっと握り合っていた。

お互いの痙攣を、背中に感じる。

「あッ！ あッ！ あッ！ ンあああああああああああああああああああッ！」

絶頂の音が、地下室に響いた。

一瞬、体がふわっと軽くなるような錯覚。

身体感覚の全てから解放され、純粋な快樂の海に、心だけで漂っているような……。

しかし

結局、二人の心は、元の体に戻ることはできなかった。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

第六章

知巳と朱美は、当然のことながら、一緒に家路についた。

すでに、空は薄暗い。西の空には宵の明星が輝いている。

駅から家までの道を、二人は、並んで歩いた。

「うまくいかなかったね、お兄ちゃん……」

「ん、そだな」

朱美の言葉に、知巳は肯いた。

「でも、その……ちょっと、うまくいきそうだったよな」

「う、うん……」

そう返事をして、朱美は頬を赤らめる。

「だから、今に、うまくいくんじゃないかな」

「そうだね……」

そう言ってから、朱美は、しばし遠い目をした。

「あのさ、お兄ちゃん」

「ん？」

「和泉先輩ってさ……」

「……」

「ステキな、人だね」

予想外の言葉に、知巳は、ちょっと目を見開いた。

「お兄ちゃんが好きになったのも、なんだか分かる気がする」

「そ、そうか……？」

「うん」

そう、朱美が肯いたとき、胸ポケットにいれてあった携帯が鳴った。

「はい……あ、緑郎さん？」

朱美の言葉に、知巳は眉をひそめた。しかし、朱美はそれに気付かない様子で、電話の向こうの緑郎の言葉に聞き入っている。

「うん……うん……え？ 最終処分業者？ あだ名ですか、それ」

「？」

朱美の言う意味を読みきれず、知巳は首をかしげる。

「仕事……それって、犯罪ですよ。……え、カタナ？ ……六人？」

「……」

「分かりました。気をつけます」

そう言ってから、朱美は、携帯をポケットに戻した。

「ろくろーって……あの萌木って奴か？」

「え？ あ、うん、そうだよ」

「あいつ、まだお前にちょっかいかけてんのかよ」

知巳は、顔をしかめながら言った。

「緑郎さんは、そんなんじゃないよお。それに、向こうに彼女だっているみたいだし」

「あーいうおちゃらけ野郎は、信用できないんだよ」

知巳は、どうやら緑郎にあまりいい印象を抱いていないらしい。

「でもさ、けっこうあたし、お世話になってるんだよ。昼間も言ったでしょ。そもそもあの部屋、緑郎さんから借りてるんだから」

「あ、そんなこと言ってたっけな」

ただ、あの部屋のせいで、朱美と奈々の秘め事がエスカレートしてしまったというふうにも考えられる。知巳は、何とも複雑な表情をして見せた。

「……で、どんな話だったんだ？　なんか物騒なコト言ってたけど」

「あ、そうそう。津野田って奴の話」

ぴた、と知巳は足を止めた。

「彩乃先輩につきまとってる男だよな、それ」

先程とは比べ物にならないくらい険のある表情で、知巳が言う。

「そう。そいつのこと、緑郎さんに調べてもらってたの」

「で？」

「相当、アブない奴だって」

「何が？」

「だから、あいつ、最終処分ナントカってあだ名でね、裏の世界でも、一番危なくて汚い仕事やってるんだって」

「なんだそりゃ？」

「よく分かんないけど、盗んだ品とか、さらってきた女のコとか、あと、内臓とか、そういうモノのなかでも、一番ヤバくて、誰も手を出さないような品物を、やりとりしてるんだって」

「そんな　奴なのか？」

「うん。で、そういうことしてるから、けっこう修羅場をくぐってるんだけど、この半年で、六人も人を切ってるって話だった」

「切るって……刀って、言ってたな」

「日本刀、使うみたい」

「ふん……」

知巳は、朱美ですらたじろぐような、凶暴な表情を浮かべた。

「……面白いじゃねえか」

「おかえりなさい。二人とも」

双子の母である千恵子は、知巳と朱美を、いつもの穏やかな笑みで迎えた。

いつもながら、年齢不詳の笑顔である。きちんと四十代にも見えるが、下手をすると十代の少女のようなあどけなさも感じられる。

「知巳君、夕ご飯前で悪いんだけど、ちょっと道場の方までいいかしら？」

そのにこやかな顔のまま、千恵子は言った。

「な、なんで？」

「ちょっと、久しぶりにお稽古を、と思ってね」

そう言いながら、千恵子は、和服に足袋に割ぼう着、といういつもの姿で、廊下を先に歩き出した。

葛城家の道場は、母屋に隣接して建てられている。その黒ずんだ羽目板や柱は、道場が母屋よりも長い歴史を刻んでいることを証明していた。

父である修三が、知巳や朱美に葛城流を伝授した場所は、この道場である。

葛城流は、基本的に弟子を取らない。その珍しい例外が、双子の父である修三だった。彼は、養子として葛城家に入り、千恵子の父である土彦から葛城流を伝授されたのだ。

そして今、修三は仕事の都合で海外に赴任し、双子の祖父に当たる土彦は東京に出たまま音信不通である。

「さて、と」

道場に入った千恵子は、まるで料理道具でも選ぶような軽い調子で、壁に架けられた木刀のうち一本を取り上げた。

そして、二十畳ほどの板敷きの道場の中央に、無造作に立つ。

木刀は、左手に、腰に引き寄せるようにして持っていた。

「無刀取りの、稽古？」

靴下を脱ぎ、裸足になりながら、朱美が訊く。

「別に、無刀取りにこだわらなくてもいいわよお」

千恵子が、楽しそうな口調で言った。

「その代わり、母さんもやる気出しちゃうから」

「母さん……」

朱美が、困ったような声をあげる。

「あ、でも、お顔は遠慮してね。修三さん、もうすぐ帰ってくるんだから」

まるで、新婚の若妻のような表情で、千恵子が言った。

「気を付けろよ」

知巳が、千恵子に聞こえないような小さな声で、朱美に囁いた。

「どういつもりか分からないけど、母さん、本気らしいぞ」

「そりゃまあ、気を付けるけど……」

千恵子は、入り婿である修三よりもはるかに早くから葛城流を叩きこまれた身だ。未だ、修三と千恵子のどちらが優れた使い手なのかという、考えるだに恐ろしい疑問に、知巳も朱美も答えを見出していない。

「木刀に気を取られるな」

「うん……」

肯いて、朱美は、ゆっくりと中央に歩き出した。

知巳は、その場に立ったまま、心配そうに二人を見ている。

葛城流に、最初の合図はない。互いが視界に入った瞬間から、立会いは始まっている。

自分に近づいてくる朱美に柔らかな視線を注いだまま、千恵子は、木刀の柄を右手で握った。

居合の構えだ。が、木刀の刃に当たる部分が下を向いているのが、通常の居合と異なる。時代劇などに出てくる、いわゆる普通の刀は、打刀などと呼ばれ、刃を上にして腰に佩く。刃を下にするのは、太刀と呼ばれる、主に室町以前に使われた日本刀である。

(太刀の、居合術……?)

なぜ千恵子がわざわざそんな構えをするのか、朱美には分からない。

と、そんな朱美の心の毛ほどの揺らぎを捉えたかのように、千恵子が、滑るように前に動いた。

背後に逃げても、千恵子の斬撃の速さから逃れられるとは思えない。

「っ！」

朱美は、すかさず距離を詰めた。間合いが詰まれば、長い木刀を自由に操るのは難しくなる。

しかし、そんな朱美の目論見は、あまりに甘かった。

「！」

千恵子が、右手に握った木刀の柄頭で、朱美の鳩尾を突こうとする。

朱美は、とっさの判断で、葛城流独特の鉤状に曲げた指先で、その木刀の柄を捕らえようとした。

このまま、武器を奪い取ることができれば“辻風”、相手に武器を握らせたままコントロールすることができれば“逆波”という技になる。

が、千恵子は、そのどちらも許さなかった。

右足で朱美の右足を、とん、と軽く踏み、前進を封じてから、身を引つつ木刀を大きく薙ぐ。

朱美にとっては、全く予想外の軌跡だ。

木刀が、朱美の頭の横で、ぴたりと止まった。

朱美は、その身を凍りつかせたように動かさない。

「はい、残念 」

そう言って、千恵子はゆっくりと木刀を引いた。

「ず、ずるいよ母さん！」

朱美が、額に浮かんだ汗をぬぐいながら、言った。

「ひどいわねえ。何がずるいの？」

千恵子が、木刀を壁に架けながら、子供のように口を尖らす。

「だ、だって、今の動きじゃ、刀、鞘から抜けてないじゃん！」

「別に母さんは、居合だとも何とも言ってないわよ。母さんが持っていたのはあくまで木刀でしょ」

「で、でも……」

「それに、鞘に入った刀で殴られただけでも、勝負がつくこともあるのよ」

「……」

「刀は、要するに鉄の塊……。鉄パイプで殴られるのと同じようなものなんだから」

そう言ってから、千恵子は、右手を頬に当て、ほう、とわざとらしくため息をついた。

「でも心配だわあ。こんなんじゃ、あのお兄さんに勝てるかどうか」

「誰？」

黙って見ていた知巳が、声をあげる。

「昼間ねえ、津野田さんって方が、お友達を連れていらっしやったのよ」

「な……！」

知巳は、思わず大きな声をあげていた。

「ど、どういうこと？」

絶句する知巳に代わって、朱美が訊く。

「何でも、知巳君にご用があったんですって」

「そいつが、そのう……刀を、持ってたの？」

「そうよお」

朱美の問いに、千恵子がなんでもなさそうに答える。

「ちょっと変わった太刀だったわ。抜いたりはしなかったけどね」

「……」

「で、知巳君は今日はお出かけです、って言ったら、お友達がちょっとうるさくしたんで、お仕置きしちゃった。ダメね、最近の子は、しつげがなくて」

千恵子がどんな“お仕置き”を津野田の連れ達にしたのか想像して、知巳と朱美は顔を見合わせた。

「でもまあ、津野田さんはわりとお話のわかる人だったみたい。近いうちに知巳君との決着は付けるつもりだけど、今日のところは引き上げる、って言ってたわ」

「か、母さんは、何て答えたの？」

朱美が、思わず訊く。

「知巳君にはいい勉強になるだろうから、よろしくおねがいします、って言っておいたわよ」

涼しい顔で、千恵子は答えた。

「何なら、まだ元気なお友達が一緒でもいいですよ、とも言ったわ。そしたら、もともとそのつもりだ、なんて言われちゃった」

「母さん……」

朱美が、呆れたような声を出す。

「あのねえ、知巳君」

そんな朱美に、千恵子は近付いて顔を寄せた。

「お父さんも言っていたでしょう。ケンカは、なるべくしない。でも、するんだったら、どちらかが嫌になるまで徹底的にやる。あとで家に相手来ちゃうような中途半端なことには、できるだけならないようにしないと、ね」

「……」

「それが、責任ていうものよ」

「うん……」

「ま、でも、向こうが何人もお友達を連れてくるんだったら、こっちもそれなりに対処しないとね」

そう言って、千恵子は、知巳の方を向いた。

「朱美ちゃん」

「な、なに？」

知巳が、やや上ずった声で訊く。

「知巳君のこと、手伝ってくれる？」

何でもお見通し、といった感じの微笑を浮かべる千恵子に、知巳は、ぎこちなく肯いた。

夜中、知巳の部屋に、ノックの音が控えめに響いた。

「……どうぞ」

すでに電気を消し、ベッドに横たわっていた朱美が、ドアに向かって言う。

入ってきたのは、知巳だった。

「どうしたの？ お兄ちゃん」

朱美が、上半身だけ起こしながら訊く。

「あのな、そのう……元に戻る方法、いろいろと、考えたんだ」

部屋に入り、ドアを閉めてから、知巳は言った。

「……彩乃先輩や、奈々に手伝ってもらうんじゃ、いつかうまくいくにしても、間に合わないかもしれないし……それで、俺……」

「ずいぶんと、焦ってるね」

かすかな笑みを唇に浮かべながら、朱美が言う。

「あの件をボクに任せとくのは、やっぱ心配？」

「正直、それもあるけど 津野田とか言う奴との決着は、俺自身がつけたいからな」

「ふうん……で、どんな方法を思いついたの？」

「お前にも、分かってるだろ」

知巳にそう言われて、朱美は、少し頬を赤く染めた。

「つまりそれって……ボクと、お兄ちゃんが……その一、するってコト？」

知巳が、肯く。

「……いいの？」

「いいのって？」

「自分の体としちゃうなんて、抵抗ない？」

「そ、そりゃあ、あるさ……あ、もし、お前がイヤだって言うなら、無理にはできないけど……」

そう言いよどむ知巳にくすりと笑って、朱美は、ベッドから立ちあがった。

「ボクは、ぜんぜんヤじゃないよ」

知巳に近付きながら、朱美が言う。

「ボクの体を、お兄ちゃんの体を使って犯しちゃうなんて……すごく興奮しちゃう」

「朱美」

すぐそばまできた、もとは自分の顔を見つめながら、知巳がつぶやいた。

その顔は、わずかに緊張しつつも、期待に頬が染まり、目が潤んでいる。

「キス、できる？ お兄ちゃん」

挑戦的に、朱美が言った。

「ちょっと、安心した」

知巳が、朱美の言葉と直接は無関係なことを言う。

「？」

「今、お前、きちんと朱美の顔になってる」

そう言われ、え？ と驚く朱美の顔に、知巳は、目を閉じて口付けた。

「ん……んン……ん……」

不意打ちに目を見開いた朱美だが、そのまま、ゆっくりと目蓋を閉ざす。

そして、おずおずと、両手を知巳の背中に回した。

知巳も、朱美の体に腕を回す。

互いの体を使って、もとの自分の体を抱き締めて、キス。

双子は、奇妙な昂ぶりと、わずかな背徳感と、そして、言葉にしがたい安堵感のようなものを感じていた。

母の胎内で、九ヶ月以上も一緒だった二人。それが、ひどく倒錯的な形で、身を寄せ合

っている。

ようやく、知巳と朱美は、唇を離れた。

ほとんど身長差のない二人が、見詰め合う。

「お兄ちゃん、ちょっと震えてる」

朱美が、笑みを含んだ声で言った。

「お前だって、震えてるぞ」

「ボクのは、嬉しくて震えてるの」

そう言って、朱美は、ちゅ、と知巳の唇をついばんだ。

「優しくするからね」

そう言われて、知巳は、顔を耳まで赤く染めた。

知巳は、ベッドに横たわっている。

すでに全裸だ。

その全裸の体に、やはり着ているものを全て脱いだ朱美が、覆い被さるようにしている。

何度かキスした後、朱美は、知巳の首筋に唇を這わせていた。

唾液に濡れた唇が、白い肌の上に、軟体動物のように跡をつけて移動していく。

そして、時々、思い出したように、舌で敏感な部分をくすぐった。

そのたびに、知巳はひくひくと小さく震える。

「ふふ……」

朱美は小さく笑ってから、知巳の左の乳首に唇を寄せた。

ひくん、と知巳が体を一瞬だけ反らす。

朱美は、まるでじっくりと味わおうとするかのように、舌の平の先の方で、乳首の下側をちろちろと舐めた。

さらには、唇で優しく乳首を吸い、尖らせた舌先で髭のように転がす。

「ン……う……く……」

知巳が、漏れ出そうになる喘ぎを押し殺す。

「ガマンしちゃだめだよ、お兄ちゃん」

れろん、れろん、と舌先で乳首を弾くようにしながら、朱美が言った。

「声あげた方が、気分がノるんだからさ」

「で、でも……母さんに……聞かれたら……」

「ダイジョブだよ、多分」

そう言いながら、朱美は、知巳の二つの乳房を、両手でふにっと包み込んだ。

「それより、今は、こっちに集中して……」

そう言いながら、小ぶりながら形のいい乳房を、ふにふにと揉む。

強すぎず、弱すぎず、絶妙な力加減だ。

どうすれば自分の体から快感を紡ぎ出せるのか分かっている朱美は、巧みな手つきで双

乳を揉みしだき、指先で乳首をくりくりと動かした。

「あ……うっ……ン……」

知己が、切なげに眉を寄せながら、身をよじる。

しかし朱美は、執拗に乳房を攻め続けた。

半球型の白い乳房の頂点で、桃色の乳首が尖っていく。

朱美は、乳房を真ん中に寄せ、触れ合うほどに近付けた乳首を同時に舐めた。

が、少女の乳房のみずみずしい弾力が、すぐにその形を元に戻してしまう。

「あは、これ、奈々だと楽にできるのに……」

「お前、自分の体で遊ぶなよ」

朱美の独り言に、知己が呆れたように言う。

「やだよーだ。ボク、今夜はボクの体で、うんと遊ぶことにしたんだから」

そう言って、朱美は、知己の脇腹に指を這わせた。

「んわっ！」

敏感な部分をくすぐられて、知己が思わず声をあげる。

「ココ、くすぐったいんだよねえ……」

そんなことを言いながら、朱美は、その指先を軽やかに動かす。

「ちょ、やめ……んわっ……ひゃ……ああああああっ！」

言葉にならない声をあげながら身悶える知己の膝にまたがり、朱美は、脇腹をくすぐり続ける。

階下の千恵子に聞こえないように、必死で笑い声を抑えながら、知己は、釣り上げられた魚のようにのたうった。

顔が赤く染まり、目尻に涙が浮かぶ。

ようやく朱美がくすぐり責めをやめたときには、知己の額にはじっとりと汗がにじみ、やや癖のある柔らかな前髪が数本、貼りついてた。

「お、お前、なあ……」

まさに、息も絶え絶え、といった風情で、知己が言う。しかし、その口調は、どこか弱々しい。

「えへへ、色っぽい顔してるよっ」

そう言って、朱美は、再び脇腹に手を伸ばした。

一瞬、びくっ、と、身をすくめる知己をそのまま抱き締めて、唇を重ねる。

「んう……」

伸ばした舌先で口腔や舌を舐りながら、肌に手を這わせる。

先ほどのくすぐりの余韻のせいか、知己は、指先が肌を這うたびに、びく、びく、と敏感に反応した。

朱美が、知己の唇から唇を離し、肌に再び舌を這わせる。

乳房や乳首をまた刺激してから、引き締めつつもなだらかな曲線を描く腹部を舌先で

くすぐり、へその周りで円を描くようにする。

そして、朱美の頭が、脚の間にまで到達した。

かつての自分の体の、秘密の場所。

そこを、他人の目線でまじまじと見つめる。

薄めの陰毛の下で息づくそれは、すでにほころびかけ、透明な蜜を分泌し始めていた。

スリットからはみ出た肉襞はピンク色で、きらきらと濡れ光っているように見える。

角度が違うので、自分で見たときと、やはり全然違った。それでも、予想よりグロテスクでなく、朱美は内心ちょっとほっとしていた。

そして、そんな自分にくすりと笑ってから。クレヴァスに口付けする。

「ん……」

まずは、ぼってりとしたクレヴァスの周辺を、くすぐるように、舌の平で舐める。

時々太ももにキスをする、くすぐりたいのか、知巳は小さく声をあげた。

構わず、焦らすように周辺部を舐める。

スリットから、透明な愛液が、次々とにじみ出た。

その愛液を舐め取るように、下から上に、れろん、とクレヴァスを舐め上げる。

「ひゃう……」

兄が、自分の声であげた小さな悲鳴に、朱美は、かあっと頭に血を昇らせた。

その声をもっと聞きたくて、れろれろと舌を動かしながら、クレヴァスの狭間にねじ込んでいく。

「んあ……んく……は……あ……あう……んっ……」

自分のあげる声が恥ずかしいのか、ぎゅっと目をつむりながらも、知巳は、喘ぐのを止めることができない。

朱美は、両方の親指で、クレヴァスを左右に割り開いた。

欲情した牝の匂いが、鼻孔をくすぐる。

その匂いを不思議な気持ちで嗅ぎながら、朱美は、あらわになった膣口に舌を押し付けた。

「あ、あう……ん……ああっ……」

知巳の喘ぎ声を聞きながら、膣口の周辺を舌でくすぐり、尖らせた舌先を埋没させる。

じゅぼじゅぼと舌先を出入りさせると、クレヴァス全体がひくひくと痙攣した。

舌に、溢れ出た愛液の独特の酸味を感じる。

朱美は、すっかりとろとろになったその部分から口を離し、さらに上に唇を這わせた。

「ひあっ！」

包皮から少し顔を出していたクリトリスを舐め上げられ、知巳は、思わず鋭い声をあげてしまっていた。

二人の動きが、一瞬止まる。

が、千恵子が起きだした気配はない。

「ちょっと、声、おっきかったかな～」

意地悪くそう言いながらも、朱美は、膣内に右手の中指を差し入れた。

「あ、あ、あ……ンっ」

知己が、不安げな声をあげる。

朱美は、自分で自分を慰めていたときのことを思い出しながら、入り口付近で、くにくにと指を動かした。

そして、莖に隠れたクリトリスを舌先でノックするように刺激する。

ぴょこん、と勃起したその部分を、朱美は、愛液に濡れた指先でくりくりと舐った。

「んんんンンンっ！」

知己が、頭の下に敷いた枕をぎゅっとにぎりながら、体を反らす。

そんな兄の可愛らしい仕草に笑みを浮かべながら、朱美は、舌の裏側の柔らかな部分で、敏感な突起を優しく愛撫した。

その間も、膣口に挿入した指先を蠢かせ、感じる部分を容赦なく刺激する。

「ンあ……あ……はっ……あん……あア……あう……っ」

知己は、体がかかってにうねうねと動いてしまうのを止めることができない。

と、朱美は、ゆっくりと体の方向を入れ替えた。

「お兄ちゃん……」

そう呼びかけられ、知己は、うっすらと目を開いた。

「あ……」

自分の頭を膝でまたぐ朱美の股間に、半ば勃起したペニスがぶら下がっている。

下から見上げているせいか、見なれたはずのその器官は、ひどく凶暴に見えた。

朱美の意図を察して、知己の心臓が、拍動を速める。

頭がじんじんと痺れ、背筋に、何とも言えない戦慄のようなものがぞくぞくと走った。

まるで誘うように、知己は、唇を半開きにしてしまう。

朱美が、腰を落とした。

「ン……」

知己は、目を閉じ、ペニスを啜えこんでいた。

舌の表面を、苦い先走りの汁に濡れた亀頭が滑る。

こんなところにまで、と思うほどに、ペニスが、口腔の奥を占領していった。

「ン……んむ……う……ン……」

知己は、歯を立てないように努力しながら、もごもごと口を動かした。

愛撫する、と言うよりも、呼吸を確保するために、口腔の中のペニスの位置を調整しようとする。

自らのペニスを啜えさせられるという、今まで考えたこともないような屈辱……。

これまで、気付きながらも無視し続けていた被虐の快感が、どばあっ、と脳内に溢れかえった。

自分が、今、女として男に組み敷かれているのだということを、いやというほど実感させられる。

と、朱美が、まるで知己の口を犯すかのように、ゆるゆると腰を動かした。

「ン……ンぐ……ふ……んン……っ」

亀頭部を舌にこすりつけられながら、知己は、苦しげな鼻息を漏らす。しかし、その響きには、どこか陶醉の色があった。

そんな自分の声に、ますます恥辱と倒錯の悦びが高まっていく。

ふと、知己は、かつて自分のペニスを嬉しげにしゃぶっていた彩乃の顔を思い出していた。

今、自分も、あの時の彩乃と同じような表情をしているのだろうか。

そう思ったとき、さらに高まったマゾヒスティックな快感が、熱い蜜となってクレヴァスから溢れ出た。

「すごい……お兄ちゃん……ココ、ぐちゃぐちゃだよオ……」

ぴちゃぴちゃと犬がミルクを舐めるような音をたてながらクレヴァスを舌で舐っていた朱美が、そんなことを言う。

知己のそこは、すでにすっかり牡を迎え入れる準備を整え、物欲しげにひくひくと蠢いていた。

「ふいふー」

そんな風に息をつき、朱美は、愛液の糸を引きながら、口を離した。

そして、ぬるっ、とペニスを知己の口から引き抜き、再び体の方向を入れ替える。

知己の唾液に濡れたペニスが、急な角度で、上を向いていた。

そのペニスに手を添えながら、朱美が、知己の開いた脚の間に膝を折って座る。

知己は、わずかに体を起こし、まるで熱でもあるかのような潤んだ瞳で、赤黒いペニスを見つめていた。

「お兄ちゃん……女のコの顔になってる……」

朱美が、そんなことを言いながら、腰を進ませた。

赤く腫れあがったようになっているペニスが、クレヴァスに触れる。

「ボクが、女のコの良さを、教えてあげるね……」

そう言って、朱美は、ぐっ、と一気に腰を突き出した。

「ンああああッ！」

知己が、体を弓なりに反らす。

体の奥を、熱い肉の楔で貫かれた衝撃に、知己は、ぱくぱくと口を開閉させた。

膣内に打ちこまれた熱い塊に全身を支配されてしまったような、そんな感覚がある。

「感じてる？ お兄ちゃん……」

体をかぶせ、知己の耳元に唇を寄せて、朱美は訊いた。

「感じてるんでしょ？ ボクのアソコで……お兄ちゃんのおチンチンを……」

こくん、と知己が肯く。

「うらやましい……」

そう言って、朱美は、腰を動かした。

「ンあッ！」

体の内側がめくれあがるような錯覚に、知己は短い悲鳴をあげた。

粘膜と粘膜がこすれ、じわじわと熱くなり、そして、とろけるような快感が湧きあがる。

無機質なディルドーで犯されたときとは全く違う、熱い塊がせりあがってくるような感覚。

知己は、我知らず、朱美の体をぎゅっと抱き締めながら、はしたなくも腰を浮かしていた。

朱美は、うっとり目を閉じながら、知己の唇に唇を重ねた。

口腔をまさぐる朱美の舌に、自らの舌を絡みつかせて、知己が応える。

朱美は、ぴったりと知己と体を重ねながらも、何かに憑かれたように、ますます激しく腰を動かした。

白く濁った愛液が二人の接合部から溢れ、会陰を伝ってシーツにこぼれおちる。

「すごい……なんだか……とけて、くっついちゃいそう……」

舌足らずな声で、どちらともなく、そんなことを言う。

その声が、耳から脳に届いたときには、それを言った当人も、自分が言ったのだということ忘れていた。

密着し、こすれ合う柔らかく熱い器官が、淫猥な汁にまみれた快楽を育てていく。

その熱い快感を感じながら、二人は、互いにきつく体を抱き締め合っていた。

いつのまにか、二人の間には、彼我の区別がなくなってしまうている。

まるで、互いの神経が絡み合い、脳がとろけて混ざり合ってしまったような感じだ。

知己は、朱美が知己のものだったペニスで感じている快感を感じ、朱美は、知己が朱美のものだったヴァギナで感じている快感を感じる。

二人は、まるで本当に一つの生き物になってしまったかのように、ひくひくと震えながら、一つの快楽を貪っていた。

もし、この快感がはじけたら、どうになってしまうのか……。

そんな、かすかな恐怖に彩られた期待に、体がおののき、そして相手のおののきを腕に感じる。

そして

「ッ！」

射精中枢に送り込まれ続けていた快楽の信号が、ついにある一点を突破した。

下腹部に、痛みを覚えるほどに充満していた熱い体液が、出口に向かって殺到する。

「あ、あッ！ ンあ！ あッ！ あああああアッ！」

粘度の高い白濁液が尿道をかけ抜け、ペニスの先端から勢いよく放出された。

びゆくびゆくペニスが自らの中で暴れ、熱いスペルマが、体内に広がっていく。

その、二つの感覚を、知巳と朱美は、同時に感じていた。

「あ……ッ！」

ふわりと、全ての束縛から解放され、浮遊するような高揚感と、どこまでも続く昏い穴に墮ち続けているような落下感。

寝具の感触も、上下感覚すらも消え、互いの呼吸音と、腕の中の体温だけを感じる。

そして、二人は、ようやく、もとの世界に戻ってきた。

「ンあ……」

二人は、呆けたような声をあげ、互いの顔を見つめた。

知巳は上から、朱美は下から

そして、ほとんど同時に、自らの体に目を移した。

知巳のペニスが、しっかりと朱美の中に挿入されたまま、次第に硬度を失いつつある。

そして、役目を終えたペニスが、膣圧によって、ぬるん、と外に押し出された。

大量の精液が、それに続くように、こぼこぼと溢れ出る。

「……戻った、ね」

下から自分を見上げながら言う朱美に、知巳は、小さく肯いた。

今まで感じていた幾つもの違和感が消えうせ、心と体が、ぴったりと重なったような感じがする。

当たり前と言えば当たり前のその感触が、奇妙なほどに新鮮だった。

「んふっ……」

何が可笑しいのか、朱美が、くすくすと笑い出した。

それにつられたように、知巳も、笑い出す。

双子は、互いの体に腕を回したまま、寝床の中で、いつまでも声を殺して笑い続けた。

第七章

廃工場に置き捨てられた木箱に、太刀を抱えるようにして座りながら、津野田は、その細い目を閉ざしていた。

目蓋の裏に、かつて犯した彩乃の白い肢体が浮かぶ。

これまで、欲しいものは全て奪うことで手に入れてきた。

津野田の父親は、この工場が稼働していたときの、工場主だった。工場の事務員として働いていた少女を無理矢理に犯し、そして生まれたのが自分だ。

津野田の父親は、酒に酔うと、その話をまるで自慢であるかのように話した。

そして、津野田が高校生になったとき、父親は、事業を知人に乗っ取られた。

すでに人手に渡ったこの工場で、廃人のようになった父親が首を吊って果てるのを、津野田は、物陰からじっと見つめていた。

母親は、当然のように自分を捨て、どこへともなく逃げてしまっていた。

津野田は、学校を辞め、犯罪組織に身を置いた。

奪えるものは、何でも奪った。上役や仲間のもので、躊躇はなかった。

過去が自分をそうさせるのだとは、思いたくなかった。むしろ、世間というものが、そのようにできていると、そう信じた。

奪うことによって豊かになり、力を得る。力がなければ全てを奪われ、そして命をも失う。世の中というものは、そういうふうになっているのだと。

そして津野田は、彩乃の処女を奪った。

いい女と見れば強姦し、その時の写真を撮って脅し、性の奴隷とする。津野田にとっては、当たり前のことだった。

が、彩乃は、他の女とは違った。清楚で慎ましやかな仮面の奥に、男を悦ばせることを無上の快樂とする、一種の魔性を秘めていたのだ。

無垢だった彩乃に淫らな性技を教え込みながらも、しばしば、津野田は圧倒されそうになった。

そして、彩乃の目。

荒々しい行為が終わった後、彩乃は、その黒い瞳に奇妙な光を浮かべ、津野田を見つめた。

怒りでも、恨みでも、哀しみでもない。

ただ、何かを求めている、そんな目だ。

しかし津野田には、彩乃が何を求めているのか、まるで分からなかった。

そんな視線に、怒りに似た感情を抱きながら、津野田は、彩乃を何度も陵辱し、ありとあらゆる方法で犯しぬいた。

それでも彩乃は、津野田に何かを求め続けた。

津野田は、逃げた。

ちょうど、あまりに手当たり次第に人から奪い、この街にいられなくなったということもあったが、それ以上に、彩乃のすぎるような視線から逃れたかったのだ。

彩乃を捨てることに、ためらいはなかった。欲しければ奪い、飽きれば捨てる。津野田はそうやって生きることしか知らなかった。

だが、東京に出ても、彩乃ほどの女はいなかった。

捨てたはずのものに未だ執着している自分に、津野田は愕然とした。

そして、身の内を焼くような思いに駆られ、津野田は、この街に戻ってきた。

だが、彩乃は、すでに別の男を見つけていたのだ。

名状しがたいどす黒い感情が、津野田の中を満たした。

(その男から、再び彩乃を奪う)

津野田は、身の内の黒い炎にその心を焦がしながら、暗い廃工場の中、じっとうずくまっていた。

午前十一時。

知巳と朱美は、指定された時刻に、廃工場にやってきた。

自宅宛に届いた手紙に書かれた通りである。

罨であることは分かっているが、その罨を噛み破らなければ、事態を開くできない。

敷地内の、倉庫からトラックに製品を搬出するための、舗装された広いスペースに立ち、知巳は、油断なく周囲に目を配った。

薫風と呼ぶにはいささか強すぎる五月の風が、埃を舞い上げ、上空では厚い灰色の雲を運んでいる。

「いるね」

兄と同様、ぐるりと周りに視線を巡らせた朱美が、短く言う。知巳は、分かっている、と言うふうに肯いた。

と、建物の影から、男達が現れた。

崩れた服装に、にやけた笑み。その手には、それぞれ、ナイフや木刀などを持っている。

双子は、男達の数え、ほぼ同時に目で数えた。十二人。それが、二人を囲むように、じりじりと移動をしている。

何かの武道の心得があるような者は、いそうにない。ただ、こういう場数だけは踏んでいるのだろう。武器を持って人を襲うことにためらいを覚えているような男は、一人もいなかった。

包囲が、完成した。

それを、双子がつまらなそうな目で見ている。緊張の色は余りない。

「津野田は？」

知己が、短く訊いた。

その声が聞こえたのかどうか、廃工場の、開けばなしのシャッターの奥から、ゆらりと長身の男が出てくる。

(あいつだ)

初対面のはずなのに、知己は、なぜか確信を抱いていた。

薄手の派手なシャツに、白いスーツ。ウェーブのかかった髪に高い鼻梁。細められた目の奥には、危険な光が宿っている。

「来たな……」

中途半端な笑みを浅黒い顔に浮かべながら、津野田が、かすかに震える声で言った。

その左手には、刃を下にして鞘に収められた日本刀が握られている。刀身の長さは二尺余り 70センチほどだろうか。直刀と見まがうほどに、反りが少ない。

朱美の記憶が脳に残っているのか、直接聞いたことのないはずの、津野田が彩乃を辱めた言葉が、なぜか知己の脳裏に浮かんできた。

知己は、きりきりと奥歯を噛み締める。

「お兄ちゃん、落ちついて」

そう言いながら、朱美は、ゆっくりと体を移動させた。

知己と並んで立つ位置から、背中合わせの位置に動く。

“両面宿儺”の構え

葛城流の、多対二の基本形である。

知己は、朱美の体温をかすかに背中に感じながら、一つ、深呼吸をした。

「あんたとやるのは、この雑魚たちを倒してからか？」

そして、そんなことを、包囲の輪の外にいる津野田に訊く。

「まあな」

そう、津野田が返事をした時

双子は、同時に地を蹴っていた。

男達が、どよめきとともに、それぞれの武器を構える。

その男達のうち、木刀を構えた男に向かい、知己は、大きく跳躍していた。

「ちえいっ！」

木刀を振りかぶった男の顔面に、強烈な右の膝を叩き込む。

そして、盛大に鼻血を流しながら後ろに倒れつつある男の胸を踏み台に、知己は次の男に向かって跳んだ。

予想外の角度からの、予想外の攻撃に、次の男は知己を視界に捉えることすらできない。

知己は、その男の延髄を、爪先で蹴り飛ばしていた。

そして、その男が倒れきる前に、その肩を踏み、また跳躍する。

最後の男は、喉を、飛び蹴りで砕かれていた。

血反吐を吐き、白目をむいて、男が昏倒する。

ようやく、知己はその足で地面に降り立った。

“浮船” 多数の相手の上半身に足技を当て、その動きのまま、跳躍して次の相手を強襲する技である。

知己の父の修三は、この技で一度に八人までを倒したことがあるという。今の知己では、三人がせいぜいだ。

が、ほとんど一瞬にして三人を失った男達は、言葉もない。

その虚を突くように、最も手近にいる男の懐に、知己は飛び込んでいた。

そして、鉤のように曲げていた右手の人差し指と中指を真っ直ぐに伸ばし、鳩尾に突き込む。

「げばッ！」

男は、急所を深々と貫かれ、胃液を撒き散らしながら倒れた。

その時には、朱美も、すでに二人の男を無力化していた。

自らに襲い掛かる男の攻撃を避け、すれ違いざまに、相手の足を踵で踏み砕く。

そして、やはりすれ違いざまに足払いをかけ、倒れる相手の腕を取って、受身を封じ、顔面を地面に叩きつける。

それぞれ、“影踏”と“草薙”と呼ばれる技だ。

倒れ、うずくまる二人の男の側頭部に、朱美は、容赦のない蹴りを見舞った。

膂力に勝る相手の機動を封じ、致命的な一撃はその後で与える。朱美得意のパターンである。

半数の仲間を失い、男達は絶句していた。

数と、暴力的な雰囲気によって威圧することで屈服させてきた今までの相手とは、次元が違う。そのことを思い知らされ、男達の顔面が蒼白になっている。

再び、知己と朱美は背中合わせになった。

互いの死角を補い合う、というだけではない。背後にいるパートナーの仕草や気配によって、見えていない敵の動きまで把握できる。本来であれば非常な鍛錬の末に至るはずのその領域に、双子は、すでに到達していた。

双面四臂四足を有したとされる神話上の飛驒の怪人にして英雄、両面宿儺。今の二人は、その顕現であるように見えた。

そもそも葛城流柔拳術は、大和朝廷によって西へ西へと追いやられつつも、郷土を守るために勇敢に戦ったこの国の先住民族たちに、遠く由来する。“土蜘蛛”などと蔑称された彼らが、数に勝る侵略者に対抗すべく編み出した数々の戦法を総合し、洗練させたこの技術体系は、対多数の戦いにこそ、その真価を発揮するのだ。

これまでの二人の動きで、津野田は、そのことを半ば本能的に悟ったようだった。

「……来いよ、色男」

知巳に、その暗い視線を注ぎながら、津野田が言った。

「サシで、相手してやるぜ」

無論、知巳と朱美を分断させるための策である。知巳は、一瞬、躊躇した。

「大丈夫だよ、お兄ちゃん」

その、兄のためらいを背中に感じ、朱美は言った。

「こいつらだけなら、ボクだけでも大丈夫。お兄ちゃんは、お兄ちゃんのやるべきことを、やって」

「 分かった」

短くそう答え、知巳は、足を踏み出した。

そして、二人を囲みながら、何もできない様子の六人が作る輪を、一人、出ていこうとする。

男達は、小柄な知巳が発する凄まじい殺気に圧倒されたかのように、場所を譲った。

朱美一人ならどうにかなるかもしれない、という、卑しい計算もある。

知巳が、津野田と対峙した。

津野田が、ぎゅうっと歪んだ笑みを、その唇に浮かべた。

一方、知巳は、無表情に近い。

ただ、その瞳に、かつてないほどに兇暴な光が宿っている。

津野田が、太刀の柄を右手で掴んだ。

かちり、と鯉口を切る音が、かすかに響く。

朱美の注意が、一瞬、向かい合う知巳と津野田の方向に、それた。

その時 その場の九人が、一斉に動いた。

知巳と津野田は、互いに向かって走った。

津野田はそのまま、太刀を鞘走らせ、抜き打ちに知巳の胴を薙ごうとする。

知巳が、低く身を静めた。

しかし、走る速度は落ちない。獣のように四つん這いで駆けているのだ。

数本の髪の毛を切り飛ばしながら、太刀の切っ先が、知巳の頭のすぐ上を通過する。

知巳は、そのまま両手を地面につき、両の脚を回転させ、地を舐めるような足払いを繰り返した。

と、津野田の太刀が、横に倒したVの字を描き、逆方向から知巳の頭部を狙う。

剣の峰による打撃 どんな居合術にもない、変則的な技だ。

峰打ちとはいえ、もしもともに食らえば、一撃で勝負が決まりかねない。

知巳が、頭部を守るべく、左手を上げた。

左の二の腕に、肌の上を刃が滑る、冷たいような感触が走る。

「っ！」

知巳は、足払いを強引に中断し、体を半回転させながら、大きく右に体をかわした。

ばあっ、と空中に鮮血がしぶく。

知巳の腕が大きく裂け、血が溢れていた。

地面を転がる知巳を、津野田が、太刀で突く。

「っああッ！」

知巳は、踏み込む津野田の右足に強引に蹴りを当て、一瞬の隙に、距離を取った。

両足で立ったとはいえ、未だ態勢が整わない知巳に向かい、津野田が、斬撃を繰り返す。縦横に宙を薙ぎ、喉元を狙って突き入れられる刃を、知巳は、後ろ向きに走りながら紙一重でかわし続けた。

両者の間に、ようやく十分な距離が開く。

知巳と津野田は、再び足を止め、対峙した。

知巳のワイシャツの左の袖が、血でぐっしょりと濡れ、ぼたぼたと赤い雫を滴らせている。

津野田が、血に濡れた自らの太刀に、満足げな視線を一瞬だけ向けた。

津野田の構える太刀は、その刀身の半ばまでが、諸刃になっている。

「こがらすまる……？」

知巳が、ぼつりつつぶやいた。

“^{きつききもろはづくり}鋒両刃作” と呼ばれる、古いタイプの特殊な太刀である。このような太刀は、平家一族に代々引き継がれていた名刀『小烏丸太刀』が同じつくりであったことから、同じ名前で呼ばれることもある。

知巳が知っているのは、そのような太刀があるということだけだ。

津野田の剣法は、偶然手に入れた小烏丸を使うために編み出した、全くの我流だろう。にもかかわらず、その動きは実戦的で、驚くほどに鋭い。

恐らくは、何人もの人間を斬ってきた経験が、その太刀筋に現れているのだ。

命をかけた戦い 殺し合いレベルの戦闘において、最初にして最大の障害となるのは、自身の中のためらいである。人の命を奪うことへの禁忌感、当人が思う以上にその動きを妨げる。それは、銃の撃ち合いでも、刃物の振り合いでも同じだ。

そして、それを解消できるのは、命にかかわる一撃を繰り出したことがある、という経験のみなのだ。

さらに、津野田の攻撃は、我流であるがゆえに、体系だった対応策がない。

鋒両刃作は、斬撃とともに、刺突にも効果的な形態であり、その動きの予想がつきにくいということもある。

知巳の額に、脂汗がにじんだ。

「く……」

急な出血による貧血で、目の前が暗くなる。

ふら、と知巳の足がよろけた。

「死ねええええ工！」

津野田の絶叫が、高く響いた。

一方朱美は、その細い体で、男六人を見事にさばっていた。

身を沈め、自らに迫る大男の懐に入る。

男からは、朱美の体が消えたように見えただろう。

「リャッ！」

短く鋭い気合とともに、朱美は、鉤状に曲げた右の指先を、相手のスラックスのホックに伸ばした。

「！」

男が、ずり落ちた自らのスラックスに足を絡ませ、無様に転倒する。

朱美が、一瞬にして、ベルトごとスラックスのホックを引き千切ったのだ。葛城流において“袴切”と呼ばれる技である。

倒れたその体をゆうゆうとかわしてから、朱美は、軽々と地を蹴った。

「ぶげ！」

宙を跳んだ朱美に後頭部を踏みつけられ、男は奇妙な声をあげて、顔面をコンクリートの地面に叩きつける。

その時には、朱美は、駆け寄る別の男の顔面に飛び膝蹴りを当てていた。

「ぎ……」

血と折れた歯を吐き、棒のように倒れながら、すでにその男は失神していた。

「このガキっ！」

刃を上にしてヒ首を腰に構えた男が、朱美に突きかかる。

朱美は、その男の向かって左側に回りこみながら、刃を強くつまみ、柄頭を押さえる左手を手刀で弾いた。

ヒ首が、握り締めた男の右腕の中で滑る。“逆波”だ。

「いぎゃあああああああ！」

自らのヒ首で右手の内側を深く切り、血をしぶかせながら男は盛大な悲鳴をあげた。

が、朱美は眉一つ動かさない。

ただ、冷徹な瞳で、次の獲物を狙う。

「ンのらあああああああ！」

わけの分からない声をあげ、残る三人の男のうち一人が、大上段に鉄パイプを振り上げながら、襲い掛かってきた。

朱美が、男の懐に飛び込み、その襟首に曲げた指先を絡める。

(逃げねば！)

血まみれになって地面に這いつくばってる仲間の姿に恐慌をきたしていたその男は、必死になって身をよじった。

が、朱美は、その逃れようとする力を巧みに誘導し、男をぐるりと引きずり回す。

大の男が、細い少女に引っ張り回されるその様は、どこか不恰好なフォークダンスを思わせた。

「はいッ！」

さして力を込めた様子もなく、足を軽く絡めただけで、朱美は、その男をぼおんと放り投げていた。

相手の体重と重心移動を利用した投げ技だ。原理的には、合気道で言う“空気投げ”に近い。

その投げられた先には、中途半端にナイフを構えた別の男がいた。

「えがッ！」

「ぎああ！」

二人の男がもつれるように倒れる。

ナイフを構えた男は、二人分の体重で後頭部をまともに地面に叩きつけ、投げられた男の背中には、仲間のナイフが深々と刺さっていた。

「え？ へ……へえ……っ？」

朱美を襲うことに、最も消極的であったがゆえに、最後まで残った男が、まるで間抜けな笑い声のような声を漏らした。

そして、血溜まりの中に倒れ、ぴくりとも動かなかつたり、痛みの余りにのたうっている仲間たちを、涙目で見つめる。

「次は、アンタ？」

さすがに、多少呼吸を早くしながらも、どこにも傷を負った様子のない朱美が、訊いた。

「あわ、あ、あああ」

とんでもない、と表情で訴えながら、男が必死にかぶりを振る。

と、その時

「死ねええええ工！」

津野田の絶叫が、高く響いた。

「お兄ちゃんッ！」

朱美の声が、遠くから響く。

それを聞きながら、知巳は かすかに微笑んでいた。

そして、ひゅっ、と左手を払う。無論、津野田に拳が届くような距離ではない。

「！」

目の中に熱いものを感じて、津野田の動きが鈍った。

知巳が、その流れる自らの血を、目潰しに使ったのだ。

「えがあああああああ！」

それでも、獣のように吠えながら、太刀を突き出す。

その太刀の切っ先に向かって跳び込むように、知巳は地を蹴っていた。

前に倒れるようにして空中に前転をする。浴びせ蹴りに近い動きだが、それよりも高い。とは言え、未だ蹴りの間合いの外である。

「なッ！」

赤く霞んだ視界の中、驚くほど近くに降りてきた知巳の姿に、津野田が、短く驚愕の声をあげた。

宙を一回転した知巳が、太刀を構える津野田の両腕を、両足の間に挟んだのだ。

知巳が、両足で津野田の両腕をロックしつつ、身をひねる。

「げえええええええッ！」

たまらず津野田が倒れたとき、知巳は、その両膝を津野田の下腹部に落とすような形になっていた。

知巳の股に挟まれた津野田の腕は、とっくに太刀を取り落とし、肘のところで奇妙に歪んでいる。

知巳が、空中でその身をひねることによって折ったのだ。

「葛城流無刀取り奥義“飛鳥”」

歯を剥き出しにした強烈な笑みを浮かべながらそう言った後、知巳は、その右手で津野田の喉を掴んだ。

ぐうっ、と遠慮のない力で、喉笛を握りつぶそうとする。

両腕を殺され、マウントを取られた津野田に、抗うすべは無い。

「が……」

くるりと、津野田が白目を剥いた。

「そこまでえ！」

大声ながら、あまり緊張感のない声が、廃工場の敷地に響いた。

知巳が、はっと顔を上げる。

その顔からは、今まで浮かんでいた鬼相が消えていた。

「そこまで、そこまで、そこまでえー！ いくらなんでも過剰防衛でしょお、知巳ちゃん」

そう言いながら、朱美とともにこちらに近付いてくるのは、ひょろりとした、どこか頼りなげな男だった。この周囲の惨状を前にしても、その顔には軽薄そうな笑みを浮かべたままだ。

襲撃者のうち残り一人は、どこかに逃げてしまったらしい。

「萌木　さん？」

一応、年上なので、さん付けで呼びながらも、知巳は露骨に眉をしかめた。

そして、すでに意識を失っている津野田の体の上から、のろのろと立ちあがる。

激しく動いたせいか、左腕の出血は、さらにひどくなっているようだ。

「朱美が、呼んだのか？」

「う……うん。だって……」

「怒っちゃダメだよー、知巳ちゃん」

何か言い訳しようとする朱美を手で制して、男 情報屋、萌木緑郎は言った。
「だいたい、派手に暴れるのはいいけど、後始末のコト考えてる？」
「よけいな……おせわ……」
そこまで言って、知巳は、今度こそ本当に貧血で倒れかかった。
慌てて駆け寄った朱美が、服を知巳の血で染めながら、慌てて抱き止める。
「んじゃ、お巡りさんが来ちゃう前に片付けなきゃねえ」
知巳は、薄れ行く意識の中、じわーっという耳鳴りとともに、緑郎のそんな言葉を聞いていた。

知巳は、緑郎の車で担ぎこまれた病院で、朱美から輸血を受けた。
意識を取り戻したとき、ちょっと青い顔の朱美と、千恵子が、自分の顔をのぞきこんでいた。少し離れた場所に、緑郎と、もう一人、眼鏡をかけた見知らぬ少女がいる。まだ中学生くらいの、男のコのような格好をした少女だ。
「結局、人様のお世話になっちゃって」
千恵子が、やれやれ、といった顔で、緑郎の方に向き直った。
「萌木さん、本当に、ありがとうございました」
「いやー、以前、二人にはお世話になったんで、当然ですよ」
そんなことを言いながら、緑郎が、千恵子の手を両手で握ったりする。
「っ！」
と、緑郎のでれでれとした顔が凍りついた。緑郎の後ろに隠れるようにしていた少女が、そのお尻をつねるか何かしたらしい。
「その人……萌木さんの彼女？」
「うん、そう」
緑郎が悪びれる風もなく言うと、少女の顔が、かーっと赤く染まった。
「つとに、油断ならないヒトだなあ」
上半身を起こしながら、知巳が言った。その左腕には、包帯が巻かれている。
「朱美にちょっかいかけてたと思ったら、本命はそっちかよ」
「そ、そりゃ誤解だよ知巳ちゃん！」
慌ててそう言う緑郎を、眼鏡の少女がジト目でにらみ、千恵子は面白そうな顔で、あらまあ、などと声をあげている。
「津野田は、どうなったんです？」
知巳が話題を変えると、緑郎は、あからさまにホッとしたような顔をした。
「地元の業者さんをお願いしちゃった」
「業者？」

「うん。彼の同業者さんでね、キズものでもいいから処分するために引き受けたい、って人達がいたから」

「それじゃあ……」

「そっから先は、考えなくてもいいよ」

口調は変えずに、しかしいつになく思慮深そうな顔になって、緑郎は言った。

「少なくとも、自分のせいだなんて思わない方がいい。彼は、いつかは自分のしたことに責任をとらなきゃならなかった。そーいうことだよ」

「……」

知巳が、不思議そうな顔で緑郎の顔を見つめる。

「んでもって知巳ちゃんは、早くケガを治すこと。学生さんの本分はお勉強なんだからね」

「萌木さん、いいことおっしゃるわねえ」

緑郎のらしくないセリフに、千恵子が、にこやかに微笑んだ。

あまり美味しいとはいえない病院食を胃に詰め込んだ後、知巳は、ぼんやりとベッドに横になっていた。

大事を取ってここにいるが、入院するほどの状態ではない。傷口の縫合も済んでいる。

昼間寝たせいか、知巳は、奇妙に寝つかれなかった。

と、控えめなノックの音が、病室に響く。

「……どうぞ」

知巳は、ドアに向かって声をかけた。

病室は四人部屋だが、いるのは知巳だけである。朱美たちは、夕食前に帰っていた。

入ってきたのは、彩乃だった。

「彩乃先輩……」

「もう、面会時間、終わりだったんだけど　看護婦さんに無理言って、入れてもらっちゃった」

べろっ、と舌を出してから、彩乃は、ベッドの傍らの椅子に座った。

「朱美さんに電話で聞いて、びっくりしちゃった。ごめんね。もっと早く来ればよかったんだけど、聞いたの、ついさっきだから」

「いえ、その……嬉しい、です」

上体を起こし、頬を赤く染めながら、知巳が言う。

「知巳くん……元に、戻ったのね……」

言いながら、彩乃が、知巳の右手を、そっと両手で包む。

「知巳くん……」

そのまま、彩乃は、知巳の右手を自らの頬に押し当てた。彩乃のなめらかな頬が、涙に

濡れている。

「せっかく戻ったのに、ケンカなんかして……」

「ごめんなさい、心配かけて」

子供のように素直な口調で、知巳が謝る。

「誰に、こんなふうにしたの？」

そう訊かれて、知巳は、一瞬言葉に詰まった。

「……先輩の、知らないヤツですよ」

そして、そう答える。

「そうなの？」

彩乃は、身を乗り出し、知巳の顔をのぞき込むようにして、訊いた。

(あ……)

彩乃が何の気なしにベッドに置いた手が、薄手の布団越しに、ちょうど知巳の股間に触れる。

「知巳、くん？」

顔を赤くする知巳に、ちょっと目を見開いてから、彩乃は、自分がどこに触れているかに気付いた。

が、その白い頬を桜色に染めながらも、手をどかそうとはしない。

「知巳くん……かたくなってきたよ……？」

「あ、先輩……」

微妙にくにくにと股間を刺激する彩乃に、知巳が上ずった声をあげる。

しかし、知巳はされるがままで。

久しぶりに感じる、ペニスに熱い血液が集まっていく、むずがゆいような感覚。

そして、次第に硬度と容積を増しつつあるその部分に流れ込んでいる血液のうちの一部は、かつて朱美の体を流れていたものなのだ。

言いようのない興奮が、知巳の動悸を早める。

「知巳くん……」

愛しそうにその名前を呼びながら、彩乃は、知巳の下半身を隠す布団をめくりあげた。

機能的だが無愛想なデザインのパジャマのズボンが、あからさまにテントを張っている。

「はあ……」

彩乃は、熱っぽい吐息をつきながら、まるで小さな子供の着替えを手伝うように、知巳のズボンをずり下ろした。

そして、トランクスの前をくつろげ、すでに十分に勃起したペニスを解放する。

彩乃は、眼鏡の奥の目をきらきらと光らせながら、熱くたぎるペニスに顔を寄せた。

「あ、先輩……俺、シャワー浴びてないから……」

慌てたようにそう言う知巳に、くすっと笑いかけてから、彩乃は、浅ましく静脈を浮かせたシャフトに、その滑らかな頬を寄せた。そして、嬉しそうに目を細め、すりすり頬

擦りをする。

「ふうん……知巳くんの匂いがする……」

そして、普段の彼女からは考えられないような淫らな声でそう言ってから、ぱっくりと亀頭部をその口に収めた。

「ああ……センパイ……」

知巳は、花びらのような彩乃の唇が自らの分身を咥えている様を、どこか茫然とした顔で眺めている。

彩乃は、もごもごと口を動かし、口内に唾液を溜めてから、ぬるりとペニス全体を口の中に滑らせた。

「あう……」

知巳は、他愛もなく快樂の声をあげてしまう。

彩乃は、その柔らかな唇と舌で、自らの唾液を丹念に知巳のペニスに伸ばしていった。

知巳のペニスが、ベッドサイドの小さな蛍光灯の光を、てらてらと反射する。

ひとしきり知巳のペニスを味わった彩乃は、ゆっくりと口を離した。

その紅い唇と、赤黒い亀頭の間を、一瞬、銀色の唾液の糸が繋ぐ。

彩乃は、知巳のペニスの根元に両手の指先を添え、舌を伸ばした。

そして、慎ましやかに目を閉じながら、てろっ、てろっ、とペニスの表面を舐め上げる。

あくまでソフトな、むずがゆい快感に、知巳は我知らず右の拳でシーツを握っていた。

ひくひくと震え、鈴口からカウパー氏腺液を溢れさせるペニスをあやすように、彩乃が、舌の裏側の柔らかい部分で、亀頭の部分を撫で回す。

そうしてから、尖らせた舌先で雁首をえぐり、裏側の縫い目の部分を何度もなぞった。

さらには、苦い先走りの汁にまみれたペニスの先端を口内に収め、くるくると舌を回して刺激する。

「あ……あっ……ん……ああ……」

知巳は、もう、いつ射精してもおかしくない状態だ。

そんな知巳の射精欲求を危ういところで止めているのは、彩乃の口内をスペルマで汚したくないという気持ちだけである。

知巳は、苦痛に耐えているような表情で、必死で射精への誘惑を退けていた。

「はあ……っ」

彩乃が、根負けしたように、ペニスから口を離した。

現金なもので、フェラチオを中断されると、なんとも言えない喪失感を感じてしまう。

「ごめんね……あたし、ガマンできなくなっちゃったみたい……」

そう言いながら、彩乃は、今まで座っていたイスから立ちあがった。

そして、するりとスカートを脱ぎ、綺麗にたたんでから、ショーツも脱ぐ。

雪のように白い肌とは対照的な艶やかな黒い陰毛が恥丘を飾っている様を、知巳は、じっと凝視してしまった。

「あんまり見ないで……」

上半身にブラウスをまとっただけの彩乃は、恥ずかしそうに目を伏せながら、ベッドに上がった。

そして、膝立ちの姿勢で知巳の腰をまたぎ、その両肩にそれぞれ両手を添える。

知巳は、思わず、彩乃の脚の付け根に右手を伸ばしていた。

驚くほど熱く潤んだその部分が、知巳の指先を迎え入れる。

「あたしね……おしゃぶりしてるだけで、こんなになっちゃうの……」

そう言いながら、彩乃は、ゆっくりと自らの秘部を屹立するペニスに近付けていった。

知巳が、さっきまで彩乃のクレヴァスに触れていた右手で、ペニスの角度を調節する。

「はア……ん」

知巳の亀頭部分が、ほころんだ肉襞の間に潜り込み、膣口に触れたとき、彩乃は嬉しげなため息をついた。

「知巳、くん……」

そして、知巳の耳元でそうささやきながら、腰を落としていく。

彩乃の膣内に、知巳のペニスが飲み込まれていった。

柔らかく熱い膣肉が、一部の隙間もなく、知巳のその部分を包み込んでいく。

「あ……ああ……あう……っ」

あの淫夢を除けば、まだ二度目の彩乃の中の感触に、知巳が声をあげる。

そして、彩乃の貪欲な牝の器官が、知巳のペニスを根元まで啜えこんだ。

「あはア……」

たくましい牝の器官が、自身の一番奥の部分を支配している感覚に、彩乃がひどく満足げな声をあげる。

「ごめんなさい、あたし、もう、ガマンできない……」

そう言って、彩乃は、ぐいぐいと自ら腰を動かし始めた。

「あ、せ、先輩っ！」

知巳が、悲鳴のような声をあげた。

つい先ほど、濃密な口唇愛撫によって追い詰められていたペニスを、彩乃の靡肉が容赦なくこすりあげる。

「だ、だめです……そんなにされたら、俺、もう……」

「ごめんね……で、でも、止まんない……止まんないよ……」

ますます激しく腰を使いながら、彩乃は知巳にそう訴えた。

「あ、だめ……出る……出ちゃう……！」

あまりに早い幕切れに歯噛みしながらも、知巳にはどうすることもできない。

呆気なく臨界を突破したペニスが、びゅうううっ！ と彩乃の膣内に精液を迸らせる。

「はあああっ」

彩乃は、嬉しげな声をあげ、ぎゅっ、と知巳の頭を両腕で掻き抱いた。

「ああ……あ……あああ……」

知巳は、なんとも情けない声をあげていた。

無論、未だ彩乃の性感は絶頂にまで高まっていないが、そんな泣きそうな声をあげている知巳を抱き締めていると、なぜかいったときと同じような満足感を覚えてしまう。

ぶるるっ、と知巳の体が、震えた。

「はぁ……はぁ……はぁ……はぁ……」

彩乃は、知巳の顔を自らの胸に押し付けるようにしながら、しばらく、この短距離走のような行為の余韻を楽しんだ。

そして、名残惜しさを感じながら、ゆっくりと身を離す。

「ご、ごめんなさい、先輩……」

もともと、どこか子供っぽいところの残っていたその顔に、ますます幼い表情を浮かべながら、知巳が言った。

「俺……あっというまに……」

「そんなふうに謝らないで、知巳くん」

ちゅっ、と知巳の額に口付けしながら、彩乃が言った。

「あたしこそ、すごく久しぶりに、知巳くんにしてもらえたから、嬉しくて……つい、夢中になっちゃったの。ごめんね」

そう言いながら、彩乃は、ちゅっ、ちゅっ、と知巳の頬や首筋に、キスを浴びせる。

「ああ……彩乃先輩……俺……」

右手だけを、彩乃の背に回しながら、知巳が言う。

と、彩乃が、眼鏡の奥の黒めがちな瞳を、はっと見開いた。

「え、えっと……知巳くん？」

彩乃の蜜壺に収まったままだった知巳のペニスが、次第に、力を取り戻しつつある。

「あ、す、すごい……あたしの中で、どんどん、おっきくなってる……」

内側から膣肉を押し広げられるような感触に、甘く濡れた声をあげながら、彩乃は悩ましげに眉をたわめた。

そして、我慢できなくなったかのように、もじもじとその白いヒップを動かす。

そんな彩乃の膣内で、知巳のペニスは、すっかり臨戦体制に戻っていた。

「あん……す、すてき……」

彩乃が、うっとりつつぶやく。

そんな彩乃の言葉に励まされたかのように、知巳は、ぐっ、と下から腰を突き上げた。

「はウ……ン！」

彩乃は、そのしなやかな体をのけぞらせた。

知巳が、右腕だけで上体を支え、ぐいぐいと腰を動かす。

そんな知巳の反撃に、彩乃は切なげな喘ぎをこぼしながら、ふるふるとかぶり振った。癖のない艶やかな黒髪がはらはらと宙で踊る。

その接合部からは、白く濁った愛液が止めどもなく溢れ、知巳のトランクスをぐっしょりと濡らしてしまっていた。

が、無論二人とも、そんなことには一向に気付いていない。

ただただ、互いにもたらしあう淫楽に夢中になって腰を使っているのみだ。

「はぁ、はぁ、はぁ……」

さすがに体がきつくなっただのか、知巳が、動きを緩めた。

「ああん、知巳くん……」

甘えるような口調で、彩乃が淫らなおねだりをする。

「先輩、こういうふうに、動いてみて……」

知巳が、右手だけで、彩乃の腰を丸く円を描くように誘導した。

「あ、はア……うん……き、気持ちイイ……っ」

知巳に言われるまま、腰をグライドさせながら、彩乃が声を漏らす。

「彩乃先輩、俺のチンポ、いいですか？」

彩乃の淫らさに当てられたように、ことさら下品な言葉で、知巳が訊く。

「うん、いいの……知巳くんの、彩乃の中で、ぐりぐりして……すごく、感じるの……」

彩乃は、どこか幼い声で、そんなことを言った。

「俺も、感じます……彩乃先輩のオマンコ、熱くて、ぐちゅぐちゅで、融けちゃいそうですよ……」

「やん、やあん！」

そう言いながらも、彩乃は、どんどん腰の動きを大胆にしていく。

知巳は、第一ラウンドの二の舞を避けようと、積極的な攻勢に出るべく、再び腰を突き上げた。

「あ、あん！ んあ！ はあああっ！」

同調した二人の動きによってもたらされる快樂に、彩乃は、ここが病院であることを忘れてしまったような声をあげた。

知巳が、そんな彩乃の唇をキスでふさぐ。

「んんーん、んう、ふうーん」

そんな媚声をあげてから、彩乃は、ぴちゃぴちゃと知巳の舌に舌を絡めた。

知巳も、負けじと彩乃の舌を吸い、口腔を舌先でくすぐる。

二人は、唾液がこぼれるのも構わず、互いの唇を貪った。

そうしながらも、その腰の動きを休めようとはしない。

「んはっ」

呼吸が苦しくなったのか、彩乃は唇を離し、はぁはぁと息をついた。

知巳と彩乃の視線が、絡み合う。

「知巳くん……あん……あ、あたし……イきそう……」

「先輩……俺も……俺も……」

「いっしょに……きて……知巳くん……」

そう言いながら、彩乃は、きゅうっ、と膣肉を収縮させた。

「ああああッ！」

知巳が、驚愕と、そして凄まじい快感に声をあげた。

彩乃のその部分が、まるで独立した軟体生物のように、ざわざわと動いたのだ。

膣内の肉襞が、何千もの微細な舌となって、ペニスの表面をこそくように刺激する。

「す、すごい……！ あっ！ ああッ！ ンああっ！」

彩乃の秘技に、知巳は悲鳴のような声をあげ続ける。

そして、無茶苦茶に腰を動かし、突き上げた。

ぐうっ、と知巳のペニスが一ときわ膨張したように、彩乃には感じられた。

絶頂の予感が、ぞくぞくぞくっ、と彩乃の背筋を駆け上る。

「イ……ク……っ！」

そう言いながら、知巳は、彩乃の体を右腕一本で抱き寄せた。

そして、彩乃のその部分の一番奥に向かって、大量の精を注ぎ込む。

「ああああああッ」

びゅうううっ、と熱いスペルマが体の中で迸る感触に、彩乃が、歓喜の声をあげた。

「イ、イク……イっちゃうの……イクうううううううーっ！」

そして、その背中に爪を立てるようにしながら、両腕で知巳にしがみつく。

びくん、びくん、と彩乃の体が痙攣した。

そして、二人の動きが止まる。

つい先ほどの淫らな嬌声が嘘のように、病室は、静寂を取り戻した。

「あ……は……ああ……はあ……っ」

しばらくして、忘れていた呼吸を思い出したように、知巳と彩乃は、息を整える。

そして、快楽に潤んだ瞳で、お互いを見詰め合った。

「……やっぱり、入れ替わったりはしないね」

「え……？」

「ちょっと、残念」

くすっ、と微笑みながら、彩乃が言う。

知巳が、かすかにとまどったような表情を、その顔に浮かべた。

そんな知巳の髪を、彩乃が、優しく撫でる。

「でもね……知巳くんと一緒にイけて、あたし、すごい幸せ……」

彩乃は、そう言って、知巳の右の肩に、ことん、と頭を預けた。

「俺もですよ、彩乃先輩」

髪を撫でられ、敏感になった体をぞくぞくと震わせながら、知巳が言う。

そして二人は、淫らな体液にまみれた腰を密着させたまま、目を閉じ、唇を重ねあった。

エピローグ

その日、彩乃は、知己を例の地下室に呼び出していた。

あの、緑郎の部屋である。様々な秘密を共有することとなった四人は、交代でこの部屋を使うことにしたのだ。

五月も半ばをすぎた週末。そろそろ、一学期の中間テストの準備を始めなくてはならない時期である。

「だから……試験終わるまでは、お預けね」

そう言いながら、彩乃は、ちゅっ、とベッドに並んで座る知己の唇を軽くついばんだ。

「そうですか……」

知己が、ひどく寂しそうな声で、言う。

「そんな顔しないで。だから今日は、うんと楽しんじゃお」

「は はい」

そう返事をする知己を、彩乃が、ベッドに押し倒した。

そして、その体に覆い被さり、濃厚なキスをする。

知己は、負けじと、下から彩乃の胸のふくらみに手を重ねた。

ブラウスの上から乳房を揉むと、彩乃が、切なそうに眉をたわめる。

彩乃の胸の柔らかな量感を楽しんだ後、知己は、ブラウスのボタンを一つ一つ外し始めた。

彩乃も、知己のワイシャツを脱がせていく。

ほどなく、二人は全裸になった。

ちゅ、ちゅ、と互いの首筋にキスをしながら、相手の股間に手を伸ばす。

「あん……」

早くも潤み始めているその部分を指で触れられ、彩乃は甘い声をあげた。

そんな彩乃の体をくるりと裏返し、知己が上になる。

知己は、優しく彩乃の胸をもみしだきながら、その頂点の乳首を唇で交互に吸った。

そして、知己の唾液に濡れ、固く尖った乳首を、舌で弾くように舐る。

「あぁん……きもちイイ……」

うっとりと言いながら、彩乃は、知己のペニスをゆるゆるとしごいた。

すでに知己のペニスは痛いほどに勃起し、きりきりと反りかえっている。

彩乃は、その先端部分を、手の平ですりすりとイタズラし、溢れる先走りの汁を、指先で伸ばしていく。

二人は、互いの繊細な部分を丹念に愛撫しあった。

「ソウン……知己くん、横になって……」

そう言われ、知巳は、素直にまたベッドに仰臥した。

そんな知巳の頭を両膝でまたぎながら、彩乃は、ペニスに顔を寄せる。シックスナインの体位だ。

「ああ……」

ペニスの性臭にうっとりとした笑みを浮かべてから、彩乃は、ぱっくりとそれを口内に収めた。

「あく……っ！」

生温かい口腔粘膜がペニスを包み込む感覚に、知巳が声をあげる。

そして知巳は、彩乃の丸いヒップに手を添えて、魅惑的な肉の花びらに舌を伸ばした。

愛液の、どこか甘いような酸味を舌先に感じながら、ぴちゃぴちゃと音を立てて、ラビアを舌で攻める。

柔らかく開いた肉の割れ目からはとろとろと蜜が溢れ、それは、知巳の口元を濡らしていった。

知巳は、彩乃のお尻をすりすりとして手で愛撫しながら、尖らせた舌先を膣口に刺し入れた。

「ふう～ン」

そのままじゅぼじゅぼと舌を肉穴に出入りさせると、ペニスを口一杯にほおぼった彩乃が、媚びるような声をあげる。

そして二人は、ひとしきり互いの性器を口で味わった。

相手の体が性感に震え、おののく様が、ますます興奮の火に油を注ぐ。

「ん……ン、んぐ……ふうん……ぶはっ……」

そして、とうとう、彩乃はがまんできなくなつたように顔を上げた。

「知巳くん……あたしの中に、コレ、頂戴……」

ぞくぞくするような艶っぽい流し目を、自分のお尻の下の知巳の顔に向けながら、彩乃がおねだりをする。

こく、と知巳が肯くと、彩乃は体の方向を変え、知巳の股間にまたがった。

そんな、淫らな姿勢をとる様子にも、どこか、たおやかさのようなものがあるように思える。

淫靡さと優雅さが奇妙に融合した、白い裸体

それが、知巳の小柄ながら引き締まった体に覆い被さり、ためらいがちに口付けをする。

知巳は、彩乃の肩に手を添え、夢中でそのキスに応えた。

互いの体液で濡れた舌で、互いの口腔をまさぐる。

そして彩乃は、ゆらゆらとその白いヒップをゆらしながら、熱く濡れたその部分で、知巳のペニスの先端を捕らえた。

「ン……」

ペニスに軽く右手を添え、ぬぬぬっ、と自らの中に飲み込んでいく。

「ンあ……」

「うっ……」

牡と牝の粘膜がこすれ合う生々しい快感に、二人は、声を漏らす。

知巳と彩乃の体が、ぴったりと重なった。

膣内を支配するペニスの感触を楽しむかのように、彩乃が、うっとり目を閉じる。

同じように目を閉じていた知巳が、はっと表情を緊張させた。

そして、開いた目を、バスルームにつづくドアに向ける。

「どうしたの？ 知巳くん」

「風呂場に、人の気配が……」

さすがに硬い声で言って、身じろぎしようとする知巳の体を、彩乃は、白くしなやかな腕でそっと制した。そして、ドアに意味ありげな視線を寄越す。

「え？」

知巳が小さな驚きの声をあげたとき、ドアが、開いた。

「お兄ちゃん、ニブすぎだよお」

くすくす笑いながら、赤いボンテージファッションに身を包んだ朱美が、姿を現す。

ちょうど、ビスチェとショーツの形をした衣服だが、その妖しい光の反射具合から見ると、材質はエナメルだろう。そのショーツからは、ペニスに模して作られたシリコン製らしき淫具が生え出ている。

そんな倒錯的な格好をしている朱美の後ろには、奈々がいた。

黒い、やはりエナメル製らしきコルセットで胸から下を締めつけられ、そのたわわな乳房が、ますます強調されている。しかも、下には何も身につけていないため、無毛の恥丘が剥き出しだ。その上、両手は体の前で革手錠で戒められ、口はやはり革製らしきマスクで覆われていた。

さらには、奈々のマスクにも、ペニスの形をしたディルドーが付属している。ちょうど、双頭ディルドーの片方を、口内に収めた状態で、幅広の革のバンドで固定されている、といった形だ。

妹と従妹のあまりにビザールなそのコスチュームに、知巳は言葉もない。

「あ……知巳くんの、あたしの中でもっとおっきくなった……」

悪戯っぽい顔で彩乃が言うと、知巳は耳まで真っ赤になった。

「こ、これって、どういう……」

そして、どうにか、それだけを言う。

「この前、四人でしたとき、すっごく気持ちよかったですよ？」

そう言いながら、朱美はベッドに近付いた。奈々が、従順にそれに付いてくる。

「だから、これからも、一緒にしようって話になったの。奈々も、和泉先輩も、ボクも…
…ここにいる人、みんなが、お互いを好きだから」

朱美が代表して話すその想いを、彩乃と奈々も共有しているのだろう。三人の少女は、それぞれ、恥ずかしそうに頬を染めながらも、濡れた瞳を知巳に向けている。

「お兄ちゃんだって、奈々や……ボクのこと、嫌いじゃないでしょ？」

「それは、そうだけど」

根が生真面目な知巳は、この状況にしっかりと興奮しながらも、今更のように口籠もっている。

「別に、誰が一番好きかなんて、野暮なこと訊かないからさ」

そう言って、朱美は、奈々に目で合図した。

奈々が、こっくりと肯いて、ベッドの、知巳と彩乃の脚の方に、上がる。

その、鉄パイプ製の大きなベッドは、三人分の体重を受けても、まだ余裕があるようだった。

「和泉センパイ……お風呂で、奈々と、どうしようかって話したんですけど……」

ちょっととまどったような彩乃の顔に、小悪魔的な微笑を浮かべた顔を寄せ、朱美が言った。

「こういうのは、どうですか？」

「ひゃんっ！」

彩乃が、悲鳴をあげた。

奈々が、革手錠で戒められた手の指先で、くにくにと彩乃のアヌスを愛撫しだしたのだ。

「や、やめて、そんなトコ……あ、ああん……っ」

間違いのない快楽の声をあげながら、彩乃が身悶える。

括約筋が収縮し、膣内のペニスを刺激しているのだろう。知巳も、彩乃の体の下で、予想外の快感に目を見開いている。

朱美も、奈々に加勢するように、彩乃のヒップの側に回った。

そして、隠し持っていた潤滑ゼリーを、彩乃のセピア色の肉のすばまりに塗りこんでいく。

「んっ……んああ……ダ、ダメ、そんな……」

はしたなくも肛門で感じてしまっているのを、知巳に見られるのが恥ずかしいのか、彩乃は、その白い顔を真っ赤に染めて、いやいやをする。

しかし、彩乃の排泄器官は、突き入れられた奈々の指を、易々と飲みこんでしまった。

ふーっ、ふーっ、と鼻で息をしながら、奈々が夢中になって彩乃のその部分を指で犯す。

彩乃のアヌスは、強烈に締めつけながらも、驚くほどの柔軟性を見せ、奈々の指の根元までの侵入を許してしまっていた。

奈々が、大胆に指をピストンさせる。

「ああああああッ！」

前と後ろの穴を同時に犯され、彩乃は、絶望の入り混じった歓喜の声をあげた。

知巳も、薄い肉の壁越しに、奈々の指の動きをペニスで感じている。

ぬるん、と奈々が、指を抜いた。

そして、ほっと一息つく彩乃のアヌスに、ペニスギャグのもう片方をあてがう。

「ひ……！」

彩乃が、息を飲んだ。

「してあげて、奈々」

朱美が、口元に笑みを浮かべながら、G oサインを出す。

「あ、ダメ！ ゆるして……ンあああああッ！」

指とは比べ物にならないペニスギャグを直腸に挿入され、彩乃が、その体をのけぞらせる。

奈々は、動物のように四つん這いになりながら、口にはめたその道具で、彩乃の体を犯していった。

「う、うわ……すごい……ううっ……」

かつてない強烈な締め付けと、すぐ向こう側のディルドーの感触に、知巳も思わず声をあげてしまっている。

「ふふ、和泉センパイ……お兄ちゃんも。ボクと奈々のアイデア、気に入った？」

そんな朱美の言葉にも、二人は、答えられるような状態ではない。ただ、変則的な快楽に喘ぎながら、互いの体を抱き締めるだけだ。

「訊くまでもなかったみたいね」

そう言いながら、朱美は、健気に頭を振りながら、二人の快楽に奉仕する奈々に目を向けた。

そして、ベッドに上がり、まだ辛うじてスペースの残っている奈々の後ろ側に、膝を付く。

「奈々にも、ご褒美あげなきゃね」

そう言って朱美は、ふりふりと可愛く踊っている奈々の丸いヒップに手をかけた。

そして、すでに十分に濡れているクレヴァスを、股間のディルドーで一気に貫く。

「ふぐうううう！」

ギャグの合間から唾液を溢れさせながら、奈々はくぐもった声をあげた。

が、切なげにたわめられた眉の下で、目許がぼおっと染まっているところを見ると、この状態で朱美に犯されることに、非常な快感を覚えていることだけは確かだ。

朱美は、かつて兄の肉体に宿っていたときと同じように、ぐいぐいと腰を使って、奈々を後ろから攻めたてた。

早くも白く濁った愛液を太ももの内側に垂らしながら、奈々も、ペニスギャグで彩乃のアヌスを犯す。

彩乃は、ぼろぼろと涙をこぼしながら、この倒錯的な、しかしどこか充足感をともなった快楽に身を任せていた。

そして知巳は、そんな彩乃の膣肉の動きに、必死で射精をこらえていた。

(こんなことしたら、また、入れ替わっちゃうだろ！)

そんな朱美に言うべきセリフも、言葉にならない。

(そしたら、どうするんだよ……?)

が、そうなったときに自分達がどうするのか、知己には、分かりすぎるほどに分かっていた。

朱美の体に宿り、彩乃や奈々と絡み合いながら、朱美が宿る自らの体に犯されるイメージ

それを目蓋の裏に見ながら、知己は、彩乃の中に、かつてないほど大量のスペルマを放出したのだった。

終

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw